

## 01 エッセイ

2015年04月 「お金って何だろう」 山形浩生、岡田斗司夫 光文社新書

彼らを感じているのは、「経済的な格差」ではなく「自由の格差」なんですよ。「なんであいつはあんなにお金を持っているんだ？」ではなく、「なんであいつはあんなに自由なんだ？」と。

彼らは十分に働き者なんだけど、その頑張る方向が僕らと違うだけ。労働時間を減らすためには、血の涙を流すくらい努力する。

自由を最大化しようとする行動原理が人間にはあるのではないかと考えていたんですが、それが就活問題や「働いたら負け」のニートに当てはまるとは思っていませんでした。

2015年04月 「冷戦終結の真実と21世紀の危機」 山内聡彦 NHK出版新書

2015年05月 「寂しさの力」 中森明夫 新潮新書

人はなぜさみしいのか？それは死ぬからでしょう。50歳を過ぎて、やっとわかった。私の母は死にました。やがて、私も必ず死ぬ。そうして、あなたも死ぬでしょう。この世に死なない人間はいない。人生はほんの一時です。人はさみしさから生まれ、さみしさの彼方へと消える。

突然、身がふるえます。たまらない恐怖感に襲われました。自分は死ぬのだ。いつか必ず死ぬ。この世界から永遠に消えてしまうんだ。そう思うと、泣きそうでした。さみしい、さみしい、さみしくて、たまらない。

さみしい、さみしくて、たまらない。死ぬほどのさみしさに襲われたとき、ぱっと光が射して、その彼方から、あたたかいものが自分を包んでくれる。そのあたたかさがあったからこそ、今まで私は生きてこられたのだ。ありがとう、お母さん。

2015年03月 「リニア新幹線巨大プロジェクトの真実」 橋山禮治郎

東海道新幹線利用者は2012年度で1億4900万人。乗車率62%。

総工費9兆円。取り返しのつかない金額。少子化の将来、絶対に黒字化しない。

走行区間の大部分は地下40m以深の地下及びトンネルとする。(71%)

東京―大阪4往復/h。各駅1往復/h。利便性で劣る。既存新幹線改修に力を入れるべき。

磁気浮上方式であるために既存の新幹線や鉄道のネットワークとは全く切り離された存在である。さらに中間駅設置が想定されてこなかったことが物語るように、中核都市間の連結や地域の振興に資する考えはないに等しい。

鉄道の高速度は否定すべきではないが、高速度で覇権を争う意味もないし、またその必要もない。鉄道に求められるのは、第一に安全性・信頼性であって、次が利便性・低廉性ではないだろうか。

計画が途中まで進んでいる段階で工事計画を中断したり、断念することはほとんどない。またできない場合が多い。これこそインフラプロジェクトの宿命と言うべきであろう。走り出したら戻れない。止まらない、止められない。残された道は「やるしかない」という選択である。東京湾横断道路、使用済み核燃料再処理施設、高速増殖炉、長良川河口堰、諫早干拓、八ツ場ダム等がその具体例である。

着工する前に徹底した事前評価を行い、計画にある程度の柔軟性を持たせ、着工後でも引き返し不可能なところに来る前にもう一度冷静な昼間評価を行うことが必要。

私たちはどこまでスピードを求めるのだろうか、なぜ求めるのだろうか、それで何を得るのだろうか、それを加速させてきたのは技術なのか、それとも私たち自身なのだろうか。。決定的な不安は、地下走行中の異常発生時の救済措置である。

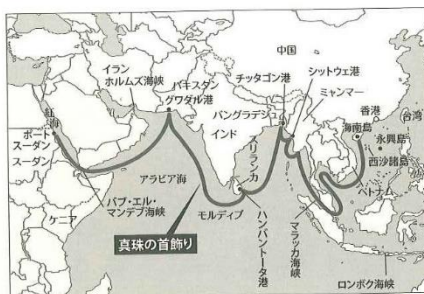
2015年03月 「東アジアの動乱」 武貞秀士 角川 ONE テーマ 21

地政学的な見方が必要。世界は動乱の時代を迎えており、混沌としつつあるように見えるが、実は世界が3つのグループに分裂する過程で起きているのだ。陸上輸送路を利用して貿易するランドパワー、海上輸送路を活用して貿易をするシーパワー、そのどちらからも影響を受けないイスラム勢力の3つのグループである。

富山県を中心とした「逆さ地図」 中国の「真珠の首飾り」

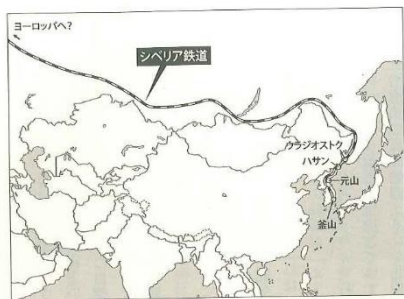


富山県を中心とした「逆さ地図」。日本が朝鮮半島や中国に覆いかぶさっている様子がよくわかる



中国の「真珠の首飾り」

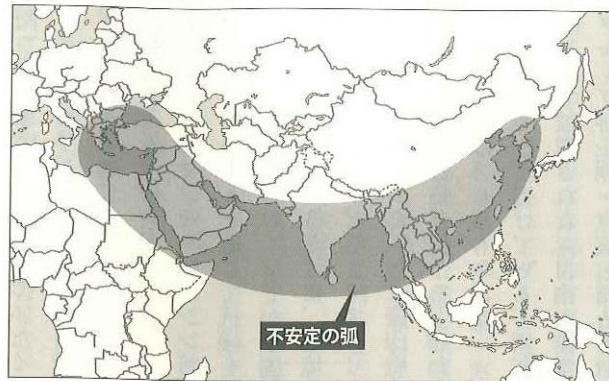
韓国の「シルクロード・エクスプレス構想」 北朝鮮の「ゴールデントライアングル」



壮大なシルクロード・エクスプレスの構想



不安定の弧



不安定の弧。北朝鮮やイラクなどが入る

毎日、近隣から「日本は軍事大国を目指す国」「歴史の反省をしない国」というバッシングの声が聞こえてくる。日本がどれだけ努力をしても近隣諸国と和解できないのは、日本が持っている有利な地政学的条件に対して、それらの国が過度に警戒しているからではないか。シーパワーとしての地政学的条件を備えた日本は、同時にランドパワーが羨むほどの条件を備えている。ランドパワーインフラ建設に関する戦前の経験、最新の鉄道技術、環境対策技術である。日本も捨てたものではないではないか。地政学的条件から来る対立構造を打ち破る画期的条件を持っているのは日本だった。

2015年03月 「最貧困女子」 鈴木大介 幻冬舎

障害のある女性を扱うスカウト業者からは「知的障害の作業所で小銭を貰うのか、自分の力で稼いでおしゃれするのか？知的障害の子だっておしゃれはしたいし遊びたい」という言葉。重い。。

彼らは絶対的に、社会が救わなければならない人々。けれど福祉はいま以上の居場所を与えることができるのだろうか。

彼女ら売春の中に埋没し続ける家出少女らもまた、そのほとんどが「三つの障害」＝精神障害・発達障害・知的障害の当事者が、それを濃厚に感じさせるボーダーライン上にあった。障害という言葉がよろしくないなら、こう言い換えよう。彼女らは本当に、救いようがないほどに、面倒くさくて可愛らしくないのだ。一般の人たちが彼女らとコミュニケーションをとれば、3日ともたないかもしれない。だからこそ、彼女らは孤独だ。容姿や安定したメンタルに恵まれた少女らはそこからピックアップされるが、残った少女らは孤独の中、細々とした売春ワークのみで世界とつながる。もう誰も彼女たちをケアしようとししないのだ。あらゆる局面で被害者であり、何も与えられず、虐げられた彼女たちは、ケアされるどころかセックスワークの世界からすらも除外され差別の対象となってしまう。抱えきれないほどの痛みは決して「可視化」されないどころか、「理解できない」としてやはり糾弾の大正にすらなってしまうだろう。ここに自己責任論など、絶対にさしはさむ余地はない。なぜなら彼女らは、その「自己」というものが既に壊れ、壊されてしまっているからだ。これがセックスワークの底の底であり、貧困女子のリアルだった。

大多数の小遣い稼ぎ感覚で援助行為をする少女らの中に、極めて少数の「生きるために売春を続ける少女らがいる」という事実。

世の中で最も残酷なこととはなんだろうか？

それは、大きな痛みや苦しみを抱えた人間に対して、誰も振り返らず誰も助けないことだと思う。そんな残酷は誰もが見たくはない。道端で倒れて七転八倒している女性がいれば、多くの人が手を差し伸べるだろう。

だが、その女性が脂汗を拭きながらも平然を装っていたら？声を掛けても「大丈夫ですから」と遮ってきたら？睨み返してきたら？その女性との間に一枚の壁があったら？人々は通り過ぎるだろう。さらにその女性が何か意味不明なことを喚き散らしでもしていれば、人は目を背けて足早に歩き去るかもしれない。

助けてくださいと言える人と言えない人、助けたくなるような見た目の人とそうでない人、抱えている痛みは同じでも、後者の痛みは放置される。これが、最大の残酷だと僕は思う。何も与えられず、何にも恵まれず、孤独と苦しさだけを抱えた彼女らは、社会からゴミ屑を見るような視線を投げかけられる。もう、こんな残酷には堪えられない。

2015年02月 「イスラム戦争」 内藤正典 集英社新書

ムスリムが、心の平安と家族の平安、そしてムスリムが生きやすい国家を求めたとしても、何もおかしなことはありません。それを力でつぶそうとしてきたから反発が暴力化したのです。そこにジハードの観念が結びついたのです。若いムスリムが過激な方向に吸い寄せられていく前には、必ず、「イスラムする」ことによる心の平安を多少なりとも実感しています。格差や差別を経験しながら、同時に、信仰に心の安らぎを見出しています。この、安らぎを見出した人たちの中から、ごくわずかな人たちが、安らぎを妨げている敵と戦う方向に向かうのです。

2015年02月 「イスラム国の正体」 国枝昌樹 朝日新書

イスラム教徒16億人のうちスンニ派が約84%。シーア派が約14%といわれています。「イスラム国」はスンニ派です。2つの宗派にはそれぞれ、さまざまな分派や流派があります。第4代カリフのアリーはムハンマドの親族でしたが、その後継のカリフを選ぶ際「スンナ」（慣行）を重視する人たちは、これまで通り仲間たちによる選挙でカリフを選ぼうとしました。これがスンニ派。一方の人たちは、血筋を重視して「シーア」（党派）を組み、アリーの親族をカリフに選ぼうとしました。これがシーア派です。

2014年02月 「チャイナハラメント」 松原邦久 新潮新書

市場経済が進展する中で、大金を稼いで成功を収めているビジネスマンや企業経営者はたくさんいますが、技術開発の分野で大きな成功を収めた中国人はほとんどいません。

2015年02月 「財政危機の深層」 小黒一正 NHK出版新書

国債費と社会保障関係費で国の予算の約3/4を占めている。いっぽう、公共事業、文教費、防衛費すべてを合わせても17.6兆円、国の予算規模の8%にもみたくない。

消費税率1%分による税収アップは約2.5兆円から2.7兆円といわれている。社会保障給付費は毎年約3兆円のスピードで膨張する。

政府債務の急増により、現在約9兆円利払い費は、金利水準が変わらなくても10年間で約17兆円に膨らむ見込みだ。

国の歳出のなかで「国債費」に次いで大きなウェイトを占めているのが「社会保障関係費」だ。2014年度の場合、一般会計と特別会計を合わせた国家予算237.4兆円のうち、「社会保障関係費」は78.6兆円(33%)を占めている。さらに地方公共団体の支出分を含む総額、いわゆる「社会保障給付費」は約110兆円にも達する。しかも高齢化の進展により、この額面は今後、さらに大きくなっていくだろう。

世代ごとに、その生涯の受益と負担を推計し、財政のあり方を評価する手法を「世代会計」という。これによると、まだこの世に生まれてきていない将来世代は、生まれながらにして8300万円もの負担を押し付けられている。

現行の社会保障制度は、「賦課方式」を採用している。これは、現役世代が収めた保険料などを同時代の老齢世代の給付金に充てる仕組みだ。高齢化が進展すれば、現役世代の負担が増えることは火を見るよりも明らかだろう。ならば解決策は簡単だ。賦課方式をやめるか、修正すればいいのである。

超高齢化の進む日本でいま、「シルバー民主主義」という仮説が説得力を持ち始めている。

「少子高齢化の進展に伴い、有権者に占める老齢世代の比率が増大し、若い世代と比較して、老齢世代の政治的影響力が増加しつつあるのではないか」

選挙権をもたない20歳未満も含め、日本人の「中位年齢」は約45歳である。20歳以上の有権者で見ると、中位年齢は約53歳。さらに投票者の中位年齢は57歳となる。

シルバー民主主義により、相対的に強い政治力を持つ老齢世代が財政赤字や賦課方式の社会保障制度を通じ、若い世代や選挙権を持たない将来世代に過重な負担を押し付けていることになる。これは、明らかに「政治の失敗」、ひいては「民主主義の失敗」の一例といえるだろう。

2015年02月 「新・戦争論」 池上彰、佐藤優 文春新書

中国の少数民族は人数が少なく、占めている面積が広い。人口についていえば、漢族は94%を占め、圧倒的に優勢である。もし漢族が大漢民族主義をふりかざし、少数民族を差別するならば、それはきわめてよくないことである。では、土地はどちらのほうが多いか。土地は少数民族のほうが多く50ないし60%を占めている。中国は土地が広大で物産が豊富、そして人口が多い、というが、実際には「人口が多い」のは漢族、「土地が広大で物産が豊富」なのは少数民族であって、少なくとも地下資源については、少数民族のほうは「物産豊富」だ

ろう。

中華民族を作るとなれば、当然、ウイグル人、チベット人、モンゴル人をも包摂しなければなりません。けれども、ウイグル人に関しては、ほぼ失敗している。チベット人に関しても、相当むづかしい。ダライ・ラマの帰国を認めれば可能かもしれませんが。モンゴル人に関しては、同化政策はほぼ成功したと言えるかもしれませんが。完全な同化を果たしたのは、女真族（満州族）です。この民族は、今はどこに行ってしまったのかわからない。独自の言語もなくなってしまった。

慰安婦問題の追及が激しいのは韓国内よりアメリカのほうである。もはや韓国に帰らず、また韓国語よりも英語のほうの方が上手になり、子供たちもアメリカ社会に同化させようと思っている在米韓国人たちがやっている運動です。ふるさとの韓国で、その歴史について勉強したこともなかった韓国で、こんなことが行われていたんだ、と聞いて、自分たちの心の祖国を大事にしたいという、ナショナリズム論でいうところの、「遠隔地ナショナリズム」が働いている。民族のサラダボウルと言われるアメリカが、それぞれの遠隔地ナショナリズムの発生地になりつつある。

2015年02月 「議論の作法」 櫻井よしこ 文春新書

議論に臨む際の私の作法は、以下の点です。

- ① 「事実」に忠実であること
- ② 相手の言い分に、十分に耳を傾けること
- ③ 自分が正しいと確信していることは譲らないこと
- ④ ユーモアのセンスを忘れないこと
- ⑤ 日本人としての誇りを基本とすること

人類は一定のルールを共有し、秩序を保たなければなりません。それらはこの地球社会で広く共有されるものでなくてはなりません。民主主義や法の支配、人権、人道の尊重に加え、自由の保障が重要な柱でしょう。これらの価値観こそ、実は日本人の価値観なのです。日本の根源的な公正さと優しさに自信をもって世界の論客に立ち向かっていけばよいと思います。

日本の平和主義が理想のみを追うのではなく、国際社会の現実に基づいた力によって支えられるものになるよう、日本人は今、努力をしているところです。

日中友好を進めるのであれば、日本の国内問題である靖国神社参拝への口出しは慎むべきだ。

2015年02月 「哀しき半島国家韓国の結末」 宮家邦彦 PHP 新書

17世紀に、李氏朝鮮がそれまで夷荻だ、禽獣だと見下していた満州地方の女真族が明を圧倒し、中華に清の王朝を樹立した。

夷荻とは文明化しない、すなわち儒教化しない野蛮人であり、禽獣とは人間ではなく獣に等

しい存在をいう。17世紀以降、コリア半島の指導者たちは女貞系の清を徹底的に蔑む一方で、事大主義に基づいて、その夷荻・禽獣に朝貢行って冊封関係に入るという矛盾した世界観と行動様式を維持してきた。この屈折したコンプレックスの塊とも思えるコリア半島の住民の民族性は、李氏朝鮮以降、事大主義という劣等感と小中華思想という優越感を、心中で巧みに均衡させることによって維持されてきたのではないだろうか。

中国は中世・近代を通じて朝鮮に攻め入った事実はない。朝鮮は廊下のようなもので、侵入してくるのは南北からの異民族だけだ。朝鮮は中国にとって地政学上の弱点である。だから中国は朝鮮に攻め入る必要はなく、朝鮮も中国の侵入を恐れない。むしろ両国はワンセットで助け合ってきた。朝鮮には中国に抵抗する意図はなく、中国も朝鮮を占領する意図をもたない。

2015年02月 「沈みゆく大国アメリカ」 堤未果 集英社新書

2014年7月、ニューズウィーク紙は、全米の州と市を合わせた公的年金の総額3兆ドルのうち1/4が高額報酬を取るウォール街のファンドマネージャーに委託されている事実と、情報開示を拒む州議会を批判した。今まで安定運用を続けてきた年金基金は、本来だれのためのものであるのか？この手の博打に失敗したとき、莫大な手数料と短期的な利益を得る人々が一切責任を取らず去ってゆく例を、私たちは嫌というほど目にしてきたはずだ。

2015年02月 「プライドが高くて迷惑な人」 片田珠美 PHP新書

嫉妬のなかには愛よりも自己愛のほうが多いという毒舌を思い出す。自己愛が強いせいで、自分のことしか考えられず、相手にも大切な人間関係があるとか、それなりの事情があるということに配慮するだけの余裕がない。そのため、「私のことだけを考えて」「もっと大事にして」などと要求して、感情的に負担をかけてしまう。

羨望は「陰にこもった、恥ずべき情念」なので、素直に表に出すことができない。

プライドが高くて迷惑な人は、実は満たされぬ現実に欲求不満を抱いていて、自尊心を保つのに苦労していることが多いからである。裏返せば、それだけ自己愛が傷つくことを恐れているわけで、自慢したり、特別扱いを要求したり、他人を支配しようとするのも、自己愛の傷つきから身を守るための防衛にほかならない。

2015年02月 「中国無秩序の末路」 富坂聡 角川 ONEテーマ21

中国ではいま、社会に絶望した人間が「最後に社会に対して一生分の憎しみをぶつけて死ぬ」といった「報復社会」を動機とした犯罪が増えている。これは要するに、人生に絶望した人が自殺する前に、無差別に人を傷つけて巻き込むといった類の犯罪。社会を構成する一人一人の中国人が、「自分が狙われても不思議ではない」と考えている。

2014年10月 「無名の人生」 渡辺京二 文春新書

人間は死ぬからおもしろい。人間、死ぬからこそ、その生に味わいが出てくる。かくいう私だって、まだまだ死にたくありません。今でも世の中に執着がある。けれども、死ぬからこそ、今を生きていることに喜びが感じられるのです。

何年生きようが、生まれたときから同じ一個の人間です。その間に成長したりすることは多少あるとしても、所詮、高が知っている。たとえ百年生きても退屈極まりないものです。人間の生命に限りがあるのは、退屈さにピリオドを打つためではないでしょうか。

この世は、生きていることの実質の宝庫です。そしてわれわれ人間は、五感をもって森羅万象に呼応することができる。

一日が終わってみて、ふとした瞬間、この世がすべて肯定できるような思いにとられる。他人のいやな面も、己の醜さも、全部ひっくるめて、ああ、この世はこういうものなのだと受け入れるときがある。それはなんの理屈もないし、自分から生み出したものでもない。作家や画家は、文章で、あるいは一枚の絵でそういう幸せな瞬間を描こうとするけれど、そんな意識的に作り出そうとする行為でなく、誰でもふとそうした境地に至ることがあると思うのです。いわば、むこうから訪れてくる幸せな瞬間が。だから「他力」なのです。

そもそも人間というのは、黙って生きて黙って死んでいく人が大部分でしょう。もちろん目覚しい業績を上げて有名になったり、自分の主張を世間にとどろかせる人もいるけれど、大半は無名のまま死んでゆく。言葉少なに自分のやるべきことをやって死んでゆくのです。私たちの日々の生を支えているのは、もっとささやかな、生きていることの実質や実感なのかもしれません。

考えてみると、われわれの生きている世界は途方もなく豊穡です。この世界は、いろいろな形に満ちている、声や音色に満ちている。色彩に満ちている。これは実に大変なことだと思います。

私は自分の国の悪口を言う人間が嫌いです。より正確に言うなら、私が嫌いなのは、それがあたかも知識人としての証であるように、良心の証明であるかのように、ただただその目的のために、自国を批判する連中です。

私の理想は、無名のうちに慎ましく生きて、何も声を上げずに死んでしまうことです。

2014年10月 「なぜ時代劇は滅びるのか」 春日太一 新潮新書

このままでは時代劇は滅びてしまう。しかも、多くの人に気づかれぬように、マイナーな存在のまま、ひっそりと——そんな危機感が募るばかりだ。

1960年まで10億人を超え続けていた映画人口が、1961年には8億人台に減少。そこから続落を続け、1963年には最盛期の半分の5億人になってしまった。

お手軽な時代劇なら、お茶の間にいながらタダで見られるテレビで十分。それが、多くの観客の下した結論だった。

邦画各社は制作費が現代劇よりかかるわりに儲からなくなってしまった「お荷物」の時代劇映画の政策本数を大幅に減らしていった。

松竹は太秦の撮影所を閉鎖、下賀茂を傍系の京都映画に管理させた。

東映も任侠映画へ路線変更。時代劇の伝統を守り続けた大映は 1971 年に倒産。

所詮映画は手作り。人材が欠乏すれば終わりです。昔は給料をもらって勉強できた。メジャー系製作がほとんど消えうせ、不定期雇用、契約で食いつなぐスタッフにリッチは程遠く生活に余裕がありません。

テレビ時代劇の危機は、テレビ局の体力、つまりスポンサー企業の体力の問題。

時代劇に高齢者向けというレッテルがある限り、「文化として応援する」というスタンスの大企業でも現われない限り、なかなかスポンサーはつきにくい。

1970 年代半ばを過ぎると様相は変わってくる。斜陽に苦しんできた日本映画界は生き残りをかけた総力戦を展開。劇場作品の大作化、長期興行化を推し進めていく。その結果映画本数は激減した。各撮影所の稼働率も下がる。テレビ時代劇の生産性を向上させることに心血を注ぐようになる。

衰退に向かう時代劇＝これまで幾多の時代劇を生み出してきた京都の撮影所の寂しい状況＝滅び行く伝統文化の世界

京都が苦しくなってしまった要因としてまず挙げられるのは、京都太秦にある東映、松竹の両撮影所が東京の下請けスタジオと化してしまったことだ。

京都のスタッフたちは、与えられた数少ない仕事を「生活のため」黙々とこなしていくしかなかった。京都には先人の培ってきた「伝統」を守るしか道は残されていなかった。

京都の時代劇技術の多くが、時代遅れで古臭いものと思われてしまい、東京の映画会社やテレビ局から敬遠されている。

実は京都のスタッフを使って製作したほうが、質の高い時代劇をどこよりも安く早く仕上げることができる。京都の撮影所には百年の時代劇製作に根ざしたノウハウとチームワークがある。幸いにもまだ撮影所には「人の力」が残っている。着実に代替わりも進んでいる。数多くの腕の良い若きスタッフたちが、映画への愛と己の野心をギラつかせながら、チャンス到来を待ちわびているのだ。彼らが希望を捨てきっていない今なら、まだ間に合う。

映画産業の斜陽化に伴って映画会社の専属制度は崩壊し、新劇も観客動員を落とす中で地位を下げていった。それに代わって台頭してきたのが、芸能事務所だ。芸能事務所は役者としての基礎養成にほとんど時間と手間をかけないまま実践投入させている。

撮影所のシステム崩壊とともに始動できる監督もいなくなった。またテレビ時代劇ではそもそも監督は軽視される風潮にある。テレビ＝一過性。脚本と役者がしっかりしていれば監督は三流でもいい。

時代劇を心の底から愛する人なら、時代劇が死に切れないでこんなに苦しんでいるなら、いっそ自分の手で。。と思ったことはあるまいか。

2014 年 10 月 「ゆとり世代の愛国心」 税所篤快 PHP 新書

国際貢献活動の目的の一つは、自分たちの国のブランド力を高めるところにある。

僕たちはとてつもなく恵まれた国、恵まれた時代に生きている。そしてそれは、多くの先輩たちが異口同音に言うように、箱庭の日本にいただけでは気づくことができない。どんどん世界に出て、いくつもの理不尽に遭遇し、日本人へのリアルな態度を味わって、ようやくはじめて客観的にいまの日本の姿が見えてくる。

僕たち平成生まれは「内向きだ」「ゆとり世代は使えない」と言われることが多い。でもそんなことを言われて白けている場合じゃない。世界中に僕たちの「バカさ」「勇敢さ」を待っている人たちがいる。世界に日本のファンが増えるかどうか、これからの時代ではさらに重要になる。そして、それは、僕たちの勇敢さにかかっているのだ。僕たちにはまだ「失うもの」がない。ならば志の槍を一本胸に、この身一つでどんどん世界へ乗り出していくべきだ。

日本人が世界の各地で称賛を受けるのは、もちろんメイド・イン・ジャパン製品のイメージが大きく寄与しているのはまちがいないでしょう。しかし、何よりも僕たちの印象に残っているのは「日本人」そのものなんです。日本人とビジネスをベンガル人は、みな口をそろえて言います。彼らほど私たちに礼儀正しく、真摯な姿勢で向き合ってくれる人々はいない、と。

バングラディッシュ人に日本企業、韓国企業、中国企業のどこで働きたいかと聞けば、ほぼ同じ答えが返ってきます。一に日本企業、二に韓国企業、三に中国企業です。日本人と接する中で、「横柄な態度をとらない」「われわれを見下さない」「嘘をつかない」「約束を守る」と言った経験を持っている人たちはたくさんいます。ビジネスのパートナーとして日本人には絶大な信頼を勝ち得ているのです。日本人への好印象は漠然としたイメージからくるものではなく、現地で仕事をともにしてきた日本の諸先輩方の尽力によって、具体的に想像されるものだった。日本人にとっては当たり前の「ポライトネス」が大きな評価につながっている。

みなさんは「段階の世代」の先輩から「熱量が低い」と言われているそうですが、気にすることはありません。あの時代の価値観は「日本をどうたてなおすか、どう発展させていくか」というところにありました。その目標は、高度成長を経てある程度、達成されました。日本は豊かになったし、生活水準も高まりました。さらにはインターネットなどのテクノロジーが、ボーダーレスな世界をつくりつつある。彼らは日本をよくすることで精いっぱいでした。しかし、あなたたちは違う。世界が舞台なんです。先輩世代のがんばりは、あなたたちのような若くクリエイティブな日本人をまっています。

東日本大震災のときはだれもが日本への感謝の気持ちを口にしながら寄付してくれた。「バングラディッシュは独立のときから、日本の世話になりっぱなしだった。今度は俺たちが恩を返す番だ。」「日本は兄弟の国だ。バングラディッシュは発展は JICA の助けあつてのもの。このことを僕たちは忘れない」

世界中の国々から寄せられた義捐金とお見舞いの言葉。これは、日本人が各国で一つひとつ積み上げてきた信頼の証左なのではないか。

カネにならなそうな場所、命の危険にさらされそうな場所には中国人の姿はない。そして驚くべきことに、日本人はちゃんといるのである。

ゆとり世代=1987~2003年生まれ

いまの日本が暗いのは、バブル時代に遊びにうつつを抜かしていた世代が、日本に蓄積された富を使い果たしてしまったからだ。それどころか、自分たちの都合で「ゆとり教育」を僕たち平成生まれに押し付け、あとから「失敗作」のレッテルを貼る。そのかたわらで僕たちの目の前に残されたのは、機能不全の年金システムと1000兆円を超える国の借金。上の世代から笑われたり、憐れんだりされると、「何か違うんじゃないの」と思わざるをえない。

2014年08月 「働かないオジサンの給料はなぜ高いのか」 楠木新 新潮新書

2014年08月 「自分の壁」 養老孟司 新潮新書

たとえば目の前に山があったとします。山の映像は脳の中にあります。その山は自分の外部にあるものだ、というのは「自分」という枠を意識できているからです。自分と世界との区別がつくのは、脳がそういう線引きをしているからであって、「矢印はここ」と決めてくれているからです。その部分が崩れてしまえば、目に入るもの、考えていることも全部、脳の「中」にあるわけですから、自分の「中」にあるのと同じです。区別はつきません。世界と自分の境目がなくなっている状態です。

今のように原発関係者を悪人のように糾弾する風潮が続けば、この分野の研究者がいなくなっていく恐れがある。そうなっていくと結局、誰も詳しい人がいなくなってしまう。こんなに怖いことはありません。原発は動かしていても止めていても、誰かが面倒を見なくてはいけないものなのです。

日本人の普段の生活は、世間にある暗黙のルールで動いている。だからその分、普段の生活にさほど関係ないことについて、百家争鳴で言い合って構わないのです。

2014年08月 「中国の大問題」 丹羽宇一郎 PHP新書

タダ同然の国有の土地をなかば強制的に取り上げ、道路やマンションを作って大きな価値を生む——中国の急成長はこの構図から生まれてきた。これまではこうしたインフラ投資が成長を牽引してきた。

尖閣諸島の国有化は妥当だったかどうか。私は少なくとも急ぐ必要はなかったと思う。そのまま放置しておけばおくほど日本の実効支配が固まっていたのに、手を出したために、その戦略は崩れてしまった。非常に残念である。

かつて日本経済が世界をリードした時代、資源のない日本が唯一もっている資源は人材だった。その人材が優れた技術と製品を生み出し、国力を支えてきた。日本が唯一できるのは、世界のどの国よりも信頼できる国民であること、世界に対して誇れるものをつくることだ。それは、いまもむかしも変わらない。

2014年08月 「中国を捨てよ」 石平、西村幸祐 イースト新書

日本人はこれまで、日本を独立したきちんとした国家にさせないために、歴史的に汚名を着せる試みに気づいていなかったのですが、ようやく戦後世代のなかからそういうことに気づく人が増えてきた。日本人が相手のつくった悪い日本のイメージを信じ込んでしまっているのが大変残念ですし、しかも、日本人自身の手でその間違っただイメージを増殖させている。それが日本のいちばんの問題だと思います。

2014年08月 「どの面下げての韓国人」 豊田有恒 祥伝社新書

しばしば韓国人は、もともと文化のなかった日本へ文化をもたらしたのは韓国人であると言いたがる。しかし、現実には、むしろ逆である。単語ばかりでなく、文化、技術をもたらし、李氏朝鮮王朝時代の迷妄、因習、旧弊、混乱、殺戮から、日本が朝鮮民族を解放したくらいに考えるべきである。

韓国は2000年間に960回も外敵の侵入を受けた国

西暦1905年、竹島が、どこの国にも編入されていないことを確認した日本政府は、国際法による無主地として、領有を宣言して認められた。ところが、韓国では、もともと韓国領だった島を、日本が韓国併合の布石として、強奪したものだと説明している。

韓国人はしばしば自尊心を口にするが、実際には、それに欠けるからだろう。いわゆる慰安婦の問題にしても、道徳を持ち出すのだが、結局は日本からの補償を求めると言う金銭問題に墮してしまふ。

最初に朝日新聞が取り上げた金学順さんのケースでも、母親の再婚相手、つまり義父の手で、釜山の置き屋へ売られたと言う最初の報道された事実は、後に報道されなくなってしまった。

そもそも、事の起こりは、1991年の朝日新聞の報道だった。朝日新聞の植村隆記者が、女子挺身隊の記事を書いたのである。このとき、12歳の少女が、挺身隊として、日本軍に暴行されたかのごとく扱われたため、事が大きくなった。

事はわれわれ日本人の名誉の問題であるし、歴史の改ざんを認めることにつながりかねないし、さらに言えば、我々の父祖を貶める行為ですらある。今や日本人は国を挙げて、韓国の虚言、捏造と戦わなければならない。

朝鮮戦争後の韓国の発展には、日本からの技術移転がかかせなかった。今日のPOSCOは、新日鉄の君津製鉄所と同じレイアウトになっている。日本は当時最先端の技術を、友邦として惜しみなく提供したのである。日本側は本当に心血を注いで協力したのである。

ソウルの地下鉄は、日本側の協力で竣工したにもかかわらず、開通式では、そのことに対する礼はもとより、日本の協力という事実に関して一言も言及されなかった。このような恩知らずの韓国に対して、いつまでも口をつぐんでいる必要はない。特に若い人々は、日本による協力、恩恵、援助などの実態を教えられていない。正しい歴史認識が必要なのは、どっち

の国なのか、はっきり教える必要がある。

インスタントラーメンから製鉄に至るまで、現在の韓国の企業のほとんどが、その技術を日本に負っている。日本と言う親韓的でお人よしの国が、すぐ隣にいなければ、今日の韓国の発展はなかったと、はっきり断言できる。日本人は、こういうことを、繰り返し、恩着せがましく、韓国に対して、言い続ける必要がある。日本では、「誰のおかげだ！」というセリフは、よほどのことがない限り禁句になっているが、韓国が反日の妄言を弄するときは、こちらも言ってやるべきだろう。韓国には、以心伝心は通じない。はっきり言わなければ判らない文化なのだ。

朝日新聞、岩波書店にも訴えたい。いったい、日本をどこへ連れて行こうとしているのか？かつて、ナチスドイツを賛美して、日本を破滅に導いた、いつか来た道へ、日本を誘導しようとしているのか。朝日、岩波にも、心ある人はいるはずだ。どうかお願いしたい。日本政府のためではない。日本国の人民のため、どうか良心を取り戻してもらいたい。この情報戦に敗北し、日本が破滅するのを見たくない。この本を、過去40年にわたってコリア・ウォッチャーとして生きてきたわたしの遺言としたい。万一、韓国経済が、途方もない反日から、破綻するようなことが合っても、今度こそ、日本人としては、なんの援助も行わないだろう。日本には、仏の顔も三度、あるいは、どの面下げて、という言葉がある。これ以上、反日を加速させることは、韓国のためにもならないという事実を、はっきり知らせることこそ、本当の日韓親善につながるのだ。

2014年06月 「だから日本はズレている」 古市憲寿 新潮新書

日本には「強いリーダー」や「真のリーダー」がいないと言われる。それは別に嘆くことではなくて、むしろ喜ぶべきことだろう。強いリーダーがいなくても大丈夫なくらい、豊かで安定した社会を築き上げてきたことを誇ればいい。

「今、ニッポンにはこの夢の力が必要だ」なんて後ろ向きになるんじゃなくて、「世界にはニッポンの夢が必要だ」くらい開き直ってもいい。

今の若者は、資本主義や消費社会に対する違和感を表明はするが、真正面からそれに立ち向かっているようには思えない。闘うのではなく、むしろ降りている。

僕たちはまず、「今、ここ」で暮らす自分や仲間を大切にすること。自分たちが生きやすい環境を作ろうとすること。それは、結局社会を良くする事になるのだ。「やさしい革命」は「今、ここ」にいる「僕たち」を充実させることから始まる。

「おじさん」とは、いくつかの幸運が重なり、既得権益に仲間入りすることができ、その恩恵を疑うことなく毎日を過ごしている人のことである。かつては、男性でさえあれば、多くの人が「おじさん」になることができた。高度成長期やバブル期など、経済成長が続いていた日本では企業社会が積極的に若者たちに対してその門戸を開いていたからである。

2014年06月 「韓国人による恥韓論」 シンシアリー 扶桑社新書

2012年2月15日の「ヘラルド経済」紙が紹介しているデータによると、韓国の告訴・告発は乱発されており、なんと人口比で日本の146.4倍。

寒い夜、AさんとBさんが、信号を無視して短い横断歩道を渡りました。Aさんは「これ、いけないけどな」と思いながら急いで走って行きました。Bさんは、「僕は薄着だからな～渡っていいよね。でも、残り的人たちはちゃんと法を守って信号を待たなければならぬ」と当然だと言わんばかりでした。AとBは同じなのでしょうか？

韓国は今、「自分にもっと礼を向け、他人にもっと儀を向ける社会」を望むようになってしまいました。最近流行する「お前が頑張ればいいだろう」という言葉からも、そういう側面が見え隠れしています。このような、自分と他人にそれぞれ別の基準を適用するゆがみが、社会に蔓延しているのです。

南スーダンに派兵されている韓国軍PKO部隊が、同じく派兵されていた日本の自衛隊から弾薬1万発を借りました。ただそれだけで、部隊の責任者がどれだけ叩かれたことか。最後まで韓国政府から日本への謝意はありませんでした。むしろ、「遺憾だ」という声明が発表されました。「この件を軍事大国化の名分とするつもりなんだろう。日本はこの件を利用するな」という趣旨です。

あの東日本大震災の夜、サッカーの応援などに使う「デーハン・ミングック（大韓民国）」という喜びの叫びを何度も耳にしたとき、この国は狂ったと、私は泣いてしまいました。青年層の反日は、ちょっとユニークです。韓国の歴史が一万年だという主張、対馬が韓国の領土だという主張、いずれも大震災で日本は滅ぶという主張、日本は放射能のせいでもう終わった国でもうすぐ全員死ぬという主張などを、わりと本気で信じています。思想教育の問題か、日本が南北統一を邪魔しているとも思っているらしいです。統一すると韓国が先進国になるから、それに劣等感に燃えた日本が邪魔をしているのだそうです。

韓国はデジタル的な考え方で物事を決めます。ゼロかーか、白か黒か、善か悪か、そのどちらかへの極端的なこだわりが現われるのは、実際にはただのバカじゃないのという類の意見が多い。しかしどうやら彼らは本気らしい。

韓国、とくに韓国の青年層は、もはや反日がないとメンタルが維持できない状態にまでおちています。彼らに残された、劣等感という怒りを晴らすターゲットが日本なのです。

韓国の反日は退化しています。ガキから赤ちゃんへ、赤ちゃんから獣へ。そしてこれから加速することでしょう。そうしなければ、精神状態を維持できなくなってきましたから。

日本は言うべきことを言いました。韓国が応じようと応じまいと、日本が損をすることはありません。これが距離を置く外交というものです。「河野談話」のように、日本から積極的に近寄る外交はやってはいけません。絶対、利用されてしまいます。

熱海へ行くために、東京駅で新幹線に乗ろうとした瞬間でした。係員の方が、鉄でできたプレートを持ってきました。並んでいた人たちは、約束でもしたかのようにサッと一歩下がりました。係員は、新幹線とプラットホームの間にそのプレートを掛けました。すぐに車椅子の方が来て、そのプレートから新幹線に乗りました。乗車されたあと、係員はそのプレー

トを持って仕事に戻りました。他の乗客たちも新幹線に入りました。私が驚いたのは、別に障害者の乗車を助けたんだな。。という単純な事実だけではありませんでした。プラットホームのみなさんは、そういうプロセスをあまりにも当たり前のものとして受け止めていたのです。これは当然のことだ、と。一緒に居た家族たちも、「さすがだね」と話していました。決してマニュアルな親切では出来上がらない雰囲気がそこにあったからです。

2014年1月23日の文化日報の」報道によると、なんと、韓国軍のイージス艦に、敵のミサイルを撃ち落とすための迎撃ミサイルは搭載されていないことがわかりました。とりあえず作るのが大事で、見えない所なんか、別にいいと思ったのでしょうか？これじゃ、イージス艦としての存在意味がよくわかりません。いろいろな分野において、日本と韓国では、このような「見えない差」が存在します。水が、空気が、思いが、配慮が、人に踏まれる所が、人を支える所が、何も言えない赤ちゃんの肌に触れるティッシュが、外からは見えないところにある資材が、その「差」を作り上げています。外見を気にする国は、その分、見えない所が脆くなるものではないでしょうか。見えないものだからこそ、見つけたときに凄く嬉しい存在でもあると思うのですが。

日本の皆さんが普通だと思っているこういう「見えない差」こそが、国の自慢です。外から見ないと分からない、日本という国の素晴らしいところです。難しい問題だとは思っていますが、長らく、この見えない差を守っていく日本であって欲しいと願っています。

2014年06月 「日本人に生まれてまあよかった」 平川祐弘 新潮新書

私は教育についての競争原理の排除と、機会の平等でなく結果の平等を尊重する偽善の弊害が、日本を二流国家以下に落としつつあると考えます。

現在の日本が軍事力を持ち自国の安全を守ろうとする体制にあること、そして国民の大多数がそれを支持していること、この現実はその自体がすでに日本国憲法からの実質的な脱却でしょう。

世論調査によると、日本国民の多数は自衛隊の存在を肯定しています。これは憲法の文言どおり日本国が戦力的に丸腰のままであってよいとは世間が思わなくなっているからです。

に日本国民は、日本が武力を持つことから生じる危険性よりも、日本が武力を持たなければ相手につけこまれるのではないかと危険性により大きな危惧の念を抱き始めました。

明治時代の五箇条の御誓文

1. 広く会議を興し万機公論に決すべし
1. 上下心を一にして盛んに経綸を行うべし
1. 官武一途庶民に至るまで各々その志を遂げ人心をして倦まさらしめんことを要す
2. 旧来のろう習を破り天地の公道に基づくべし
1. 知識を世界に求め大いに皇基を振起すべし

日本人が外国語できちんと論理的に自己主張しない限り、この地球社会で我が国は、このまま放っておけば捕鯨問題や、また性奴隷などと言いつてられる従軍慰安婦などの歴史問題

に限らず、言いがかりをつけられ、歪んだ色眼鏡で見られ、妙なラベルを貼られたままになってしまうでしょう。

何を食べて良く何を食べて悪いかは宗教文化によって違います。しかしヒンズー教徒やイスラム教徒はその戒律を他の宗教文化の人に押し付けはしない。他国の食べ物を西洋文化の価値基準で判断する論は感情論に近い。

2014年05月 「**連合国戦勝史観の虚妄**」 ヘンリー・S・ストークス 祥伝社新書

日本がアジア植民地を侵略したのは、悪いことだったろうか。侵略が悪いことなら、世界史で、アジア、アフリカ、オーストラリア、北米、南米を侵略してきたのは、西洋諸国だ。しかし、今日まで、西洋諸国がそうした侵略を謝罪したことはない。どうして、日本だけが欧米の植民地を侵略したことを、謝罪しなければならないのか。東京裁判では、「世界で侵略戦争をしたのは、どちらだったか」ということに目を瞑って、日本を裁いた。

1938年7月、イギリスの日刊紙、「マンチェスター・ガーディアン」中国特派員のティンパーリーが「戦争とは何か」という本を出版した。この本は、南京陥落前後の現地について、その一部始終を見たという匿名のアメリカ人の手紙や、備忘録をまとめて、南京における日本軍の殺人、強姦、略奪、放火を告白したものだ。この本の評価がいつそう高まったのは、その後、匿名の執筆者が国際委員会のメンバーで、南京大学教授であり、南京の著名な宣教師として人気のあったマイナー・ベイツと、やはり国際委員会のメンバーで宣教師のジョージ・フィッチ氏であると判明したことにあつた。ベイツは東京裁判にも出廷し、日本軍の虐殺を主張した。国民党中央宣伝部国際宣伝処処長の曾虚白がティンパーリーに、「お金を使って頼んで、本を書いてもらい、それを印刷して出版した」と証言している。ベイツとフィッチも第三者ではなかった。ベイツは国民党政府「顧問」であり、フィッチは妻が蒋介石夫人の宗美齡の親友だった。

国際委員会の報告によれば、南京に残っていた人口は南京戦の時点で20万人だった。しかし、南京が陥落してから人口が増え始め、翌1月には25万人に膨れ上がった。戦闘が終わって治安が回復されて、人々が南京へと戻ってきたのだ。このことから「南京大虐殺」などなかったことは明白だ。歴史の事実として「南京大虐殺」はなかった。それは中華民国政府が捏造した、プロパガンダだった。

この500年の世界史は、白人の欧米キリスト教諸国が、有色民族の国を植民地支配した壮大なドラマでした。その中であつて、日本は前例のない国でした。第一次世界大戦の後のパリ講和会議で、日本人は人種差別撤廃を提案したのです。

インドネシアの植民地支配は、1596年にオランダが艦隊をインドネシアに派遣したことに始まります。オランダの350年以上に及ぶ植民地支配に終止符が打たれたのは、1942年の日本軍の進攻によるものでした。

アジア諸国が、そしてアフリカの国々が第二次世界大戦後に、次々と独立を達成することができたのは、日本が「アジア人のアジア」を建設するために、大東亜戦争を戦ったからで

ある。「戦後レジームからの脱却」は、そうした大きな歴史の流れから位置づけ、「東京裁判史観」からの脱却を果たすというのが、あるべき姿であろう。

日本が韓国を併合したのは、日露戦争の5年後（1910年）だった。日本は韓国を近代化するために、膨大な労力と費用を投入した。日本の努力はたいへんなものだった。義務教育、大学教育、医療、警察制度、軍隊まで、今日の韓国社会の基礎を作った。イギリスの植民地支配と違って、日本は自国の持ち出しで、韓国を建設するために投資をした。

韓国にはアメリカ軍を中心とする国連軍のための慰安婦が、大勢いる。日本男性のセックスツアーの相手をする女性たちは、外貨稼ぎのために、ホテルに自由に出入できる身分証明書を、国が発行していた。韓国は力をつけている。しかし東アジアの大国は、何といても、日本、中国、インドだ。日本は韓国ともっとも親しい国であるはずだ。韓国は日本とよい関係を結ばない限り、いくら背伸びをしてみても及ばない。韓国人は劣等感を癒すために、日本を苛めて、喝采を叫んでいるが、劣等感はネガティブなものだから、やがてはマイナスに作用する。そのうちに、日本と言う大切な財産を活用できなくなるだろう。日韓、日中関係を歪めてきたのは、日本が卑屈になって、両国に不必要に腰をかがめてきたことが原因だ。日本はこれほど古い歴史と、独自の精神を持っていたはずなのに、アメリカによってすっかり骨抜きにされてしまった。

アジア諸国の欧米による植民地支配からの独立は、日本によって始めて可能となった。

日本が戦争を戦った真実を把握するには、「大アジア」を戦場として、アジア諸民族を搾取する植民地支配者であった欧米諸国と戦い、アジアを解放した「大東亜戦争史観」をもって見る必要がある。

日本の立場が海外で理解されないのは、日本が効果的な発信をしないからだ。日本の主張が、英語で発信されてこなかったことが大きい。その代わりに、村山首相談話のような謝罪が行われてきた。これではまったく逆効果だった。

日本の独立国としての意識が希薄になったのは、戦後の日本国民を支配してきた“平和憲法幻想”がもたらしたものだ。東京裁判で日本は侵略国として裁かれたが、裁判が進行している間に、イギリス、フランス、オランダの諸国軍が、日本が解放した旧植民地を、再び植民地として領有しようと企てて、侵略戦争を戦っていた。

アジア人は日本によって覚醒されていたから、独立を守るために立ち上がって勇敢に戦った。この事実一つだけとっても、東京裁判が不正窮まるものだったことがわかる。著者は、先の大戦の「戦勝国史観」は、歴史をあざむいており、日本は侵略国家ではなかったと、反論している。日本は数百年にわたった西洋による支配から、アジアを解放した「アジアの光だった」と、主張している。

日本がアジアを解放し、その高波がアフリカ大陸も洗って、今日の人種平等の世界が招き寄せられたが、日本が大戦を戦った結果として、人類史にまったく新しい時代がひらかれた。

チップというのは、本来顧客がサービスするスタッフの能力を引き出すために渡すものである。それを日本では、おもてなし文化の功罪か、サービスを受け取る側も支払わないし、提供する側も声高に要求しない。その結果、ホテル業界トップの帝国ホテルの慣例に右へ倣えで、ロクなサービスも提供しないのに「一律 10%」のサービス料を平気で取るホテルが続出している。

2014年04月 「なぜ中国から離れると日本はうまくいくのか」 石平 PHP 新書

いつの時代でも中国に近づきすぎたり深入りしすぎたりすると、日本は必ずやなんらかの災難が降りかかり、不幸が訪れる。時の政治指導者が中国との交流を深めるべきだ、あるいは連携すべきだと思ってそれを実行に移したとき、それこそが日本にとって破滅の道となった。それに反して中国から離れ、大陸と一定の距離を置いたとき、あるいは中国との関係を断絶したとき、日本国内ではたいの物事が順調に進み、日本人は安定と平和と繁栄を享受できた。

今後中国経済が退潮氏、社会的混乱が拡大していく中で、中国の政権はいつそう「日本敵視政策」に傾斜することが考えられる。日本にとっては以前にも増して、彼の国が「災いの元」になるのは明らかだ。

2014年04月 「悪韓論 VS 悪日論」 井上和彦・金慶球 双葉新書

韓国はあきらかに大陸文化の影響を色濃く受けています。中国と同じく華々しさを好むのです。服装と同様、おしとやかな顔ではなく、ハツとするような美人が好まれます、日本のアイドルの容姿は、どこか親近感のある「隣のお嬢ちゃん、お兄ちゃん」のような場合が多いのですが、K-POP スターは男女を問わず、そのスタイルが抜きん出ています。韓流ドラマや映画を見ても、チャン・ドンゴンのような目鼻立ちのハッキリしたスターの顔が好まれます。服装も華々しい色が好まれます。韓国の田舎へ行けばよくわかるのですが、農家のおばちゃんたちも、みんなピンクや真っ赤なジャンパーなどの派手な色の服を着て作業しています。日本では中間色の色彩が好まれ、派手派手しい服装は、むしろ否定的に評価されることが多いように感じます。しかし日本風の「侘び寂び」系の中間色の服装も、韓国に行くと、ただの「地味な冴えないファッション」になってしまうから不思議です。

2014年04月 「日本が誤解される理由」 金慶球 イースト新書

韓国の「面子」のあり方と、日本の「面子」のあり方はやっぱり違う。こちら「面子を潰された」という感覚では同じですが、それを日本では「恥をかいた」と表現し、韓国では「自尊心が傷ついた」と表現しているところの感覚が異なるのです。

中国や韓国では、個人の面子は「迷惑」のようなマイナスの行為をしないことによって保たれるものではありません。そうではなく、何かに対して成果を出す、それに対するプラスの評価が「面子」を立てることにつながります。叱られないことではなく、引き立てられ褒め

られることで、自分が社会に必要な存在であることをアピールするのです。

挨拶の仕方から始まる社員教育の徹底、あるいは、微にいり細にいりのマニュアル作成など、「不良品を出さない」ための日本企業のエネルギーの投げ方は、他国が真似しようとしてもそう簡単にできるものではありません。

大きな成果を出すことの前に、やるべきことをきちんとやっているかどうかを問う組織。その「マイナスの回避」のための訓練の姿、競争の姿が「真面目さ」として根付いている。「マイナス」を出さないようにすることは、ダメもとでプラスを目指すよりは実はずっと難しく、日々の努力と慎重さが求められます。

中国や韓国で「反日デモ」などのニュースが流れると、早速「あれだけ援助したのに恩知らずだ」などという趣旨の発言をするオヤジ・コメンテーターがいるのには驚きます。日本と中国、韓国との歴史認識問題をめぐる葛藤を ODA と関連付けて述べる物言いこそが、日本の ODA の意味を履き違えているどころか、これまでの日本政府の努力も台無しにする成金の発想です。こうした発想では、それこそ「結局、いくら金を出しても無駄」という結論にしか至らないのではないか。日本では見えにくいかもしれないけれども、東アジアの国々が日本を高く評価し、信頼している本当の理由をもう少し大切にしたいと思うのです。

「国民国家」ではなく、「市民社会」という目線から語られつつある現在の国際社会で、日本の ODA に求められる役割も、今後さらに拡大していくものと思われれます。「人間の安全保障」など、それこそ、近代の富国強兵の枠を超えた普遍的価値の追求と発信が、日本の ODA 外交に試されている課題なのです。

「右傾化」というのはとても曖昧な概念ですけれども、日本に関しては「歴史修正主義の立場にたち、憲法改正と軍備拡大を通じた国力増強を主張する志向性」で理解されています。この場合の憲法とは、とどのつまり第九条を指します。

被害者が加害者を責めるやり方も変えていかないといけないと思います。ある段階までは責めてもいいけれども、ある段階以上責め過続けると、加害者側は違う反応を出し始める。同様の構図は日本国内にもあって、例えば、福島第一原発の事故。これから先、事故を起こした東京電力をどうコントロールするかということは、この国ですごく重要なポイントです。そこで、東電は悪であるとか、原子力産業全体を疑えとか、というふうに責め続けると、やっぱり責められた側は情報を隠すようになります。責めるほどに、相手をコントロールできなくなるわけです。

2014年04月 「日韓円満断交はいかが」 大高未貴 ワンブックス PLUS 新書

現代だって人類の宿命を象徴するかのような、劣悪な環境の売春窟は世界中に存在する。しかし、古今東西どの国からも元売春婦たちが名乗りを上げ、一方的な証言で隣国を糾弾したことなどない。なぜ韓国だけが臆面もなく元売春婦を前面に押し出し、テンとして恥じないのか？

強制連行が本当にあったのなら、現代の韓国の男たちは日本大使館前で抗議活動に参加させられているハルモニたちの前にひざまずき、「俺たちの祖父たちがだらしなく、あなたたちを守りきれなかった。申し訳なかった」と謝罪すべきだろう。

今、韓国で行われていることは、若いときに体で稼がせていた老女の過去を、世界中に晒し者にして、単なる外交利益ではなく、あわよくば賠償金までせしめようという、なんとも残忍でさもしい話なのだ。もうこんな馬鹿げた話にこれ以上日本人が付き合わされ、謝罪を要求されるのはゴメン被りたい。河野談話を撤回して、日本人は先人たちと子孫のために堂々と立ち上がるべきだ。我々の祖父たちは、性奴隷を作った強姦魔なんかではない。

韓国人は読書と学問を至上の行為とし、額に汗して働くことを下品な人間の行為と見なした。彼らにとっては働かないことこそ美德であり、技術者や労働者、小売商、農民などを賤民として差別した。

唐、宗、元、明、清の属国に甘んじてきた結果、利己主義、事大主義などが朝鮮半島の特質として蔓延してしまった。

1932年の李朝開国は、高麗の重臣であった李成桂が、明との戦いで遼東地方奪回に出陣し、密かに敵と通じて、威化島で軍を翻し、逆にときの高麗王と、上官の崔瑩將軍を殺し、政権を奪回した結果によるものである。李朝は明の隷属国家に転落した。近代化と自主独立の道を拒否しつつける李朝の存在は、東アジアの情勢に不穏な種を宿していた。

“反日”という手法で、国民に“恨”というなんの生産性も持たない意識をすり込み、かろうじて国家を維持している韓国。そうした施政者の理不尽なマインドコントロールから目覚めようとせず、事大主義の中で惰眠を貪っている多くの韓国人。私は彼の国、彼らに同情を禁じえない。自立し、宿命に対峙しようとする努力と意識を放棄し、空理空論の権力抗争に明け暮れた李朝 500 年のツケとも言えよう。

日本の 20 代の若者たちは、世界の恒久平和、安寧、進歩を願うからこそ、日本を愛する。世界の手本となる国、日本。そのためには良い文化は伝え、悪くなったところは直す。国の未来は若者の質で決まる。公を考え、優しい若者を作る。実力者が要職に就き、誠実に働けば、国はすぐによくなる。

日本の若者たちは知っているのだ。“恨”や“責任転嫁”が何も生み出さないことを。過去を振り返って口からあふれてくる言葉は「先人たちへの感謝」であり、輝かしい未来を創るための「建設的な行動」と、それへの「強い意志」である。彼らこそ日本のみならず世界の財産になる人材であろう。もはや日本人には手垢にまみれた隣国・韓国の事大主義的千年恨に付き合う時間もエネルギーも残されていないと思わずにはいられない。我々中年世代が、この低次元なネガティブ・ビームに対応するので、できることなら、若い世代は涼やかに“千年恨”から離れ、明るい気持ちで自分の天命、使命にまい進して欲しいと思う。そして続々と世界に貢献できる発見や、精神的指導者が生まれることを願わずにはいられない。

私は大虐殺の決定的証拠が一つでも出てくる日までは、大虐殺は原爆投下を正当化したいというアメリカの絶望的動機が創作し、利益のためなら何でも主張するという中国の慣習が存続させている、悪質かつ卑劣な作り話であり、実際は通常の攻略と掃討作戦が行われただけと信ずることにしています。しかし事を複雑にしているのは日本国内に大虐殺を唱え続けることこそが良心と平和希求の証し、という妄想にとらわれた不思議な勢力である。南京虐殺は未だ日本人を萎縮させている。中国に対して言うべきことも言えないでいる理由となっている。尖閣諸島が中国のものと言っても、自分から体当たりしてきて謝罪と賠償を高らかに唱えても、怒鳴りつけることもできず、下を向いたまま「領土問題は存在しません」とつぶやくだけの国となっている。20年以上にわたり毎年10%以上も軍事費を増加させるという中国の異常な軍備拡大に抗議するどころか、すでに6兆円を越すとも言われる巨額のODAを与え、さらに援助し続けるのも、自らの対中防衛力を高める努力もしないでハラハラしているだけなのも、中国の不当な為替操作を非難しないのも、「南京で大虐殺をしましたよね」の声が耳にこだまするからです。中国の対日外交における最大の切り札になっている。

欧米人が自由とか個人をもっとも大事なものと考えのに対し、日本人は秩序とか和の精神を上位に置く。自分のためより公のためにつくすことのほうが美しいと思っていました。従って個人がいつも競い合い、激しく自己主張し、少しでも多くの金を得ようとする欧米人や中国人のような生き方は美しくない生き方であり、そんな社会より、人々が徳を求めつつ穏やかな心で生きる平等な社会のほうが美しいと考えてきました。

日本人が平等を好むのは、自分ひとりだけがいかに裕福になろうと、周囲の皆が貧しかったら決して幸せを感じる事ができないからです。人々の心の底流には仏教の慈悲、武士道精神の惻隠などが息づいているのです。日本は、帝国主義、共産主義、そして新自由主義と、民族の特性にまったくなじまないイデオロギーに、明治の開国以来、翻弄され続けてきたといえます。今こそ、日本人は祖国への誇りを取り戻し、祖国の育んできた輝かしい価値観を再認識する必要があります。基軸を取り戻すのです。国家とか国民は、自分たちが輝かしい民族に属するという感情によって力強く支えられるものである。祖国への誇りを持って初めて、先祖の築いた偉大なる文明を継承することだでき、奥深い自信を持つことができ、堂々と生きることができるのです。

自らの国を自らで守ることを決意して実行する。他国に守ってもらう、というのは属国の定義と言ってよいものです。屈辱的状况にあっては誇りも何もない。

個より公、金より徳、競争より和、主張するより察する、惻隠や「もののあわれ」などを美しいと感ずる我が文明は、「貧しくともみな幸せそう」という、古今未曾有の社会を作った文明なのです。戦後になってさえ、「国民総中流」というどの国も達成できなかった夢のような社会を実現させた文明です。

日本人特有のこの美観は普遍的価値として今後必ずや論理、合理、理性を補完し、混迷の世界を救うものになるでしょう。日本人は誇りと自信を持って、これを取り戻すことです。こ

れさえあれば我が国の直面するほとんどの困難が自然にほぐれていきます。さらに願わくば、この普遍的価値の可能性を繰り返し世界に発信し訴えて行くことです。

2014年01月 「迷わない」 櫻井よしこ 文春新書

母は私のためにここにいてくれる。私のために一所懸命生きていてくれる。私はいま、母と丸々一緒にいることができます。これは私たち先祖の日本人が考えていた幸福の形であろうと感じます。日本人の幸せの形をお裾分けしていただいているような私はいま、とても幸せです。派手ではありませんが、穏やかな温もりと充足感に包まれた揺ぎ無い幸福の中にいると思います。そんな百三歳の母ですが、笑顔は以前より多くなりました。そのことを私は何よりの幸福と思っています。母は迷わずに、いつも全力を尽くして生きてきた人です。私も迷わずに全力で行き続けたいと願っています。

2014年01月 「格付けしあう女たち」 白河桃子 ポプラ新書

40代の女性がお手洗いにいる間にお会計が済んでいるのが当たり前。20代は割り勘が基本。

30代以上が男を減点方式で見るのに対し、20代女性は加点方式で見る。

40代の未婚の女性で多いのは、これまで恋愛のチャンスがありすぎて決められなかったと言うパターンです。今の20代女性が恋愛経験する機会自体が乏しく結婚に到達できないのに比べ、彼女たちは20代のうちから盛んに恋愛をし、男性からのアプローチにも慣れている。しかし、これまで数々の男性を見てきた結果、条件がつり上がり、この人となら結婚してもいいと思える相手、自分にとっての妥協点を決められなくなってしまった人が多いのです。

男性にインタビューすると、すぐに「世間では」とか「社会的には」という話がでてきて、自分のことを語ってくれない。原発にしても「日本の経済構造を考えると。。。みたいな議論になる。自分と切り離して考える。でも女性は「私と私の子どもが吸う空気の中に、何か悪いモノが混ざっているのがイヤ」という非常に、身体的、体感的なところからスタートします。つまり原発の是非も、毎日吸う空気、毎日食べるものという身近な、日常的なところなんです。

女子力とは「対男性を魅力する力」と言う意味はとっくに超えています。女性が自らを高めパワーを持つための力です。まず楽しいこと、テンションがあがることでつながる。女子と言う言葉に、女性たちがつながることができる可能性を感じています。

2014年01月 「なぜ反日韓国に未来はないのか」 呉善花 小学館新書

アジアでは非血縁で農耕村落を形成したのは日本だけであり、他のアジア諸国ではみな血縁をもってしゅ農耕村落を形成していた。それらの地域では韓国同様、今もなお文字通り、「血は水よりも濃い」のであり「血は争えない」のである。

これまで韓国は、外貨不足になれば日本が融通して保証してくれるという日韓通貨スワップ協定があるおかげで、ウォン暴落をきたすことなくウォン安政策をとり続け、輸出に有利な条件を確保することができた。

李明博大統領が竹島上陸という暴挙に出たため、日韓通貨スワップ規模は 100 億ドルだけとなり、その枠組みも 2015 年 2 月に終了する。韓国は中国と通貨スワップの拡充を押し進めた。

韓国は文民政権次代から、中国は江沢民政権次代から、今日見られるような反日攻勢を展開するようになり、その結果、日本としてはこれ以上どう付き合っていくか、途方に暮れるしかない状況になっている。だから放っておけばいい、無理に距離を縮めようとはせずに、距離が開いたままの付き合いをしていけばいい。

2014 年 01 月 「語られざる中国の結末」 宮家邦彦 PHP 新書

中国の古代王朝では、いわゆる「仁」や「徳」による政治だからこそ、権力者のいうことが正しい「人治」が全てに優先する。人間は有り余るほどいる。いちいち彼らに自由・平等・独立を与えていたのでは王朝は成り立たない。

中国の周辺地域には「文化的に劣る蛮族」しかいなかった、というのが漢族中国人の基本認識だ。だからこそ、「独立した主権国家」間の「対等な外交関係」などといった伝統的国際法の基本理念など、一般的な中国人にはなかなか理解できないのだろう。中国人の国家観を考える際に注意すべきことがもう一点ある。それは、中国の伝統的発想からは「基本的人権、民主主義、法治主義、国際法、対等な主権国家」といった近代的発想など生まれてこないという現実だ。現在の欧米からの中国に対する挑戦は、領土や帝国主義ではなく、中国における統治の正統性そのものに向けられている。正統性すなわち天の根拠を「自由で民主的な選挙による政府」に求めるのか、それとも「中国の伝統的な統治システム」に求めるのか。それを決めるのは中国人である。

「中国という土地」は過去三千年間のうち、約千年は分裂していた。そのうち漢民族による現在の領土の支配はせいぜい数百年間でしかない。これを「歴史発展の主流」などと捉えるのは客観性・知的中立性を欠いている。

己の心が癒されないかぎり、他人を思いやる心は生まれない。文革時代には「殺るか、殺られるか」がすべてだったが、いまも「儲けるか、騙されるか」という二者択一は変わらない。こうした自己中心的メンタリティが幅を利かすかぎり、中国に健全な社会は生まれないだろう。

いまや共産党指導部は第五世代に引き継がれた。彼らは文革の加害者であった。紅衛兵世代が最高政治指導部に入った以上、本来であれば、「文革を清算する」という歴史的な責任があると思うのだが。

中国人は仏教の「輪廻」の概念も受け入れなかった。自分たちはすべて人間であり、来世で兎になるとか、自分の親が前世で蜥蜴だったなどは漢族中国人の想像力をはるかに超えて

いる。彼らは基本的に五感で理解できることしか信じないようだ。この万世一系というか、血を分けた家族だけが一族の生命を連続させるという一種の安定感覚・永遠感覚こそが、儒教思想の真髄である。その意味で、中国ではキリスト教、イスラム教といった一神教だけでなく、本来の意味での仏教も根付かなかったのだろう。

中国人はきわめて政治的な生き物であり、政治と無関係な文化や経済など、そもそも中国には存在しない。

中国を変えたければ、中国自身が内側から変わるのを待つしかない。この巨大で多様な人間集団を短期間で変えるなど至難の業である。現代中国を理解するキーワードはその「弱さ・脆弱さ」だ。中国人との付き合いが難しいのは、彼らが「強い」からではなく、じつは「弱い」からだ。「弱い」からこそ「怖い」。「怖い」からこそ、彼らは自分たちが長年受け継いできた文化に逃げ込むのである。

自信があれば、もっと上手に外国人と付き合える。自信がないからこそ、主観的判断、自己正当化、短期的利益追求などの自己中心的言動を繰り返し、平気で嘘もつく。じつに扱いにくい人々だが、彼らがまだ開発途上国のメンタリテイをもっているからと思えば、理解しやすいだろう。

中国人は外国からいかに思われているかを人一倍気にする、とても「傷つきやすい」民族である。たしかに中国人は面子を大事にする。しかしこのような性格は他の開発途上国でもほぼ共通することだ。

1945年から現在まで、われわれ多くの日本人には、戦後の日本が歴史を直視しつつ、最大限の努力を重ねてきたと言う自負があるはずだ。こうした日本人の努力を認めず、「名誉ある地位」を占めることを許さなかったのは、じつはあの「公正と信義」に満ちているはずの「諸国民」だった。これこそが、いまの日本人の多くに共通する「なんともやりきれない気持ち」の真の理由ではなからうか。

「そして日本経済が世界の希望になる」ポール・クルーグマン PHP 新書 2014年1月

日本の円が基軸通貨であるかないかは決定的な要因ではない。重要なことは、日本が自国の通貨を持ち、公的債務を自国通貨建てで有しているということだ。

2014年01月 「反日・愛国の由来」 呉善花 PHP 新書

拉致被害者たちのとてつもなく不条理な人生、それに目をつむることなどとうていできないことを、私はあらためて実感させられた。2002年、日本人拉致被害者帰国の頃、韓国では拉致被害者の日本帰国の事実すら知らない者が少なくなかったし、「自分の国のことじゃないし、とくに騒ぐような問題ではない」といった反応しか返ってこなかった。

日朝修好条規が結ばれた翌年の1877年頃の李朝では、打ち続いた凶作のために餓死者が出る状況の中、貧しい農家の女たちが食料を乞うため、日本人居留民を相手に春をひさいだのである。一人の女は刑場へ引き出されると、静かに周囲を見渡しながらか、「もはや餓死する

しかなかった命を日本人のために 4、50 日長らえることができました。今日からやっと、これまでの飢餓の苦しみから免れることができます」といって涙を流したという。なぜ朝鮮女性が日本人と性的交渉をもつことが、斬首刑をもって報いなければならないほどの大罪となるのか。それは、日本人が侮蔑すべき倭賊だからである。そのような夷族によってわが臣民女性が汚されてはならない。

反日の根拠をなすものは、植民地支配それ自体なのではない。そうした事態を招いた日本人の「侵略的かつ野蛮な民族的資質」にあるという。

韓国には伝統的な華夷思想があった。具体的には日本人を文化程度の低い侵略的で野蛮な夷族とみなそうとする蔑視の意識として残っていた。李承晩は、国民に共通な「屈辱の歴史」である植民地体験へ訴えることでこの伝統思想を目覚めさせ、現代の華夷思想として再構築することに成功したのである。それが戦後韓国の反日思想の実体である。なお、韓国の反日思想の、「日本人には歴史的に根深い朝鮮劣等論・蔑視論がある」という主張は、そのまま裏返して韓国についてもいえる。

中国国境の外の異民族では、朝鮮半島人が「中華」を最もよく受け入れてきたことはまちがいない。そういう意味での中華主義の精神性が韓国・北朝鮮には強固に根付いている。

民族とは通常、伝統的な生活様式を共有する集団のことである。人種が身体形質を基準とした分類であるのに対して、民族は伝統的な文化の共有に基づいて他と区別される集団だとするのが一般的な理解だろう。しかし、北朝鮮でも韓国でも、「血の共通性」こそが民族の最大の条件とするのである。

客家の人々に象徴される中国人の中華主義にしろ、韓国や北朝鮮のそれとは自覚しない中華主義にしろ、自民族にこだわっている限りは未来がないというしかない。

韓国と北朝鮮がこの歴史的な侮日観を克服して日本に胸襟を開かない限り、北朝鮮問題がソフトランディングの結末を迎える可能性は少ない。今の所は、経済制裁をもって北朝鮮を追い詰め、ハードランディングさせていく道しか見えていないといつてよいだろう。

李朝の「小国が大国に礼をもって仕えること」をよしとする事大主義、そして「文明の中心に位置する中華を取り巻く周辺の夷族」という華夷秩序の意識は、国内でも自動的に再生産され、朝鮮半島人の精神性に大きな影響を与えてきた。

両班が首尾よくなんらかの官職に就くことができると、彼はすべての親戚縁者、最も遠縁の者にさえ扶養義務を負う。彼が守令になったというだけで、この国の普遍的な風俗習慣によって、彼は一族全体を扶養する義務を負う。もし、これに十分な誠意を示さなければ、貪欲な者たちは、みずから金銭を得るためにさまざまな手段を使う。

韓国の歴代大統領は、多かれ少なかれ、政権に多数の一族を配置したり、一族の者たちに何らかの特権や利権を与えることを、当然のようにしてきている。ノテイウ元大統領がそのことで批判されたとき、彼は「親戚の者たちが押しかけてくるので、とても断りきれなかった」といいわけをしたものである。

私も小学生のときからそうした歴史教育を受けてきたので、日本に来てしばらくの間は、教

えられた「歴史的事実」に疑問をもつことはいっさいなかった。これを愚民政策と言わずに何とさえいいだろうか。韓国人ですらそうなのだから、北朝鮮人ではなおさらのこと、最高の知的権威である国家から示される一つの理念、一つの観点に基づいた考えと異なる考えなど、およそ想像すらできないだろうと思う。韓国以上に国民から批判力を奪い取る北朝鮮の愚民政策は、李朝の儒教官僚たちが採った愚民政策そのままである。

韓国人が心底恐れるのは、北朝鮮が崩壊してしまうことである。崩壊した後、2450万人にのぼる北の一大貧困集団を丸ごと抱え込んでいかななくてはならないということ、これこそが最大の脅威である。だから韓国は、なんとして北が崩壊しないように体制を支えていくしかない。それが圧倒的多数の韓国人の考えである。口では統一をいいながらも、本音では統一したくない。率直に言ってそうである。

2013年4月 「新・国富論」 浜矩子 文春新書

世界の金融資産総額を対世界GDP倍率で見ると、1990年の数値が1.77倍、2007年が3.45倍である。明らかにカネ余り状態である。このようにカネがだぶついてくれば、当然ながら、その価値は下がる。これまでの持続的長期金利安は、要するにこのカネ余り状態がもたらした現象だったのである。

量的緩和という異様な手段にまで訴えて、そして実に長きにわたってゼロ金利状態を作り出した。この金融政策がジャパンマネーを日本の外に押し出した。世界最大の貯蓄大国からカネが大量に流れ出れば、グローバルなレベルでもカネ余りになるのは当然だ。

グローバル時代は奪い合いの時代にあらず、分かち合いの時代なり。

グローバル長屋の合言葉は「差し伸べる手」なのだと思う。諸国民がお互いに対して差し伸べる手、やさしさの手、勇気ある手、知恵ある手だ。さらに差し伸べる手を持つ人々は、実は諸国民に止まってもいけないのだと思う。本当に力強い差し伸べる手を持つためには、我々は諸国民から「全市民」に脱皮しなければいけないのではないかと思う。国境をまたぐグローバル市民の視野があればこそ、お互いに慮りの手を差し伸べあうことができる。そういうことだろう。

2013年3月 「日本の財政転換の指針」 井手英策 岩波新書

日本は財政規模、公務員の対労働力人口比、双方で見て、先進国のなかで極めて「小さな政府」である。そのような小さな政府が、なぜ空前の財政赤字に苦しみ、反対になぜ北欧諸国のような支出の大きな政府が、時には財政黒字さえ実現するのであろうか。実際、北欧諸国の政府債務の対GDP比は50%程度である。小さな政府の典型である日本は200%、アメリカも100%を超えている。このことは政府を小さくすることと、赤字を減らすことが、必ずしも一致しないことを端的に示している。結局のところ、財政健全化の帰趨を決するのは、租税を調達する政府の実力なのである。中間層を受益者とし、財政高権の行使を国民に説得する能力のない政府、支出に節約の血道をあげ、奪い合いを是とする政府は、租税抵抗を生

み、財政赤字に苦しむことだろう。

本書が追求するのは「尊厳と信頼の財政」である。市場の失敗の尻拭いをするために政府が、そして財政があるのではない。主流派経済学が想定するように人間の自由を前提としてもなお、政府、そして財政に独自の責任の領域がある。問われているのは、人々の生を豊かにする財政、そのような財政が生み出す善い社会への道筋である。財政を再建しなければ国家が破綻する。恫喝の政治に翻弄されてきた私たちの歴史に終止符を打つべきときが来ている。

2013年10月 「**知の逆転**」 吉成真由美 NHK 出版新書

ノームチョムスキー

中国は世界でも最悪の格差社会になってきています。労働者階級に富が回らないのは世界的な傾向ですが、中国が最も酷い状態です。

2013年10月 「**韓国反日感情の正体**」 黒田勝弘 角川 ONE テーマ 21

日本の降伏がもう少し遅ければ、韓国の光復軍が朝鮮半島に進出し、独立戦争、解放戦争となり、日本を打ち負かし自力で解放を勝ち取っていたはずだという。

「光復軍」とは当時、中国で日本軍と戦っていた蒋介石の中国軍の下にいて、訓練を受けていた小規模の韓国人部隊のことだが、実際は彼らは日本降伏後も韓国に“凱旋”するようなことはなかった。しかしこの最後の話が韓国にとっては果たせなかった夢であり「歴史のハン(恨)になって残ったのである。結局これが民族的自尊心のことである。これが満たされないまま今にいたっているということが、現在の韓国の反日の正体である。

近年、豊かな時代に育ち、あふれるほどの自信感を持たされた人たちには、韓国が昔、日本にしてやられたことは想像できない。そして我慢ならないのだ。

今、反日の象徴になっている独島問題と慰安婦問題の現状を見ればそれがよくわかる。だから韓国にとって独島問題は今や対日戦争の気分なのであり、慰安婦問題は「抗日運動家」として日本に国家としての屈服を求めているのだ。となると問題の解決はなかなか難しい。

「失われた歴史」を求め、民族自尊心を回復させたいという彼らに、日本はもう歩調を合わせるなどできない。日本のほうが「民族的自尊心」を回復させなければならない時代になっているのだから。

2013年10月 「**レイヤー化する世界**」 佐々木俊尚 NHK 出版新書

人をたくさん雇う巨大な企業を作るウチの社会は終わり、「場」だけが提供され、すべてがレイヤー構造に変わっていきます。いったん「場」に変わった世界は、もう二度とウチへは戻らないでしょう。

ひとつの大きな国家が世界を支配するような時代は終わり、さまざまな国や世界企業、さらには非政府組織のような団体まで含めて、ばらばらに権力が分散される時代が来る。私たち

が知っているこれまでの国際社会とは全く違う世界がやってくることを、あの強大なアメリカ政府でさえも認識しているのです。それは形のはっきりしない大きなネットワークのようなものです。だれも覇権を奪えないけれど、誰もが覇権に参加している。そういうアメリカみたいな姿が、世界の未来なのです。国家と国家の戦争ではなく、国家とテロリストとの戦い。

2013年10月 「日本人はいつ日本が好きになったのか」 竹田恒泰 PHP 新書

英国のBBC放送が20ヶ国以上で数万人を対象に毎年行っている世論調査で「世界に影響を与えている国」として、最も高く評価されたのが日本だった。その後の調査でも日本は高い評価を受け続け、2012年に発表された調査結果でも最高の評価を得た。2013年発表の同調査で日本の評価は4位になったが、これについて朝鮮日報は「それでも世界から愛され続ける日本」と題し、日本人の人気は、世界全体にほぼ満遍なく分布している。韓国人と中国人による圧倒的な否定的評価がなかったら、日本は今年も、世界で最も人気のある国の座を争っていたかもしれないと分析している。

同一民族の条件は歴史と神話を共有すること。

軍人が尊敬されない社会は何かおかしい。国を守るために危険な職務についている人が尊敬されない国が果たして正常な国といえるだろうか。国防あつての国民生活ではないか。日本国民は、日本国が存在していることの恩恵を日々受け続けている。国家の独立があつて、初めて日本国民としての権利が保障されていることを忘れてはいけない。この問題は、自衛隊を法的に軍隊と位置づけていないことから生じていると思う。

日本の憲法には、常識的には絶対にかかれていなければいけないことが欠落している点がある。それが非常事態条項である。非常事態条項は通常、憲法に書かれるもので、外国の軍事攻撃を受けた場合や、大規模な災害が起きたときなどの非常事態に発動される。これが発動されると、大統領や首相に権限が集中し、必要に応じて人権が停止される。

世界中で戦車にブレーキとウィンカーが装着されているのは日本の自衛隊だけである。なぜなら戦車も車検を取らなければ公道を走れないため、自ずとブレーキランプなどが取り付けられるという。これでは自ら敵に居場所を教えているようなものである。

尖閣諸島はいくら小さくても日本の領土であることの重要性にはなんら影響はない。むしろ、小さいがゆえに手をかけて守らなくてはならず、また遠いがゆえに守りにくい場所にあつて、より手をかけなければ守ることができない。

中国と韓国は日本にとって同じ隣国だが、中国が大国で、好むと好まざるとにかかわらず無視できない国であるのに対して、韓国は経済・面積・人口いずれをとっても日本の何分の1に過ぎず、無視できる国である。

韓国は半世紀以上「反日」を国是としてきたので、いくら論理的に反論したところで、いまさら歴史認識を改めることはないと思われる。また、所詮、理屈が通る相手でもない。そこで、日本は韓国に反論するのではなく、韓国は無視しつつ、欧米やアジア諸国に対して粘り

強く歴史の事実を伝え、韓国の認識がどのように間違っているかを説明して回る必要がある。

日本がどれだけ韓国を経済的に支え、発展のために尽くしてきたとしても、そのことはまったく評価されないばかりか、全ては恨みに変わり、すことないこと、たくさんの嘘について金銭を要求してくる。日本は朝鮮と共に戦争をしたのであって、朝鮮と戦争した事実はない。日本が先の大戦に敗北したために、朝鮮半島では朝鮮戦争が勃発し、いまだに国土が分断され、戦争が継続されている。しかも、朝鮮人は南北だけでなく、在日と在樺太も分断されてしまった。

2013年10月 「里山資本主義」 藻谷浩介・NHK広島取材班 角川 ONE テーマ 21  
銘建工業バイオマスボイラ：建設費 10 億円、電力自己消費分 1 億円／年、売電 5000 万円／年、木屑 4 万 ton 産廃費 2 億 4 千万円／年→メリット 4 億円／年  
銘建工業ノペレット=20 円少し/kg

2012 年エネルギー白書によると、家庭部門エネルギー利用内訳は電気（動力や照明）34.8%。暖房 26.8%。給湯 27.7%、冷房 2.9%。熱を制する者はエネルギーを、そして経済を制する。エネルギーの輸入は何の利益ももたらさない。利用されないまま何千トンもの廃材が森の中で朽ちていくのに、なぜわざわざ数千キロも離れたところから天然ガスや石油を運んでこなければならないのか。

日本の国際競争力は地に落ちてなどいない。バブル崩壊以降の 20 年間だけでも 300 兆円ほどの経常収支黒字が外国から流れ込んだ。だがそのお金は貯蓄されるばかりで国内の消費に回らない。金融緩和も進められ、マネタリーベースも同時期に 2.5 倍に膨れ上がった、名目 GDP はばったりと成長を止めてしまった。そこで政府は国債を発行して貯蓄を吸収し、景気対策につき込んできたが、それでもお金が自分でぐるぐる回り出すことはなく、消費は一向に増えないままだ。気がついてみると、約 1000 兆円の借用証書を書いた日本政府に、税金として還ってきているのは年間 40 兆円未満。毎年税金以上の借金をしないと資金繰りが回っていかない。そうこうしているうちに国内の貯蓄がすべて国債になってしまう状況が近づきつつある。他方で海外に支払う燃料代は年々増えている。日本の石油・石炭・天然ガスなどの輸入額はいまや年間 20 兆円を超えている。それでも工業国同士の競争となると日本は強い。震災・ユーロショック・超円高が連鎖した 2011 年ですら、工業国から合計 14 兆円の貿易黒字を稼いだ。だがその儲けは全部アラブ産油国などの資源国に持っていかれてしまい、最終的にはマイナス 2 兆円と 31 年ぶりの貿易赤字に落ち込んでしまった。資源を買ってきて製品にして売るという加工貿易立国モデルが、資源高のせいで逆ザヤ基調になってきているのだ。

大量生産・大量消費システムとの決別。自分のための消費を求めるのではなく、つながり消費を求め、新しいものをどう手に入れるかという所有価値でなく、今あるものをどう使うかという使用価値へ重心が置かれるようになってきている。企業の売上げを伸ばすためではなく、

地域や社会とのつながりを感じられる商品を人々は欲し始めている。

巷間に言われている、「再生可能エネルギーなんてうさんくさい」という「ある種の正論」が、いかに日本経済の次代の競争力強化にとってマイナスになっているか。

いま日本人が享受している経済的な繁栄への執着こそが、日本人の不安の大元の源泉だと思う。

マネー資本主義の勝者として、お金さえあれば何でも買える社会、自然だとか人間関係だとか金銭換算できないものはとりあえず無視していても大丈夫、という社会を作り上げてきたのが、高度成長期以降の日本だった。

過去 20 年間でみれば日本の GDP 総額は増えていないが、減ってもいない。バブルの頃世界最高だった一人当たり GDP も、今では世界 17 位だというのが、絶対額ではこの間も微増している。それどころか生産年齢人口当たりの GDP を計算してみると、今でも日本の伸び率が先進国最高である。

日本でデフレといわれているものの正体は、不動産、車、家電、安価な食品など、主たる顧客層が減りいく現役世代であるような商品の供給過剰を、機械化され自動化されたシステムによる低価格大量生産に慣れきった企業が止められないことによって生じたミクロ経済学上の値崩れである。従ってこれは、日本経済そのものの衰退ではなく、過剰供給をやめない一部企業と、不幸にもそこに依存する下請企業群や勤労者の苦境に過ぎない。そしてその解決は、それら企業が合理的に採算を追求し、需給バランスがまだ崩れていない。コストを価格転嫁できる分野を開拓してシフトしていくことでしか図れない。

企業による飽和市場からの撤退と、新市場の開拓がデフレ脱却をもたらす唯一の道である。

日本の 1400 兆円とも 1500 兆円とも言われる個人金融資産の多くを有する高齢者の懐にお金は存在する。大前研一のプログによれば、彼らは死亡時に一人平均 3500 万円を残す。高齢者自身が何を買う気がなくても、お金さえあれば消費に回したい女性や若者は無数にいる。「デフレの正体」で論じたように、あらゆる手段を使って高齢富裕層から女性や若者にお金を出すことこそが、現実的に考えた「デフレ脱却」の手段なのである。

使用済み核燃料の最終処分の見通しがまったく立たないままに原発を再稼動しようとするのも、とにかく今を乗切るために数年先を見ないようにしているという話にほかならない。何とか暫定的な保管場所を見つけたとしても、今後 10 万年にわたり安定的に冷やし続けねばならない高レベル廃棄物にどこで誰がどう責任を持つのか、これまたまったく目処が立っていないし、その目処が立つ目処もない。これはとにかく赤字国債を発行してつないでいくという発想と同じで、刹那の繁栄のための問題先送りにほかならない。

刹那的な行動は、われわれ日本人がマネー資本主義の先行きに対して根源的な不安を抱き、心の奥底で自暴自棄になってしまっているところから来ている。そしてその不安は、マネー資本主義自壊のリスクに対処できるバックアップシステムが存在しないところから来る。

里山で暮らす高齢者の日々が穏やかな充足に満ちているのは、身近にあるものから水と食料と燃料の相当部分をまかなえているという安心感があるからである。お金を持って自然

と対峙する自分ではなく、自然の循環の中で生かされている自分であることを、肌で知っている充足感があるからだ。

2013年07月 「部長、その恋愛はセクハラです」 牟田和恵 集英社新書

セクハラと受け取られることなくデートに誘う鉄則

1. 仕事にかこつけて誘わない
2. しつこく誘わずスマートに
3. 腹いせに仕返しをしない

2013年07月 「日本防衛論」 中野剛志 角川新書

原発を維持するかぎり原発事故のリスクを完全にゼロにすることはできない。では、事故のリスクが多少でも残るにもかかわらず、それでもなお原発を維持しなければならない理由とは何か。それは、エネルギーの安全保障にある。

アメリカの民間研究機関グローバル・フィナンシャル・インテグリティは2000年から2011年までに、合計、兆ドルの資本が、中国から不正に海外流出したと推計している。この不正資本流出の原因は、中国在住の富裕層のグローバル化にある。富裕層は、中国経済のグローバル化を悪用して、税金逃れ、利益の海外移転、収賄、リベート、不正輸出、未申告の海外資産などのテクニックを駆使して蓄財に励んでおり、中国政府は、富裕層から適正な税を徴収することができないでいる。蓄財や脱税のためにグローバル化を悪用できる富裕層と、そうでない中間所得者層との間で、貧富の格差がますます拡大している。中国経済は、今や、グローバルな経済成長を牽引する市場ではなく、世界の巨大なリスクの一つと化したのである。しかも、問題が構造的なものである以上、このリスクは長期にわたって続くと考えなければならない。中国の成長神話は終わりを告げたのである。

中国において日本車の販売が激減したが、中国に進出している日本の完成車メーカーのうち、日本側100%出資子会社は存在せず、通常は中国側が51%以上を占めるので、中国側も日本側に劣らぬ損害を受ける。したがって、中国が経済的に日本との安定的な関係を必要とし、かつ中国政府が理性的である限りは、日中の武力衝突は回避できる可能性はある。

世界の人口増大は、日本の食料とエネルギーリスクを想定する上で、決定的に重要な要因である。

2013年07月 「40歳以上はもういらぬ」 田原総一郎 PHP新書

障害者というのは何かの能力を失っているなのでその能力を回復させてあげるべき存在だという考え方ではなく、障害を抱えている人が平等に生活を享受できないのは、「社会の側に改善の余地があるはずだ」と考えるべき。

2013年07月 「中国の破壊力と日本人の覚悟」 富坂聡 朝日新書

もし中国人が、日本人が中国人を「残酷」な人だと感じていると知れば、彼らは実に「意外」に感じ、かつ「心外」だと思うことでしょう。「日本人にだけは言われたくない」と怒るかもしれません。いや、きっと怒るに違いありません。何といたっても日本人こそ、中国社会においては「残酷」「残虐」の代名詞となっているからです。

人助けをするとかえって災いに巻き込まれる。転んだ老人を助け起こそうとした若者が、逆にその老婆から「お前が私を転ばせたんだ」として訴えられ、賠償金を支払わされたというニュースが大々的に報じられたことがあった。

倒れている老人を助けようとバスを停めて近寄ったバスの運転手が、逆に「バスに轢かれた」と訴えられそうになった。

よちよち歩きでふらふらと車の前に飛び出した2歳の女児がワゴン車にはねられるという衝撃の瞬間が伝えられたニュースで、倒れて道路に横たわった女児に駆け寄る者はなく、18人の通行人は見て見ぬふりをして素通りしてゆく姿が映っていた。ネット上で話題となり、ひき逃げ犯と女児を見殺しにした通行人を攻撃する書き込みが溢れた。

中国人が「残酷」だとか「残虐」だとかいった印象は、生活に追われる人々の窮乏ゆえの残酷さや、金持ちの愉楽の名の下に貪られる残酷さもある。ただ、こうしたニュースが我々の耳に届くということは、中国社会の中にもそれを取り締まる当局が機能し、批判的に報じるメディアがあり、それを受け止める善良さも存在しているということである。

騙す人間が多いということは、その分騙される人間も多い。

2013年07月 「悪韓論」 室谷克実 新潮新書

半島には物づくりをする人間を軽蔑し、生産現場を卑しむ文化があった。それが今も続いている。異様なまでの学歴崇拜と、職種に対する強烈な貴賤意識が形作る現代韓国の事実上の身分制度は、それ自体が「差別の文化」といえる。額に汗する仕事そのものを軽蔑し、そうした仕事をする人を露骨に軽蔑し、そしてそうした仕事に携わる人自身も、自分の職業に何の誇りも持っていない。これが、朝鮮半島が作り上げた産業文化の底流だ。彼らが作る半製品、部品が精度に欠けるのは当然の帰結なのだ。

韓国で2010年に偽証罪で起訴された人は日本の66倍、日本の人口が韓国より2.5倍多いことを勘案すれば165倍に達する。誣告事件は日本の305倍、詐欺事件は13.6倍だ。政治家たちは、嘘を吐く国民に対して嘘を吐くことは罪にならないと固く信じている。私たちの習慣的な嘘が、こんな罰として戻ってくるのだ。福祉国家建設の礎は、お金ではなく正直だ。偽りの所得申告、偽りの患者申告の砂原の上に、福祉の家など作ることはできない。

大手財閥が見栄えのいい最終製品を仕上げることを誇りとし、部品の生産にはほとんど興味を示さないこと。システムの深奥理解ができていなくてもKTX（高速鉄道）がとりあえず格好良く走れば、鉄道公社も車両メーカーも「万歳、万歳」。どちらも「外華内貧」の価値観に染まりきった社会ならではの出来事に思える。

嘘を嘘で塗り固めたような捏造史観、それと日本と日本人を貶めたいという欲望の合作が、俗に言う「従軍慰安婦の像」だ。歴史捏造に基づく反日意識で武装しているような隣の小国と、親しく付き合う必要などどこにもない。

2013年05月 「男は邪魔」 高橋秀実 光文社新書

学生たちの交際を見ていると、男の子は自分のほうが女の子より頭がいい、強くないとイヤなんです。同じ程度はイヤなんです。男たちは立場を守るために弱者を求めるのだろうか。この刷り込みの強さは世界でもトップレベルで、日本は「世界のド田舎」「いまだに鎖国」といってもよいほどだ。

日本の現在の人口を維持するには、男は1000人で事足りる。それ以外は「しょうがないよね」と廃棄処分されてもおかしくない。

哺乳類の場合、オスはもう生きている間じゅう、交尾したがる。メスは排卵するときだけに、それを受け入れてあとは相手を蹴っ飛ばす。確実な無駄のない交尾。排卵していないときに交尾しても意味がない。ところがオスは相手も選ばず、四六時中交尾しようとする。決定権はメスが持ち、オスはただ闇雲に交尾しようとする。

2013年05月 「なぜ中国はこんなにも世界で嫌われるのか」 内藤明宏 幻冬舎新書

1979年から1980年代は日本人の対中感情が最もよかった。1989年で突如その評価が暴落する。これは天安門事件の影響である。2004年はサッカーアジアカップで中国の反日感情が爆発しており、翌年も日本の国連安全保障理事会常任理事国入り反対デモや中国各地での日系企業や領事館に対する暴動。当時、中国の若者は反日デモをにこやかに楽しみ、また心から誇りに思っていた。一方で彼らはこの反日運動に日本人が強い反発を感じることをまったく想像できておらず、無知としか言いようのない無邪気な世界に生きてきた。筆者はこの反日行動が、日本がアメリカよりも中国を優先して付き合う可能性をきれいに消し去ってくれた分水嶺と考えており、おかげで我が国が今後も自由主義圏に留まれることを心から安心して喜んでいる。2010年は尖閣諸島沖で中国漁船が海上保安庁の巡視船に体当たりをしてきた。

中国は他国に好かれることよりも、他国の天然資源を強奪することや他国に対して強い立場を得ることを優先している。この点で日本人との価値優先順位が全く異なっており、中国人に自分たちと同じ論理が通じるとしたら大間違いである。

多くの若者は政府に期待しないのと同時に、政府批判はしても深刻に憎むこともしない。反政府ではなく非政府というべきであり、新世代中国人が政府を見る目は非常に冷ややかである。

中国ではモンゴル帝国を中華帝国と教えており、ほとんどの中国人はそれを信じている。モンゴル帝国は中国だけでなく、ロシアも占領し、ユーラシアに大帝国を築いていた。それを

当時モンゴル帝国の植民地であった中国が「わが帝国」というのだから、モンゴル人がキレルのも当たり前だ。

日中間で教科書の記述について、中国が内政干渉してくることがあるが、2005年のケースでは日本の教科書を批判していた当時の中国外交部長が町村外相に対して、「教科書を読んではない」と認めているから、彼らは意味があって内容にケチをつけているわけではなく、文句をつけること自体に意味を見出す政治ゲームをしているのである。もちろんまともに相手をしてはいけない。

「メラミンミルク」をご存知だろうか。これは幼児向け粉ミルクにメラミンを混入させることによってタンパク質含有量をごまかして売る手口であり、これを飲み続けると栄養が足りず、そのうち腎臓疾患も引き起こしてしまう。また、「地溝油(下水油)」というもある。これは使用済み油どころか、文字通りのドブや下水から油を抽出して食用油として再加工、販売する手口である。これも大変な毒性が確認されている。

中国人はルールを守らなければならないものとは考えていない。むしろ、ルールというハードルを越えることを「賢さの証」と考えているところがある。ほとんどあらゆる不正は「仕方がない」の一言で容認される。この場合の「仕方がない」は、本当に他の選択肢がなくどうしようもなかったというニュアンスではなく、「ルールなんてどうでもいい」というニュアンスに解釈したほうがいだろう。

そもそも中国人は「法治主義」や「法律」というもの自体に反発を持っており、それらを「冷酷な管理制度」として見ている。人間が法律やルールを作っているのだから、その作り手である人間が法律やルールや信号機に束縛されるのはおかしいとさえ考えるのである。こうして法治という「冷酷な管理制度」に背を向けて彼らの「温かい感情論」を優先させた結果、あらゆる取決めやルール、契約が守られず、普遍的秩序が破壊し尽くされた住みにくい中国社会が生み出されたのだという因果関係を理解している中国人は、おそらくほとんどいないだろう。

中国人の視点の特徴である他者視点、客観視点の欠如と、主観視点の圧倒的大きさが生むものを挙げてみる。

他者視点の欠如が生むもの：一恥の感覚がない、一自分が嫌われていることに気がつかない、一他者を不快にしていることに気づかない、一他者の気持ちや痛みを想像できない、一気が利かない、等

客観視点の欠如が生むもの：一冷静な論理の欠如、一普遍的ルールの不存在、一客観的事実の無視、一状況把握や分析の下手さ、一数値やデータの意味を把握できない(自分にとって損か得かという読み方しかできない)、一抽象的思考力の貧しさ、等

強い主観視点が生むもの：一押しの強さとぶつかり合いの多さ、一情の厚さ、一芸術的感性の強さ、一迷いのなさや自信の大きさ、一単純な価値観、一具体的な物事を好む傾向、等  
中国はヨーロッパ文明主導の近代になかなか適応できず、改革解放後の現在もいまだに「自由主義圏の論理」を理解できずに各国と摩擦や対立を繰り返しているが、彼らによっては

「異文明」という脅威に直面しているつもりなのではないだろうか。

2013年04月 「中国台頭の終焉」 津上俊哉 日経プレミアシリーズ

日本はこれだけ発達し、国民に暮らし安さや安心を提供するだけでなく、世界の多くの人々をいとおしく思う国柄である。私には、その国・社会が為すすべもなく衰えていくばかりの未来というのが、どうも想像しにくい。そうであっていいはずがないと思う。

日本と日本人の新しい途の拓き方を世界に示し、緊張と対立ばかりの21世紀世界にempathyの気風を広めることが日本の課題であると思う。いまは、例えば2050年を念頭に置いて、そういうことを展望すべきときであり、何周も周回遅れの中国と、解決の途のない領土・領海争いをしている場合ではない。それに、「右傾化して武張る日本」は、世界がいとおしく思う日本とは真逆の路線である。「したたかな外交」の中国があればほど孤立化を恐れるのに、わが日本は進んで孤立化に走る悪い癖がなぜいつまでたっても治らないのだろうか。

2013年04月 「日本の情報と外交」

大量破壊兵器の存在を錦の御旗に押し立てた米英では、事実が明らかになった後、どうなったか。英国では、ブレア首相とMI6長官が退陣、辞任に追い込まれた。米国でもブッシュ政権第一期の国務長官を務めたコリン・パウエルは、長官退任後、当時国連安保理で列挙した「イラクが大量破壊兵器を保有していることの証拠」が誤認にもとづくものだったことを認め、「人生最大の恥」と深い反省の言葉を述べている。やはり、米英では「人」画決定しているのに対し、日本では「空気」が決定しているからではないだろうか。人が具体的な証拠を挙げて決定すれば、結果がどうであろうとも、事後に検証し総括することができる。しかし、「空気」に押し流された決定であれば、根拠があいまいなので総括のしようもない。「あの場の空気ではやむをえなかった」の一言でいくらでも責任逃れがきく。

2013年04月 「日本の宿命」 佐伯啓思 新潮新書

誰もが今この時代を殺伐とした時代だと思っている。人々は、ただこれまでのルールや慣習や道徳を守って折り目正しく生きていくことはできない。折り目正しい生き方や正当な手続きなどという「オーソドクシー（正統なもの）」に従ってはやってゆけない。正直で誠実で実直で物静かで黙々と働くなどという二宮金次郎のような生き方をしておれば、どんどん社会から蹴落とされる。

政治とは、不確定な将来に向けて国民の生死を自らの手ににぎる決断の連続だとすれば、そんな恐るべきことは普通の者にはできるわけはありません。真面目に考えれば、とても政治的行為など「普通の人」には不可能でしょう。それをあえて実行するのは、とてつもない勇気と信念を持った人物とか、とてつもない変人かのどちらかでしょう。人はもし変人でなければある程度の常識人であり、常識人なら、みずからの行為の恐ろしさをどこかでわきま

ているはずで、しかもそれは「品格」にあらわれてくるはずで、そして、われわれ政治にたずさわらない「普通の人」が政治家に見出すべきものはこの「品格」をおいてほかにないでしょう。

「品格」とは、「そのものから感じられるおごそかさ」と辞書にあり、英語では **dignity** です。それはそのものが「より高い価値に値する」時にたちあらわれてくるものなのでしょう。私には「人格」とは、ただ「人」の「性格」ではなく、「人」に「品格」がプラスされたものだと思われるのです。

今日、気分障害の「クレマー」こそが実際に社会を動かしてしまいます。

「気分」とは、思惟や理性が後退していったときに、人間が自分自身の生を知ろうとするもっとも根源的で単純な形態である、と哲学者のボルノーはっています。確かに、ものごとを理性のフィルターに通してみたり、思考の回路にいれこんでみたりせず、もっと単純で情緒的に、世界における自分の立場やかかわりを捉えようとするのが「気分」でしょう。「気分」は、最初から特定の対象へ向かうわけでもなく、また説明可能な動機があるわけでもなく、常に不安定に揺れ動き、確かな形を持たない。それゆえ、「気分」はどうしても集団的で情緒的になりやすいのです。風評病のようにすぐに感染してゆくのです。

大きな「共同プロジェクト」を提示する政治的リーダーもいない。しかし、その原因は政治家にあるというより、「主役」をはる「大衆」が実はそんなものを政治に求めている。

「人物」とは、その人固有の力量にあるのではなく、集団や大衆がその人物に与えるものである。今日は、大衆は、もはや特定の人にそのような「人物」という観念を与えようとはしない。だから、変わったのは人の力量や資質ではなく、その力量に意味を与えようとした大衆の心情のほうだ。

憲法にせよ、安保にせよ、構造改革にせよ戦後日本は「主体」的にやっているように見える。自意識としてはそうかもしれませんが、しかし、構造としては、その背後に「アメリカ」が控えています。それはわれわれからははっきりとは見えません。あるいは本当に明瞭なアメリカの意思があるのかもわかりません。しかし、「アメリカ的なもの」が背後にあることは間違いありません。われわれの「主体」とは、この「アメリカ的なもの」によって遠隔操作された主体というべきでしょう。なにせ「主体」とはまた「従属するもの」なのですから。

どうみても、わが日本は世界標準からずれていると思うことはあります。いや結構あることも事実です。しかしそれにしてもわが国の場合、「日本人は特殊」論理が多すぎるし、それに、内容の吟味や論議の以前にこの種のバイアスがかかってしまうのです。その結果、本当は吟味すべきことが視界から消失してしまう。「日本は世界からずれている」だの「遅れている」だのという言い方にわが国民は弱いのです。

2013年04月 「日本破滅論」 藤井聡、中野剛志 文春新書

人間の道徳的な退廃は、自らの死を認識することができないことに起因する。この現実の中

で、この大地の上でしっかり生きていこうという覚悟は、自らの死の認識から芽生えてくる。自分が死ぬとわかっているからこそ、今のこの時間を一生懸命に生きることができる。逆に、死を考えていないと、昨日のことが今日も続き、今日のことが明日も続くというように、無限にのんびんだらりと生きる人間になってしまう。現在の日本では、平和ボケ空間の中で死を想像することが極端に難しくなっている。「人間の命は地球よりも重い」と言ってしまった瞬間に、文字通り、死は「想像を絶するもの」になってしまったんですね。

個人的な道徳の次元では到底正当化できないが、やらなければならないことがある。全体のために個人が犠牲になることがある。それが社会というものだ。

義が大事だとしても、何が義であるかは簡単にはわからない。だからこそ議論をしないといけない。そして、いったん義を見定めれば、それを通さねばならない。このスピリッツを、明治黎明の志士たちは政治の中に体现しようと努力していたわけです。たとえば板垣退助は、「板垣死すとも自由は死せず」と言うわけですね。このような言論の伝統がついに死に掛けていることの象徴が、橋下現象なのではないか。

2013年04月 「奇跡の日本経済復興論」 藤原正彦、浜田宏一 文芸春秋

アメリカの風土には涙がない。たとえばグランドキャニオンを見ても壮大で美しいんですが、涙を感じない。しかし日本では、例えば奈良や飛鳥を歩いても、ただの田舎を歩いても、そこには人々の哀歓が、涙が土壌に染み込んでいる気がする。いろいろな人と会うたびに、細やかな気遣いに感激することが多く、本当に「美しい国」だと実感します。

2013年04月 「新・国富論」 浜矩子 文春新書

世界の金融資産総額を対世界GDP倍率で見ると、1990年の数値が1.77倍、2007年が3.45倍である。明らかにカネ余り状態である。このようにカネがだぶついてくれば、当然ながら、その価値は下がる。これまでの持続的長期金利安は、要するにこのカネ余り状態がもたらした現象だったのである。

量的緩和という異様な手段にまで訴えて、そして実に長きにわたってゼロ金利状態を作り出した。この金融政策がジャパンマネーを日本の外に押し出した。世界最大の貯蓄大国からカネが大量に流れ出れば、グローバルなレベルでもカネ余りになるのは当然だ。

グローバル時代は奪い合いの時代にあらず、分かち合いの時代なり。

グローバル長屋の合言葉は「差し伸べる手」なのだと思う。諸国民がお互いに対して差し伸べる手、やさしさの手、勇気ある手、知恵ある手だ。さらに差し伸べる手を持つ人々は、実は諸国民に止まってもいけないのだと思う。本当に力強い差し伸べる手を持つためには、我々は諸国民から「全市民」に脱皮しなければいけないのではないかと思う。国境をまたぐグローバル市民の視野があればこそ、お互いに慮りの手を差し伸べあうことができる。そういうことだろう。

2013年03月 「日本の財政転換の指針」 井手英策 岩波新書

日本は財政規模、公務員の対労働力人口比、双方で見て、先進国のなかで極めて「小さな政府」である。そのような小さな政府が、なぜ空前の財政赤字に苦しみ、反対になぜ北欧諸国のような支出の大きな政府が、時には財政黒字さえ実現するのであろうか。実際、北欧諸国の政府債務の対GDP比は50%程度である。小さな政府の典型である日本は200%、アメリカも100%を超えている。このことは政府を小さくすることと、赤字を減らすことが、必ずしも一致しないことを端的に示している。結局のところ、財政健全化の帰趨を決するのは、租税を調達する政府の実力なのである。中間層を受益者とし、財政高権の行使を国民に説得する能力のない政府、支出に節約の血道をあげ、奪い合いを是とする政府は、租税抵抗を生み、財政赤字に苦しむことだろう。

本書が追求するのは「尊厳と信頼の財政」である。市場の失敗の尻拭いをするために政府が、そして財政があるのではない。主流派経済学が想定するように人間の自由を前提としてもなお、政府、そして財政に独自の責任の領域がある。問われているのは、人々の生を豊かにする財政、そのような財政が生み出す善い社会への道筋である。財政を再建しなければ国家が破綻する。恫喝の政治に翻弄されてきた私たちの歴史に終止符を打つべきときが来ている。

2012年12月 「中国はいま」 国分良成 岩波新書

改革開放政策により、中国全体が驚くべき発展を遂げてきたのです。その発展を、日本は円借款や無償資金協力や技術協力によって強力にサポートしてきました。中国の改革開放を支援することは、中国の安定と繁栄に貢献するだけでなく、アジア地域全体ひいては世界全体にとっても有益であるという考えに基づいてなされたものでした。30年にわたり、日本は中国に総額3兆6000億円ものODAを供与してきました。

国家と国家の関係が中心だったこれまでの国際関係のあり方は終わりつつあります。いまはコミュニケーションのグローバルな広がりによって、国家が完全な主体として動くことは不可能になり、社会と社会の関係のほうが大きくなっている。

イオン吸着型鉱の採掘は、最初の頃はレアアースがありそうな山の表面を削って露天掘りする方法がとられていた。レアアースは固まった鉱床として存在するのではなく、広く分布しているため、露天掘りだと広範囲に植生を破壊することになり、土壌流出の問題を引き起こすうえに、この方法では資源利用率が30~50%にとどまる。そこで1990年代前半に「現地浸鉱」という採掘法が開発された。これは山の頂上に穴を開けて硫酸アンモニウムの溶液を流し込み、山中の風化した花崗岩に含まれるレアアースのイオンを浸出させ、山腹の穴やパイプによって溶液を回収する方法である。回収した溶液に炭酸水素アンモニウムを加えると白い沈殿物を生じるが、これを取り出して乾燥させれば、効率よくレアアース原料を得ることができる。土壌流出により農業に被害がもたらされたり、アンモニアが田畑に流れ込んで肥料過多の状態になって農作物の葉ばかり伸びて実を結ばなくなってしまう被害も発

生している。

2012年12月 「妻と別れたい男たち」 三浦展 集英社新書

「男性原理」とは、生物学的な性別が男であれ、女であれ、社会的な正統として「男性的」であることがよしとされるという意味。

ただ男性であるがゆえに相応の地位が与えられていた男性は、彼らよりよほど「ダンセイ原理」に適している女性によって、その地位を奪われた。かつて社会を動かしていたのは、「男性原理」に適しているかどうかに関わらず、男性であった。しかし、今、社会を動かしているのは、「男性原理」に適した男性と女性である。

もっと「女性原理」を。「女性原理」とは、闘争を好まず、ただ強いだけであることを重視せず、負けた人にやさしく、弱い人を助け、世話をし、ゆっくり、じっくり相手の言うことを聞き、相手を言い負かすことより、相手との会話自体を楽しみ、お金を稼いだり、出世したりするよりも、美的なものに囲まれ、なごやかに暮らし、より多くの人々が幸せになることを重視するものである。

お金がなくなったら自殺するしかない社会は改革しなければならないし、お金を稼げないことが男性の価値を下げるような偏った価値観に別れを告げる社会を作らなければならない。

2012年12月 「不機嫌な夫婦」 三砂ちずる 朝日新書

美しく聡明な30代の女性が、不倫相手との恋愛のうちに40代を過ぎてしまうことを私は痛ましくて見ていられない、とってしまうのです。相手の男の人は、この女性の人生、というものをいったい、どう思っているのか、とひとごとながら、腹立たしく思えてしまいます。本当に、双方、余計なお世話だ、とおっしゃるでしょうが。

女性は男性から、丁寧に扱われ、愛情を持って見つめられ、やさしくふれられて、抱きしめられて、やっぱり女になっていくのです。

男性は女性に優しくして欲しい。いつも女の人が「やさしい男の人がいいな」というのは、冗談でも照れ隠しでもない。本音です。女性は男性にやさしくしてほしいし、すべてうけてもらいたい。男性にイニシアチブもできるだけとってもらったほうが、多くの場合うまくいくのです。生産活動に従事できないとき、具体的に言えば幼かったり年老いていたり病んでいたりするときには、経済・生産活動とはちがう、生物として生き延びるための、要するに、家事、子育て、介護、といった分野をすべて経済生産活動と同じ価値観で実効しようとしてもほんとうはうまくまわってはいかないのです。生物として人間がやってきたことは近代的な労働感、経済観とはなじまないことのほうが多い。

2012年12月 「国防の常識」

しばしば国民の生命・財産を守るなどというが、実はそれだけでは国民全体を防衛している

ことにはならない。国民全体は経済と文化に支えられている。ならば経済や文化をどう守るかを考えなくてはなるまい。

中国軍は20年以上毎年、軍事費を十数%ずつ拡大させ続けている。これは経済成長率7~8%を倍近く上回る増加率であり、こんな軍拡を続けていけばいずれは民間投資が底をついてしまう。つまり軍拡を永久に続けるわけにはいかないことは誰の目にもあきらかであり、そこには必ず到達目標があるはずである。それが台湾武力侵攻であることは、ほぼ間違いない。

特許庁による「産業競争力の観点から見た我が国知的財産を巡る現状と課題」を参照。この報告書は日本の国際競争力が低下した理由を明確に答えている。「それは情報の流出による」と。

2012年09月 「日本の領土問題」 東郷和彦・保阪正康 角川 ONE テーマ

北方領土問題は、日本が太平洋戦争をいかにして戦い、いかにして敗戦をむかえたかという歴史に直結する、民族の心の問題である。

戦後の日韓関係全体の中で、日本が決して竹島問題を大上段にふりかざしたことがないことを、韓国は理解しているのだろうか。竹島の周りで起きている軍事演習や、喧伝されている「独島戦争」で盛り上がる韓国世論を、一度もそんなことを考えたことのない日本人が、げげんな眼差しで見ていることに、思いをはせたことはないのだろうか。

教科書についても、自分の教科書にあればほど明確に書いていることを、それよりも比べ物にならない地味な表現で書こうとしていることに対して、かくも激昂することが、「二重基準」だと冷静に思うことはないのだろうか。

中国にしても、台湾にしても、彼らから見た尖閣問題は、日本帝国がその力をアジアにおいて拡張した時代の記憶と結びついている。その観点から見たとき、竹島と尖閣の領有の過程が余りにも良く似ている。

戦時下で日本領となり、日本による侵略といった歴史認識に結びつきやすい。

尖閣諸島が日本領となったのが、日清戦争最中の1895年。

竹島が日本領に編入されたときは、日露戦争最中。日韓併合直前。

2012年09月 「日本のリアル」 養老猛司 PHP 新書

ダム建設の反対運動が起きると、「ダムをつくらないと、地元にお金が下りない」というヒトがよくいるでしょう。だったら、つくったことにして、お金をまいたらいいいじゃないかと僕は思うんですね。そのほうがコンクリートも鉄も使わないから、安く上がりますし、無駄にはなりません。

2012年09月 「世代間格差」 加藤久和 ちくま新書

若者世代に安定した仕事を提供し、職業体験を通じた人的資本の蓄積を進めることが、

何よりも先の世代との格差を縮めるために不可欠なことである。

収益率は負担額に対する給付額の比率：

$$\text{収益率} = (1 + \text{経済成長率}) \times (1 + \text{人口増加率}) \times (1 + \text{物価上昇率})$$

経済成長率が高いほど、人口増加率が高いほど、物価上昇率が高いほど、収益率は高い。

1980年代においては1単位の財政支出は3年前までに1.56単位の需要をもたらした、その意味ではケインズ政策は有効であった。しかし、1990年代以降では0.56単位しか増加していない。これは財政支出が民間の支出をクライドアウトさせたということを示しており、したがって財政政策は財政赤字を拡大するだけの結果に終わるということである。このように、誤った財政政策の実施は、景気対策に貢献せず財政政策の実施は、景気対策に貢献せず財政赤字を増やすだけという結果になれば、そのツケを後世代に残して、世代間格差の拡大を助長したにすぎないものと言えよう。

少なくとも将来世代のために、今の世代が負担できることは責任を持って負担すべきだ。

相続遺産は、生涯に得た所得のうち消費に回さなかった分としてとらえれば、これを社会にできるだけ還元するということが検討すべきであろう。

自分たちは子供を持たず、子供に費やす資源は自らの消費に充当し、高齢になれば他人が育てた子供の支援で年金の給付を受けるという構図もある。

世代間格差拡大の本質的な問題は、高齢者と若者の間の損得といったことではなく、われわれの経済社会の制度・システムが制度疲労を起こしており、持続可能性が失われつつあるということにある。

2012年09月 「ニュースキャスター」 大越健介 文芸春秋

昭和が終わり、バブルが崩壊し、もはや成長のパイを奪い合う時代はとうに去った。高齢者の人口は増え続け、一方で働く世代の人口は減り続ける。社会保障費の増大は火を見るよりも明らかであり、財政赤字はふくらむ一方である。日本はある種の「負の配分」を分かち合う時代に入っているとも言えるのだ。負の配分を奪い合う奇抜な人は少ないだろう。配分役の親分が居なくなったのはそういうことである。政治家が成長のパイの配分を担当するのではなく、負の配分を使命とする時代に入ったとすれば、政治は宿命的に、かつてよりもずっと不人気な商売になっていると言ってもよさそうだ。

被災地で、サッカーをやったことがない子供たちを集めてボールでゲームをしたりしていたら、70歳くらいのおばあさんが「私も入れてください」と入ってきたりしてすごく盛り上がった。みんないい笑顔をされていた。先の希望が見通せないときに、生きる希望というのは子供たち、若い人たちの笑顔のことなんだと気づいたんです。

今の生活が自分たちにとってよいかどうかばかりを考えがちだが、大切なのは、次の世代にどのような社会を残すかなのだ。

2012年09月 「当事者の時代」 佐々木俊尚 光文社新書

何かを語るときに、明瞭な口に出された言葉のやりとりだけで成り立つのがローコンテキスト。これに対して、口に出している言葉の背景にあるコンテキストまで考慮に入れないとコミュニケーションが成り立たないのがハイコンテキストだ。よく言われることだが、ドイツやフランス、アメリカ、イギリスなどの西欧文化の多くはローコンテキストだ。文章の主語と代名詞は明確で、文章を読めば誰でもその書き手の意思を理解できる。これに対して日本や韓国、中国などの東アジア諸国はハイコンテキストと言われる。言葉だけでは、その意味はあまり伝わらない。

日本で「想像」を生み出すのは、言葉や論理そのものではなく、それら言葉や論理を空気にくるむコンテキストとなるのである。西欧の国民国家が言葉によるイメージーションが生み出した共同体だとすれば、日本という共同体は、濃密なコンテキストの産物なのだ。日本社会では、コンテキストという空気感がわれわれの共同体を支える下部構造となっているのである。さらに言えば、インターネットのソーシャルメディアという新しい圏域は、印刷文化やテレビ文化と異なり、あるひとつのコンテキストが支配する空間の規模を縮小させてしまうという力を持っている。

みんな、今度の戦争でだまされたと言っている。みんなが口をそろえている。でも私の知っている限り、“おれがだました”って言っている人は一人もいない。「われわれは被害者である」という声が国民の圧倒的多数になっていた。「自分たちは被害者であり、犠牲者である」という意識を強調したほうが、反戦意識を国民の中に根付かせやすい、と運動の側が考えたからだった。「軍国主義はけしからん！」という気持ちを長続きさせるためには、「自分が酷い目にあつた」という思いを抱かせることが最も手っ取り早い、と考えられたのである。1970年代の“マイノリティ憑依”というパラダイムは、自分を絶対的な被害者と同化させ、加害者を「あなたは悪だ」と責めることができるようにした。自分が本当は加害者の一部でもあるということが忘れ去られていくということ。それはすなわち、自分がこの社会のインサイダーであることを引き受けるのではなく、アウトサイドへと退避することにほかならない。アウトサイドに退避し、アウトサイドの異邦人に憑依する。それによって自分は「アウトサイドからの視点」という第三者の立ち位置を手に入れるのだ。アウトサイドの神としての視点。

太平洋戦争から高度経済成長の60年代にいたるまで20年間、日本人は自分自身を「軍部に騙された無辜の庶民」ととらえていた。男たちは戦争に駆り出されて中国戦線や南方戦線で酷い目にあわされ、そして女や子供、高齢者は内地で空襲や原爆や、あるいは飢餓にもだえ苦しんだ。そういう徹底した被害者としての意識だけが、60年代までの日本に共有されていた空気感だったのである。

「私たちは悪いことは何もしていない。軍部に騙されたんだ」と言い募り、彼ら戦死者を忘れ去った先に、戦後の繁栄を築きあげたのである。白淵大尉は戦艦大和の沈没とともに戦死し、そして彼の死はただの犬死にとして終わったのだ。この犬死に対して、戦後の日本人は誰も返答できなかった。われわれ戦後社会は、戦後日本のいしづえになるために亡くなった

300万人以上の戦死者への後ろめたさの上に成り立つのだ。そしてこの後ろめたさは、日本の輝かしい戦後社会を薄く広く覆う「染み」のようなものになった。戦争経験を持っていたほとんどの日本人が、口にはしないけれどもどこか気にしつづけているある種の違和感として、戦後の社会に引っかかりつづけたのである。

人間が生きていくうえで、どうしても必要というものでない。不要のものを、人間と自然を犠牲にして大量生産し大量廃棄している。そのやがてすぐ廃棄物になっていく不要な「モノ」を生産し消費しているメカニズムにはめ込まれて、身動きできなくなっているわれわれ社会の全体像。

「ベトナム反戦運動自体はむしろ良いことだが“自分自身の問題”として捉えられていない限り、単なる免罪符に終わる」そう。マイノリティ憑依はしょせんはガス抜きの免罪符にしかならない。エンターテインメント化された免罪符——それこそがマイノリティ憑依の本質である。そしてこれは、太平洋戦争の戦死者に対する日本社会の後ろめたさからの回避という問題にも、重なり合ってくる。

高度経済成長とその後のバブル経済の中で、みんな右肩上がりに増えていく富をただひたすら分配していればよかった。表向きは対立とかいいながら、裏側ではみんな手を握っていたというのが日本の戦後社会の構図だった。

高度成長とそれに続くバブルの終焉、そしてグローバリゼーションによって、二重構造を支える富はゼロサムに転じた。カネの切れ目が、縁の切れ目だ。裏側で手を握っても富が分配されなくなったから、「じゃあ表に出るや」とガチンコの決着を付けようとする人たちがたくさん現われてくる。

メディアの空間はマイノリティ憑依というアウトサイドからの視点と、夜回り共同体という徹底的なインサイドからの視点の両極端に断絶してしまっている。この極端に乖離した二つの視点からの応酬のみで、日本の言論は成り立ってしまっている。このメディアのマイノリティ憑依に日本社会は引きずり込まれ、政治や経済や社会やさまざまな部分が侵食されてきた。「少数派の意見を汲み取っていない」「少数派が取り残される」という言説のもとに、多くの改革や変化は叩き潰されてきた。そういう構造はもう終わらせなければならない。今こそ当事者としての立ち位置を取り戻さなければならない。

2012年09月 「科学と宗教と死」 加賀乙彦 集英社新書

原発がなければ日本の繁栄はない、電気がなければ日本は滅びる、という思想を持っている人たちがたくさんいるわけです。本当にそうでしょうか。それが「豊かな国」なのでしょうか。

自分たちの力はわずかなもので、その無力を自覚しつつ補ってもらおう。人間が己の力で頑張るだけでは足りない、もっと大きな力を祈りによって引き出してもらおう、そういう謙虚な気持ちが必要だと思います。また、国民のほうも全部政府がやってくれる、政府に金を出せという気持ちではいけないと思います。我々も祈らなくてはならない。自分の体で奉仕しなく

てはならない。東日本大震災、大津波、そして福島原発事故は歴史上非常に大きな事件で、日本人はこれをきちんとした形で始末を付けなければならない。日本にとっても、世界にとっても、大きな試練です。これを間違えたら日本は滅びるといふくらいの覚悟でのぞまなければならないと思います。

人間のコントロールの及ばない原子力を使って何かをしようとした人間。

日本人は宗教を忘れてしまいました。宗教の力がないところに、科学の力だけがのさばっている。ここに私は危険を感じるのです。科学や技術を学んだとしても、それをどう生かしていくのか、どのように人間の幸福や豊かさにつなげていくのか。そこには倫理、道徳、思想が必要です。どのような思想を信じて生きていくのか、それは個々人が決めることですが、その教育が日本には足りないのではないのでしょうか。宗教には、人生の先達が何を悩んでどう生きたのか、さまざまな素晴らしい教えがたくさんあるのですから、それをもっと教えてもいいのではないのでしょうか。

2012年09月 「さもしい人間」 伊藤恭彦 新潮新書

苦しい状態にある人々を助け、誰もが再チャレンジできる制度をまずつくること。私益の追求が公共悪になってしまわないような制度をつくること。そして、この制度をみんなで応分の負担をしながら支えること。

ある有名な投資家が「お金儲けは悪いことですか」と発言し、日本中で議論が沸騰したことがある。この問題に対する本書の答えは「お金儲けは悪いことではない。ただし、公平な制度を支えるための貢献をしているならば」である。困っている人を放置し、一部の勝ち組だけがおいしい生活をする「さもしい制度」、これはわかっていればやめられる。

2012年09月 「中国は東アジアをどう変えるか」 白石隆、ハウ・カロライン 中公新書

米国は太平洋国家である。米国はアジア太平洋の平和と安定のために、日本、韓国における軍事的プレゼンスを維持するとともに、東南アジアにおける軍事的プレゼンスを強化する。ASEANを始めとして地域協力機構にも関与する。また「自由」「公平」で「開かれた」国際経済システムの維持・発展を目指す。

2012年06月 「通貨はこれからどうなるのか」 浜矩子 PHP ビジネス新書

グローバル時代は誰もが大同小異。ドングリ背比べ時代だ。わずかの違いを競って必死に背比べするドングリたちの中からは、次の基軸通貨国は出現しない。

食べ物は消費期限を過ぎれば腐る。金属は錆びる。洋服はボロボロになる。家も傷む。だがカネは銀行に預けておけば利子がつく。時間とともに価値が上がるのである。これはおかしい。これが問題だ。ゲゼルはそう考えた。カネがこんなに奇妙な代物だから、人々は使いもしないカネを貯め込む。ちゃんと使ってくれればみんな商売繁盛となるのに、欲の皮を突っ張らせてカネ儲けのためにカネ回しをやるヤカラがいるからバブルになる。使うべきとき

にカネを出し惜しみする連中がいるから、デフレになる。こんなことにならないために、何とかしなければならぬ。

人々がカネを使わないことが問題なのであれば、消費期限付き通貨には意味がある。だが、逆に人々が余りにも速くカネを使いすぎることが問題なのであれば、その時、世のため人のためとなる地域通貨は、むしろ高金利通貨であるべきだ。

地域通貨は、下手をすれば、徹底的な地産地消を促す手段としてばかり機能し、小さな共同体の極めて排他的な引きこもり体質を助長することになりかねない。ここをどう乗り越えていくかが課題だ。

ヒト・モノ・カネが国境を越えるグローバル時代において、排除の論理が角を突き合わせることは、必ずや、相互破壊につながる。これは何としてでも避けなければならない。そんな展開につながるような地域通貨の世界に、我々は決して足を踏み入れてはいけない。地域限定性を超えて、そして、明日になったら腐るからというので、慌ててアクセク使わなくてもよくて、相互排除につながらない。そのような地域通貨の世界は成り立ち得るか。それをさらに考えていくことが必要だ。

国富という数値がある。これは政府や企業など国全体が保有する資産から負債を差し引いた金額だが、これが 2009 年末で 2,712 兆円という巨額に上がっている。また毎年政府が発表する対外資産負債残高という数値がある。これは対外資産、つまり日本が海外に持っている債権の残高と、逆に海外からの負債の残高を差し引きしたもので、その結果債権のほうが多ければ対外純資産残高となる。この数値がどのくらいになるかといえば、2010 年度末で 251 兆円。これは文句なしの世界一なのである。

ちなみに 2010 年度の経常収支を見てみると、貿易収支が約 8 兆円のプラス、サービス収支が 1.5 兆円のマイナスなのに対し、所得収支が 11.6 兆円のプラスとなっている。経常移転収支を勘案した後の経常収支は 17.1 兆円の黒字となる。

国境なきヒト・モノ・カネの大移動時代。一蓮托生の「つながりすぎた」時代においては、内と外の関係がもはや判然としない。

日本は世界一の債権国になってなお、「債務国」メンタリティなのだろう。モノの輸出に依存している国際収支赤字国、というセルフイメージがいまだに根強く残っている。だからこれだけ円高への抵抗が強い。

緩和を求めて市中に出回る円をジャブジャブにすれば、円の金利は下がる。ここで従来なら、借金しやすくなったことで企業の投資意欲が改善し、それが経済の活性化につながる、という流れになった。だが今は、金利の安い円を借りて金利の高い海外に投資する、という流れがますます加速してしまうのだ。つまり、本来は日本国内で使われるべきお金が、海外にどんどん流れ出す。穴の開いたバケツに水を注ぎ込むようなものである。

2012 年 06 月 「通貨はこれからどうなるのか」 浜矩子 PHP ビジネス新書

グローバル時代は誰もが大同小異。ドングリの背比べ時代だ。わずかの違いを競って必死に

背比べするドングリたちの中からは、次の基軸通貨国は出現しない。

食べ物は消費期限を過ぎれば腐る。金属は錆びる。洋服はボロボロになる。家も傷む。だがカネは銀行に預けておけば利子がつく。時間とともに価値が上がるのである。これはおかしい。これが問題だ。ゲゼルはそう考えた。カネがこんなに奇妙な代物だから、人々は使いもしないカネを貯め込む。ちゃんと使ってくれればみんな商売繁盛となるのに、欲の皮を突っ張らせてカネ儲けのためにカネ回しをやるヤカラがいるからバブルになる。使うべきときにカネを出し惜しみする連中がいるから、デフレになる。こんなことにならないために、何とかしなければならぬ。

人々がカネを使わないことが問題なのであれば、消費期限付き通貨には意味がある。だが、逆に人々が余りにも速くカネを使いすぎることが問題なのであれば、その時、世のため人のためとなる地域通貨は、むしろ高金利通貨であるべきだ。

地域通貨は、下手をすれば、徹底的な地産地消を促す手段としてばかり機能し、小さな共同体の極めて排他的な引きこもり体質を助長することになりかねない。ここをどう乗り越えていくかが課題だ。

ヒト・モノ・カネが国境を越えるグローバル時代において、排除の論理が角を突き合わせることは、必ずや、相互破壊につながる。これは何としてでも避けなければならない。そんな展開につながるような地域通貨の世界に、我々は決して足を踏み入れてはいけない。地域限定性を超えて、そして、明日になったら腐るからというので、慌ててアクセク使わなくてもよくて、相互排除につながらない。そのような地域通貨の世界は成り立ち得るか。それをさらに考えていくことが必要だ。

国富という数値がある。これは政府や企業など国全体が保有する資産から負債を差し引いた金額だが、これが 2009 年末で 2,712 兆円という巨額に上がっている。また毎年政府が発表する対外資産負債残高という数値がある。これは対外資産、つまり日本が海外に持っている債権の残高と、逆に海外からの負債の残高を差し引きしたもので、その結果債権のほうが多ければ対外純資産残高となる。この数値がどのくらいになるかといえば、2010 年度末で 251 兆円。これは文句なしの世界一なのである。

ちなみに 2010 年度の経常収支を見てみると、貿易収支が約 8 兆円のプラス、サービス収支が 1.5 兆円のマイナスなのに対し、所得収支が 11.6 兆円のプラスとなっている。経常移転収支を勘案した後の経常収支は 17.1 兆円の黒字となる。

国境なきヒト・モノ・カネの大移動時代。一蓮托生の「つながりすぎた」時代においては、内と外の関係がもはや判然としない。

日本は世界一の債権国になってなお、「債務国」メンタリティなのだろう。モノの輸出に依存している国際収支赤字国、というセルフイメージがいまだに根強く残っている。だからこれだけ円高への抵抗が強い。

緩和を求めて市中に出回る円をジャブジャブにすれば、円の金利は下がる。ここで従来なら、借金しやすくなったことで企業の投資意欲が改善し、それが経済の活性化につながる、とい

う流れになった。だが今は、金利の安い円を借りて金利の高い海外に投資する、という流れがますます加速してしまうのだ。つまり、本来は日本国内で使われるべきお金が、海外にどんどん流れ出す。穴の開いたバケツに水を注ぎ込むようなものである。

2012年06月 「第四の消費」 三浦展 朝日新書

新しい物をつくらなくても、古い物だけで消費者が十分満足する時代になったのだ。これを私はかねてから「大衆文化のストック化」と呼んだ。資産が100万円しかなければ、どんどん働いて稼がなければならないが、資産が10億円あれば、その運用だけで暮らせるので、がつつ働く必要はない。それと同じで、文化もフローしかなければ、次々と新しい流行風俗、ヒット商品を作り出さなければならないが、ストックがあれば、それを使い回すだけでよくなる。

第三の消費社会から第四の消費社会への変化の特徴は以下の5点である。

1. 個人志向から社会志向へ、利己主義から利他主義へ
2. 私有主義からシェア志向へ
3. ブランド志向からシンプル・カジュアル志向へ
4. 欧米志向、都会志向、自分らしさから日本志向、地方志向へ
5. 「物からサービスへ」の本格化、あるいは人の重視へ

第四の消費社会では、自分の満足を最大化することを優先するという意味での利己主義ではなく、他者の満足をともに考慮すると言う意味での利他主義、あるいは他者、社会に対して何らかの貢献をしようという意識が広がる。その意味で社会志向と言ってもよい。

第四の消費社会では、他者とのつながりをつくり出すこと自体によるこびを見出すシェア志向の価値観、行動が広がっていく。このシェア志向の価値観、行動こそが、第四の消費社会における消費の基礎となっていくものである。

第四の消費社会では、他者とのつながりを作り出すこと自体によるこびを見出すシェア志向の価値観、行動が広がっていく。このシェア志向の価値観、行動こそが、第四の消費社会における消費の基礎となっていくものである。

情報の交換からよろこびが得られるようになると、たしかに人は物を買わなくなるだろう。物を買って得られる満足は、多くの場合、買った瞬間が最大であり、時間の経過とともに減っていく。それはどうしても一抹の空しさを伴う。しかし情報を交換することによる満足は、交換した瞬間が最大で、その後低減するわけではない。楽しさは交換によって増幅され、継続しうるのである。

消費することで他者とながらう、社会に貢献しようとする時代へ変化してきたのである。フェアトレードによる商品を買うことも第四の消費社会的な行動であろう。

物を買うことで人とのコミュニケーションが促進される、コミュニティが生まれる、そういう消費をしたいという心理が拡大してきた。

今後の社会においては、シェア型のライフスタイルはいわばセーフティネットとしての機

能を果たすともいえる。防犯、防災という意味でのセキュリティではなく、人生全体の保障という意味でのセキュリティとして、シェア型のライフスタイルが必要になるであろう。経済大国二位の座を中国に譲った現在、日本人は、経済大国に代わる誇りを、日本の伝統文化に求めているともいえる。ほとんどの国民は経済大国二位の座から落ちたことに失望していないように私には見える。むしろ、ようやく経済ではない別の価値観を国民が広く共有できるようになったことをよろこんでいるように思えるのである。さらに、グローバルゼーションが進み、世界中のライフスタイルが均質化していく中で、日本人らしさを求める心理が拡大したとも考えられる。

3.11 の大震災で、津波に流されるマイホームやマイカーを見て、物を所有することの空しさを感じた人々に、いらぬ物を買わない、つくらない、昔から使われている物を大事に使う、そういうシンプルな暮らし方を求める気分が広がった。こういう時代にデザインは「いかに魅力的なものを生み出すかではなく、それらを魅力的に味わう暮らしをいかに再興できるか」が今後の課題だ。物のデザインではなく、人と人のつながりのデザインが求められているのだ。

第一の消費社会は、世代的には大正生まれ世代の誕生から恥じまる。第二の消費社会は団塊世代の誕生から始まる。第三の消費社会は団塊ジュニア世代の誕生から始まる。第四の消費社会は 2005 年から始まり、団塊ジュニア世代が担う。

物を作って売り逃げをしていた今までのビジネスに慣れた企業からすると、シェア型のビジネスは手間がかかり、利幅が少ないと思えるだろう。またそういう手間暇かかる作業自体を好まない社員も多いだろう。シェア型のビジネスの時代には、女性の活躍が増える。男性はどちらかという、つくりっぱなしの売り逃げが好きである。もちろん個人差はあるが、一般論としてそういう傾向がある。明らかなのは、シェア型のビジネスにおいては、つくったものをケアする、人をケアする、人と頻りにコミュニケーションして新たなニーズを見つけ出して対応すると言う女性的な仕事が重要になるということであり、その意味で、女性的な人の活躍の場が増えると言うことである。

2012 年 06 月 「原発大国フランスからの警告」山口昌子 ワニブックス PLUS 新書

日本政府は当初、フランスはもとより米国など世界各国からの支援に対し明確な回答を即行行わなかった。むしろ「自分たちのことは自分たちです」との印象を外国に与えたのではないだろうか。実際は、未曾有の災害を前にして、目の前の処理に追われ、外国の支援に対して礼節をもって応えるという、文明国としての最低の外交態度が示せなかったのかもしれない。

救援隊に通訳は不要だ。宿舎など用意する必要もない。われわれは被災地に行くのだ。観光に行くわけではない。どんな環境、状況にも耐えられる訓練をしている。犬も同様だと日本当局を説得して、やっと入国が許された。

2012年06月 「世界で勝負する仕事術」 竹内健 幻冬舎新書

優秀な人材がいなく、優秀な人材が日本から出て行ってしまうことへの危惧。最近日本のメーカーも簡単にリストラをしたり、早期退職者を募るようになりました。国内にその受け皿がないため、そこから飛び出した優秀な技術者の多くは、韓国や台湾などに渡ってしまいます。切る側にとっては合理的な人員整理なのでしょうが、国全体から見たら貴重な人材の流出です。国と企業が協力し合い、フレキシブルな人材活用の仕組みを作ることが、日本のモノ作り全体の足元を確保するための急務だと感じています。

2012年05月 「傷ついた日本人へ」 ドライラマ 14世 新潮新書

欲望やエゴは、これまでむしろ「幸せ」を追求するモチベーションともなっていました。それをあえて捨ててしまいます。そして、他人への「愛」や「慈悲」、「利他的な考え」といった正反対の観念を取り入れるのです。欲望やエゴがあるからこそ人はいつも渴きを感じ、他人と争わざるを得ません。結局、欲望やエゴは自分の特になるどころか、自らを苦しめ悪い結果を生み出すものなのです。

「心の平和」は、精神的な幸福感です。あくまで自分の内部に生じるもの。外部に快樂の種を求めるのではなく、自分で「幸せ」を生み出すものなのです。外的条件に左右されることもなければ、誰かと争う必要もありません。個人の幸せが家庭の幸せを生み、家庭の幸せが社会、国家、そして世界の平和にもつながっていくのです。

物事は存在があって初めて認識されるけれども、どんな認識も単なる概念にすぎないので、だからあらゆる実態は「空」である。

「今」が一定の期間だとしたら、一体どこからどこまでが「今」なのでしょう。とてつもなく長い時間を「今」ということもできるし、ほんの一瞬を「今」ということもできる。結局、時間の基本である「今」ですら、正確に定義することができません。つまり、「時間」には確かな実体はないということです。確かに時間は存在し、常に流れているものですが、実体はない。私たちがどのように切り取るかで決まる、概念に過ぎないのです。

一瞬ごとの変化があるからこそ、一分ごとの変化があり、一日ごとの変化があり、一年ごとの変化がある。あらゆる物事は刹那の間にも生じて滅するという概念です。すべて一瞬一瞬変化していて、同じ状態ではない。これが仏教で言う本当の意味での「無常」なのです。こう考えると、目の前の現状を嘆いたり、今持っているものに執着したりすることが、いかに意味がないかわかるでしょう。全ては気づかぬうちに一瞬で変化してしまうものだからです。逆に言えば、どんな小さな変化でも、その積み重ねが大きな変化をもたらすということです。少しずつでも自分を良い方向へ高めることで、まとまった時間が流れたとき、目に見える変化となって現われるでしょう。

この世界のあらゆる事象が、はるか昔から連続性の中にあり、因果の法則によって関係しあっている。生物は意識と肉体の両方によって成り立っています。そのため、肉体の因が卵子と精子であるように、意識にも因があると仏教では考えています。意識だけが突然この世界

に生じるというのは論理的でなく、因果の法則にも反しています。

肉体が死んで別の物質に分解されるように、意識の本質は生命全体のサイクルのなかへ戻る。そして別の生命の意識を生み出す素となっているのです。これが「輪廻」です。輪廻とは、意識における因果のシステムなのです。始まりも終わりもない、本質的な連続性がそこにはあります。

結局自分に起こることは、過去に自分がした行為の結果ということなのです。これを「因果応報」といいます。因果に影響を与える条件や要素のことを「縁」といいます。

人の死後、意識が新しい命に移る際にも、何に生まれ変わるかは偶然では決まりません。因果の法則に従い、意識に残るカルマによって必然的に決まるのです。さらにそのカルマは本人が死んでも消えることはなく、新しい生命にも引き継ぎ受け継がれていくと考えられています。

私たちはこの惑星に一時的に滞在しているにすぎません。ここにいるのはせいぜい90年か100年のことでしょう。その短い間に何かよいこと、役に立つことをして他の人々の幸福に寄与できたなら、それが人生の意味であり、本当のゴールだといえます。

2012年05月 「日本のデザイン」 原研哉 岩波新書

日本はいま、歴史的な転換点にある。おそらく日本人の誰もが、この大きな転換点を感じているはずである。そこには明治維新以来、西洋文化に経済文化の舵を切ってこの方、抑圧され続けてきたひとつの問いが、うっすらと、しかしながらしっかりと浮上しつつある。千数百年という時間の中で醸成されてきた日本の感受性を、このまま希薄化させるのではなく、むしろ未来において取り戻していくことが、この国の可能性と誇りを保持していく上で有効ではないかと。

掃除をする人も、工事をする人も、料理をする人も、灯りを管理する人も、すべて丁寧に篤実に仕事をしている。あえて言葉にするなら「繊細」「丁寧」「緻密」「簡潔」。そんな価値観が根底にある。日本とはそういう国である。

特別な職人の領域だけ高邁な意識を持ち込むのではなく、ありふれた日常空間の始末をきちんとすることや、それをひとつの常識として社会全体で暗黙裡に共有すること。美意識とはそのような文化のありようではないか。

飽和した世界が今後求め始める「賢い小ささ」や、脱化石燃料を具体化していくクリーンエネルギーへの積極的な移行が、日本の車の特徴であり、その背景に、ステイタスや自己表現のメディアを超越した、クールな日用品としてのクルマ観の成熟がある。

クルマ単体ではなく、道路や通信システムを含んだ大きな環境が変化していく兆しがある。そこには読み取れる。クルマの技術も、巨大な都市インフラを制御する技術も、さらには移動に対するクールな認識の成熟をも含めて、日本はその変化の先端にいる。

第二次世界大戦後の高度経済成長の時期を過ぎて、今日の日本人は飢餓感を失い、闘争心や競争力を減じてしまっているように見える。しかしながら、競争心をあおり、混沌と成長を

同時に引き受ける時期を経た今だからこそ、僕らは少し平静な気持ちで、洗練へと向かうことができるのではないか。今はそういう時期にさしかかっているような気がするのだ。

もったいないのは、捨てることではなく、廃棄を運命付けられた不毛なる生産が意図され、次々と実行に移されることではないか。大量生産・大量消費を加速させてきたのは、企業のエゴイスティックな成長意欲だけではない。所有の果てを想像できない消費者のイマジネーションの脆弱さもそれに加担している。ものは売れてもいいが、それは世界を心地よくしていくことが前提であり、人はそのためにものを欲するのが自然である。さして必要ないものを溜め込むことは決して快適ではないし心地もよくない。

日本人は今日、自分たちの生き方にあった住まいのかたちを手にする気運を持ち始めている。同時に、靴を脱いで入る住環境は身体と環境の新たな対話性を生み出そうとしている。また巨大規模の都市構想のハードとソフトの両面で堅実なコンサルティングができるのだ。アジアの生活文化を「家」を介してリードできる可能性がここにある。

その国独自のもてなしと食の饗宴を基本とした宿泊施設で、西洋式の高級ホテルより高い対価を設定できるサービスの形式を持つ国は、世界広しと言えど日本において他にはない。シンガポールは富はあるが伝統文化はこれからだ。そういう場所から眺めると、一つの国の中で千数百年にわたって守られてきた伝統は、独特の輝きを放っている。

今日、低成長の時代を迎えて、日本はようやく自らの歴史と伝統が、世界の文脈で価値を生み出す稀有なソフト資源であることに気づき始めている。そして、さらに言えば、アジア全体の活性によって、西洋文明が席卷してきた世界に、新たな文化フロンティアが形成されていく可能性をリアルに感じ始めてもいる。

デザインという概念が、消費をあおる道具やブランド管理のノウハウの一環ではなく、暮らしの本質や文化の誇りに覚醒していく営みである。

2012年05月 「没落する文明」 萱野稔人・神里達博 集英社新書

理性や科学が答えを出せる問いはほんのわずかです。そもそも人間が死を乗り越えられない以上、一定の呪術性や儀式性を排除できない。それは理性を以って未来を予見できる能力を持ってしまった、つまりみずからの死を自覚できる不幸な動物としての人間の、まさに「業」です。

現代は、エネルギー消費を拡大させて経済成長するという時代そのものが終わりを迎えつつあるということになる。

マインドが高度成長の人だと、どうしても制度を成長という前提で考えてしまうんですね。

いままでは政治家は利益分配するのが仕事でしたけれど、財政赤字が拡大して行くこれからは、増税や受給削減など、不利益配分をしなければいけなくなる。

昭和的成長幻想さえ解除してしまえば、この先の日本は決して捨てたものではないと思います。実際、すでに若い人たちは脱成長へと意識が傾いているんじゃないでしょうか。

経済成長するかしないかに関わらず、今後の社会制度の設計は成長に対してニュートラルでなければいけません。日本では内需の層も厚く、地場の産業もまだ残っているわけだから、ないものねだりばかりしないで、日本経済の「強さ」を再発見することが必要です。現在私たちが直面している経済停滞は、市場における景気循環の位置局面なのではなく、エネルギーの問題や人口動態をも含んだ、人類史的な生産拡大のいきずまりの反映です。環境問題や公害など負の問題を処理する力が、国力になる時代になるのではないか。拡大の力じゃなくて、縮小の力をもっているところが、ある種の発言力をもつ。ただ、それは軍事力に裏付けられているような発言力かもしれませんね。軍事力というのは常に拡大志向ですから。

我々の先祖は度重なる地震・津波・噴火と、おびただしい悲劇を目の当りにしたが、いつもそれらを乗り越えてきた。我々の心の古層に根ざす透明な無常観と、未来への優しい楽観の源は、この物理的な条件と無縁ではない。

2012年05月 「政府は必ず嘘をつく」 堤未果 角川SSC新書

東京都は瓦礫の受け入れをする業者を10月初旬に公募している。その処理能力として1日100ト以上の処理能力を持つことという条件をつけている。都内にこの能力ある産業廃棄物処理施設を持っている業者は「東京臨海リサイクルパワー(株)」1社である。そしてこの会社は東京電力が95%出資している会社。東京電力は、瓦礫処理にかかる費用を一切負担しなくていいどころか、汚染瓦礫の処理で利益を得ることができ、さらに瓦礫焼却による発電から利益も得られることになる。

除染モデル事業を受注したのは大手建設業者である大林・大成・鹿島建設の3社が占め、実際の作業も地元の業者ではなく系列の下請け会社に依頼された。

2011年8月、「放射性物質による環境汚染への対処に関する特別措置法」の採決が行われる直前に、政府は「環境大臣は制定又は改廃をする時は原子力委員会の意見を聴かなければならない」という条文を加えた。これによって除染の基準を原子力安全委員会が設定し、<原子力村>の中核である日本原子力機構が除染事業を受託した。

Who makes Democracy? 単なる計算方式だったはずなのに、いつの間にか幸福を測るものさしにすりかわったGDP信仰を手放し、幸福とは何か、子供たちに手渡したいのはどんなしゃかいだろうかと、ひとりひとりが本気で考える必要がある。

2012年05月 「パチンコに日本人は20年で540兆円使った」若宮健 幻冬舎新書

カジノの売上げでマカオが世界一だが、その金額は2010年で1兆8800億円。2010年の日本のパチンコの売上げは19兆3800億円。本の売上げは2兆円を割った。「失われた20年」の元凶はパチンコだった。1991年以降、540兆円が闇に消えている。

東日本大震災の被災地のパチンコ店は満員盛況である。5万円の義援金が1日ももたずパチンコに消えていくとしたら哀しいと言うしかない。

2012年05月 「公共事業が日本を救う」 藤井聡 文春新書

21世紀を迎えてから10年来、膨張してきた「国の借金」は、公共事業が原因なのではなく「社会保障関係費」こそが原因なのだ。

人々がクルマを使うようになった必然的な結果として街の中心が衰退し、「シャッター街」が見られるようになった。多くのヨーロッパ都市では、都心へのクルマの流入を徹底的に排除した一方で、日本では、ほぼ無制限にクルマを都心部に流入させた。

豊かな暮らしを手に入れるためには、少しずつ少しずつ、我々の暮らしを支える「インフラ」を積み重ね、「ストック」していかなければならなかったのである。

橋が作られてから、おおよそ50年が経った時代に、老朽化による「落橋」がはじまった。これから20年程度で、実に50%、全国で7万橋以上が放置しておけば危険な橋になってしまう。一人でも多くの国民が「日本の橋の危機」を十分に理解し、世論を通じてそれへの対応の必要性を主張するようになれば、国も自治体も、橋のメンテナンスに割く財源を確保するための方法を、もっと真剣に議論するようになるかもしれない。

日本で今、一番「深い」埠頭は、横浜港にある「16m」の水深の埠頭である。しかし、今一番大きな船が入港するには「18m」の深さの埠頭が必要なのである。

自動車1万台当たりの道路の長さは先進国中最低レベルである。

高速道路網は一旦作ってしまえば、メンテナンスの費用こそ必要とはされるが、その後何十年、何百年と使い続けることができる。それが「ストック」というものであり、毎年毎年使い切ってしまうことが前提となっている「社会保障」とは、全く異なるオカネの使い道なのである。

2012年05月 「道路整備予算」

高速道路のうち開通から30年以上の道路がすでに40%ある。国土交通省によると、補修が必要な高速道路の損傷の数は2011年度で55万5千件ある。5年前と比べて5倍に膨らんだ。損傷が軽微な段階で補修し、インフラの寿命をできるだけ延ばす工夫がいる。道路整備の重点を「造る」から「守る」に変えるときだ。

2012年05月 「パチンコに日本人は20年で540兆円使った」若宮健 幻冬舎新書

カジノの売上げでマカオが世界一だが、その金額は2010年で1兆8800億円。2010年の日本のパチンコの売上げは19兆3800億円。本の売上げは2兆円を割った。「失われた20年」の元凶はパチンコだった。1991年以降、540兆円が闇に消えている。

東日本大震災の被災地のパチンコ店は満員盛況である。5万円の義援金が1日ももたずパチンコに消えていくとしたら哀しいと言うしかない。

2012年05月 「道路整備予算」

高速道路のうち開通から 30 年以上の道路がすでに 40%ある。国土交通省によると、補修が必要な高速道路の損傷の数は 2011 年度で 55 万 5 千件ある。5 年前と比べて 5 倍に膨らんだ。損傷が軽微な段階で補修し、インフラの寿命をできるだけ延ばす工夫がいる。道路整備の重点を「造る」から「守る」に変えるときだ。

2012 年 01 月 「下山の思想」 五木寛之 幻冬舎新書

太平洋戦争の末期、沖縄まで米軍が上陸しているにもかかわらず、私たちは日本が負けるなど夢にも思っていなかった。敗戦を冷静に予想していた少数のエリートはいただろう。しかし、一般の国民は、日本が負ける事態をまったく想像してもみなかったのである。目をそらす、とは、そういうことだ。

まさにいま下山にさしかかった大国がアメリカだろう。私たちがもしアメリカに学ぶものがあるとすれば、発展と成長の過去ではなく、大国が急激な下山をどうしてなしとげるかを注目すべきなのだ。

節電の運動が普及して、街は暗い。アンチ自粛ムードを叫ぶ声もしきりだ。しかし最近、ようやく夜の濃さを再発見したような気がして、節電の街があまり不安ではない。

「生まれてきてすみません」と、書いた作家がいた。それにならっていうなら、さしずめ、「生き残ってすみません」

2012 年 01 月 「バブル女は死ねばいい」 杉浦由美子 光文社新書

バブル女→1960 年代後半生まれ。 団塊ジュニア→1971~74 年生まれ

10 代にバブルを経験し、若くして物質的に飽和状態を経験した団塊ジュニアと、それ以降の世代はクラウンなんかには憧れない。車マニアでもない限り「安全で運転しやすければいい」と考える。経済力があっても「車庫入れが楽だから」という理由で小型車を買う人も多い。と、いうか、交通機関が発達している都市部に住むなら車は邪魔なだけ。

私は団塊世代の男性が苦手ではない。なぜなら、こうも話が通じない相手を目の前にすると清々しい気持ちになるからだ。

バブル崩壊後、「男性に養ってもらう」というライフモデルが崩壊したので「寿退社」という慣例も消滅した。

ヨン様の追っかけをしながら、家ではメタボの夫に尽くすバブル世代の奥様たちは、男性に関して「趣味」では「自分らしさ」を追及しているが、結婚、つまり、リアルな男性選びに関しては、自分を押し殺している。

「もっとお金が欲しい」という理由で相手を選んだり、性的な行為をすることはできない。借金など切実な理由があるから我慢してやるのだ。性的に受け付けないお見合い相手は断ってしまう。

バブル女は、会社で管理職になることを誇りとする。しかし、団塊ジュニア以降の女子だと「うわ、責任を押し付けられた」と受け止めてしまう。取材でもバブル世代の正社員女性たち

ははっきりと「昇進したい」と話すので少し新鮮だった。「今どき、会社で偉くなりたい女性がいるのか」と。

「バリキャリ」の定義は、「女だてらに男性と同様にバリバリ働く」だ。男女差のない若い世代は、「バリキャリ」なんて言葉は使わない。

妊娠した彼女。今後も産まないだろう私たち。同じ世代で同じように子供が欲しいと願っているのだが、どこに差があるのだろうか？それは経済力でも健康でも、実家のサポートでもない。「度胸」としか言いようがない。

出産が難しい時代になっても、女性たちの母性は退化していない。いくら母性をバーチャルに処理しても、し尽くせない場合はどうすればいいのか。子供を産むこと、そして、子供を育てること。これ以上に価値がある「生きる理由」が他にあるなら教えて欲しい。あんなに豊潤でいとおしい存在が他にあるだろうか。

40歳を過ぎれば、「いつか産めるかも」、という妄想すらできなくなる。その後、私たちはどうやって生きていくのだろうか。そう考えると日本の女性の平均寿命の長さは、残酷なものに思えてくるのだ。

取材で会ったバブル姉さんたちは、みな素敵だった。いかんせん、「女子」であることを捨てていない。化粧品や洋服にお金を使い、小奇麗にし、世知辛い世の中に対して不平不満も言わず、前向きに生きている。

## 2012年01月 「TPP 亡国論」 中野剛志 集英社新書

世界不況で各国が他国を犠牲にしても生き残ろうと必死になっているという状態にある中で、外国の評価を得ようとしたり、関心を引こうとしたりすることは、実に馬鹿げたことだといいたいのです。まして、日本が閉鎖的であるかのような、自虐的である以前に事実反するメッセージを垂れ流すなど、言語道断です。

2010年11月は、2006年と比較して46%も円高・ウォン安となっている。この4年間で、ウォンの価値は円の半分程度まで下落しているのですから、これでは、日本に対する韓国の国際競争力が強くなるのは当たり前です。韓国と日本の国際競争は、関税の有無以前に、為替レートで勝負が決まっているのです。グローバル化した世界では、関税より通貨の影響のほうがはるかに大きい。

韓国はGDPの4割以上を輸出に依存する外需依存国。これに対して、日本は、GDPに占める輸出の比率は20%にも満たないという内需大国。

固定相場制を採用する国では、経常収支黒字が続くと、政府は、為替相場を維持するために、民間企業が稼いだ外貨を自国通貨で買わなければなりません。その結果、政府の外貨準備高が増えます。変動相場制に於いては、「国際収支の天井（経済が成長しても為替を一定に維持するために、人為的に成長を抑制すること）」による制約はないため、経常収支赤字が続くと、為替が変動して自国通貨が安くなり、輸出が増えます。輸出が増えれば経常収支は黒字になって、外貨は増えます。

デフレ下では、企業も消費者も銀行からお金を借りなくなります。そうすると、いくら中央銀行が貨幣を供給しても、資金需要がないので、貨幣は銀行や企業の中に貯蓄されるだけです。

貿易自由化により、国産品が輸入品に代替されると、需要側では、国産品関連の雇用が奪われ、内需が縮小します。他方、供給側を見ると、貿易自由化による競争の激化で生産性が上昇し供給が増加します。こうして貿易自由化は、需要不足と供給過剰を深刻化し、デフレを悪化させることとなります。

なぜ、保護主義的な国々の間で、貿易がより拡大するのか。それは保護関税がデフレを阻止し、内需を拡大し、その結果、経済が成長したので輸入がかえって増えるからである。

現在では市販されている野菜類の 90%以上がアメリカのモンサント社製の種子からなります。農家はモンサント社からの種子を購入し続けなければなりません。

いざとなったら、自分たちの力で自分の国を守るという独立国家として当然の責務をタブー視せず、自主防衛を覚悟すればよいのではないのでしょうか。そうすれば、アメリカの要求に素直に応じておかないと国が守れないのではないかなどという強迫観念におびえずに、世界情勢を正しく分析し、問題の本質を正面から議論して、日本を守るための国家戦略を構想することができるはずです。

#### 2012年01月 「中国の地下経済」 宮坂聡 文春新書

中国では人口のわずか1%の人々が41.1%もの富を独占しているという。ということは単純に考えれば、残りの99%の人々は平均して日本人の20分の1の生活水準だ。いったいそのうちの何%が「1%」の仲間入りができるというのか。中国を訪れる外国人やビジネスマンが日常的に接する中国人はせいぜい上澄みの10%だ。その階層の中国人がいかに特殊な人々かがわかるだろう。

中国社会に生じた数々の亀裂が、ここ数年の間に急速に広がり、巨大な“負け組み”を生み出し始めていることは、多くの中国人が共有している感覚だ。国栄えて民滅ぶ。

中国における個人消費の弱さと伸び悩みは先進国と比較しても顕著で、高い成長を続けてきた中国経済にとって深刻なアキレス腱なのである。

#### 2012年01月 「日経新聞より」

3.11の直後には、世界の国々が日本に手を差し伸べた。米欧の先進国だけではない。最貧国と呼ばれるアジアやアフリカの途上国から、熱いメッセージと物資が次々と送られてきたのは新鮮な驚きだった。

インド洋に浮かぶ島国モルディブからは、特産品のツナ缶が69万個も届いた。お金を出せない貧しい国民が、ツナ缶を持ち寄ったのだという。

バングラディッシュ政府は毛布2千枚、長靴5百足を寄付してくれた。

日本という国がどれほど世界から愛され、期待されているかを示す証ではなかったか。日本

の価値観や文化が、世界の人々の共感を得ている。私たち日本人自身が気づいていなかった、もう一つの日本である。

日本人は出産と育児を母親に任せきりで、知らん顔をしている父親はいないか。世の中の仕事を男だけで独占していないか。子供は社会の宝である。女と男が喜びと苦労を分かち合っ  
てこそ、家庭や職場が元気に生まれ変わる。

2011年12月 「成熟ニッポン、もう経済成長はいらない」 橘木俊詔、浜矩子 朝日新書  
グローバル時代においては、ヒト・モノ・カネはあっちこっちに行ってしまうので、突出した強さを持つ国の存在が許されない。中国が世界の工場だとはけっして言えません。正確に言えば、世界が中国を工場にしているのであって、中国で生産活動を行っている企業はあらかた中国企業ではありません。

日本の女性は最高の貿易財である。男性は腰が重い、適応力がない、そしてやわである。日本の女性は虐げられてきたから強くなった。すごくフットワークが軽くて適応力抜群、そしてタフです。まだ日本の企業は経営者には圧倒的に男性が多いし、かつ男性は総合職、女性は一般職というイメージがあります。男性の発想が続いているのです。

2011年12月 「上から目線の構造」 榎本博明 日経プレミアシリーズ

部下や上司から「上から目線」を指摘されたりしたら、それはもう心穏やかではいられない。自分の価値の源泉は、能力や人格そのものではなく、人から気に入られるかどうかなのだから。人からの人気によって自分の価値が決まる。ゆえに、みんな人から良く思われたいという気持ちが強い。上司や先輩としても、部下や後輩から良く思われているかどうかは大いに気になるところだ。

親切心からアドバイスしてくれた相手に対して、「こちらに対して優位を誇示している」ように感じる。そこに見え隠れしているのは、「見下され不安」である。見下されるのではないかといった不安が強いために、本来は役に立つアドバイスも、こちらに対して優位を誇示する材料と受け止めてしまうのだ。見下され不安の強い心の目には、親切な態度が見下す態度に映る。

自分からアピールせずに、相手がこちらのひそかな要求にこたえてくれることをひたすら期待して待つ。それが日本流のやりかたなのだ。だからこそ相手の出方が非常に気になる。人からどう見られるかによって自己像が作られていく。そこでわかるのが、人間関係の希薄化と言われるようになるとともに、「自分がわからない」という人々が増えてきたことの理由である。人間関係が希薄化すると、他人を鏡とする機会が少なくなる。ゆえに、自分がわからなくなるのである。人間関係の希薄化によって、他人が得たいの知れない存在になり、「他人が怖い、他人がわからない」という心理が広まった。それと同時に、アイデンティティの拡散、つまり「自分がわからない」という心理が蔓延してきた。

人からどう見られるかを気にするというのは、あくまでも自分自身への関心だ。自己愛の視

線を相手を通して自分に向けているにすぎない。相手そのものなど眼中にないのだ。人の目に自分がどう映っているかが気になるだけで、他人そのものに関心が向いているわけではない。

日本文化には「甘えの構造」が根付いており、自分はひたすら謙遜しつつ相手が配慮し評価し良きに取り計らってくれるのを期待して待つといった姿勢をとらざるを得ない。相手がこちらの期待通りに評価してくれるかどうかはすべてがかかっている。ゆえに、人からどう見られているかに過敏にならざるを得ないのだ。

世の中を勝ち負けの図式で見る傾向のある人は、人間関係も上下の図式で見ようとする。自分が勝っている、優位に立っていると思えばよいが、そうでないとき、このタイプは不安を強め、何とか優位に立っているかのように見せかけたいと願ひ、尊大なポーズをとる。

## 2011年12月 「飛岡健の未来予測塾」 飛岡健

世界である程度まとまった購買力のある国は日本しかない。

TPP（関税）よりも円高、デフレのほうが日本に対する影響力は大きい。

日本が貿易赤字になっている国はスイス、フランス、イタリーのみ。ブランドの中古市場もできあがっている。

世界中の人々にとって日本人（生活様式と日用品とサービス）の生活はあこがれ。

今日の世界の趨勢は「世界中が同一ルールの下での自由競争に移って行く」と考えるのが自然。

日本の産業界は、円高でも世界の競争に太刀打ちできるような産業構造に転換するべく努力を続けていくべきであろう。何故なら1973年のオイルショック以来、約40年間に渡って、日本はマクロに見れば常に円高基調であり、その中で確実に経済、特に輸出を拡大して外貨を稼ぎ続けてきたのであり、その延長線を行っていけばよいからである。

デフレは避けようがない。日本人の債券はデフレで価値が上がる。デフレと収入のバランスの崩れが問題。

中間層は分離する。超金持ちへ一部移り、大部分は低所得層へ落ち込んでいく。

“成長の読み”と“仕掛けのタイミング”そして“度胸”。「虎穴に入らずんば、虎子を得ず」の諺と「石橋を叩いて渡れ」の教えをどう調節するのか。その人の能力と感性であろう。「敵を知り己を知らずんば百戦危うからず」の如くに行う必要がある。

今の経済学には「太陽から贈与された」と「生態系を切り離している」の観点がない。

私は沖縄は、日本のために貢献してしかるべきだと考えている。何故ならそれだけの税金が今日も沖縄に対価として支払われているからだ。公共の場ではなかなかそうした発言をする訳にはいかない。

人口が70億人を超え、その中で資源エネルギーの価格が上昇し、更にそれらを国家の戦略として活用していく国が増えてきている。そしてその傾向はますます強いものになっていくであろう。日本はそうした状況下で脱中国依存の戦略を最も果敢に挑戦している

国である。

2011年12月 「上野先生、勝手に死なれちゃ困ります」 上野千鶴子・古市憲寿 光文社新書

団塊世代は雇用はいくらでもあった。

実は自分自身が魚の釣り方を知らなかった世代ではないか。親から生業を教わったわったわけではないけれど、サラリーマンしか知らないから、それしか教えられない。団塊の世代の男性は「会社以外では何もできない」「そもそも会社できちんと働いているのか疑問」

同じ職場にいればいるほど、年齢に応じて給与が上がるという年齢差別。団塊の世代はこの既得権を手にしたまま老後に入っていく。これがケシカラン。

団塊の世代の男性は社畜になったおかげで、やっとの思いでストックを手に入れた。社畜であったことのご褒美を自分で食いつぶしてどこが悪い？社畜になりたくないという一点で女と若者は意見を共有できる。

最近の若者が置かれている状況は、「女性」が近代史上置かれてきた立場と似ている。つまり社会から排除され、マージナルな領域に留めおかれる二流市民ということです。

2011年10月 「人口激減」 毛受敏裕 新潮新書

2009年正月、日比谷公園の年越し派遣村は社会的関心を集めた。多くの若者が職を求めている姿を見た大手クリーニングチェーンの理事長は、すぐに職業安定所に向かった。深刻な人手不足が続いていたからだ。正社員・月収24万円の条件で人材を募集したところ、180名が応募し、そのうち12名を採用したという。ところが、1週間たって残ったのはわずか1人。「おなか痛い」「仕事が合わない」と出勤初日の午後に退職届を出した人もいた。

2011年10月 「文明の災禍」 内山節 新潮新書

生きているからといって「生」だけがあるのではない。死が忍び込んでくる静けさの中に「生」がある。私たちは生と死を同次元で考えなければならなくなった。しかも世代を超えたつながりをふくめて、である。

死者を弔うとは、消えていった人たちを弔うということではない。死者がこの社会を支える永遠の存在になったということを死者とともに確認することであり、これからも死者とともに生き続けることを約束することでもある。だから弔いという供養は、次のステップへの出発点になった。だがここで忘れてはならないことがある。それはこの供養は共同体があってこそ真価を発揮する、ということである。

現代文明は新しい形での死を諒解する構造をつくりださなかった。なぜなら、現代文明は生の饗宴として展開したからである。あるいは個人を軸に置いた生の饗宴として展開した。それでは生と死のつながりの諒解など形成しようにもない。

私たちは「群集」でしかなかったという思いが私にはある。巨大システムに依存して生きる

群衆でしかなかった。近代—現代の社会はこのような群集を大量に創り出すことによって、誰が操り、誰が操られているのかさえ分からない構造を作り出していた。

率直に述べれば、危険だから原発はやめるべきだという論拠だけで、私は原発の終了を主張する気はない。もちろん、安全だとは思っていない。だがその前に、私は原発を必要だと考えるような生き方はしたくないのである。

原発事故は、創造なき破壊を成立させてしまった。これから、おそらくは何十年かの間、期限が決められないのだからその意味で永遠に、原発周辺の地域ではいかなる創造も生まれえない。時間も含めて、破壊されただけである。

これからは戦後史のなかで人々を引きつけたもの、その意味で力を感じさせたものが、次々に色あせていくだろう。新幹線とか高速道路とか、大きなビルとか高いタワーとか、さらにはエネルギーに活動しつづけるプラントとか向上とか。人々はそれらのものを壊そうともしないし、これまでどおり使っていくだろう。しかしそれらのものが自分たちの力の象徴としての役割を持つ時代は終わる。あるいは求心力のある象徴ではなくなっていく。そういう転換が静かに広がっていくだろうと私は思う。なぜなら戦後の発展のイメージを生み出した構造が壊れたのだから。

東日本大震災を経験して、多くの人たちが何かが変わらなければいけないと感じた。それはこれまでの思想にしたがって突き進んだのでは未来は泥沼になっていくという思いだった。何かを変えなければいけないのである。

戦後の思想とともに形成された文明が原発事故を起こし、私たちの社会を破壊する要因になったことが、いまでは明らかだからである。ここには戦後の思想の敗北がある。あるいは「東京づくり」をすすめていった思想が敗北したことを、今回の事態は示している、と言ってもよいだろう。

これからの日本の社会作りの思想とは何か。それは文学的、あるいは文化的に語られるべきものではないか。

たとえば海の偉大さを感じながら暮らすことのできる町、ということでもいい。学校帰りに子供たちが道路や草原で遊んでいる町、でもいい。お祭りにみんなが集まってくる町でも、高齢者たちの笑い声が聞こえてくる町でもいい。風の中に自然を感じることができる町でも、仕事帰りの人たちが充足感に満ちた表情をしている町でもいい。

今回の大震災は私たちの社会を変えていくだろうと私も思っている。その理由は大きな衝撃を受けたということだけにあるのではない。私たちの社会が、すでに変革にむけて歩み始めていたからだ。すでに変革の方向を人々はつかみはじめていたからである。

原発事故は、私たちが作り出した文明自体が大きな禍いの原因になりはじめた時代の到来を確認させた。

現代文明のみなおしが必要だと語ることによって、自分を知の高みに立たせてしまうことにも私は同意できない。私の知性は本質を見抜いている、とでもいうような語りをすることによって自分自身に満足していく、そういう知のあり方に私は同意したくない。

2011年10月 「新・墮落論」 石原慎太郎 新潮新書

思い返してみると私は至福な人生を送ってこられたものだと思います。なんといっても私の青春はこの国の第二の青春ともいえるべき高度成長と重なっていました。

人間は何かのはずみを得なくては、最も根源的な物事への直視を取り戻すことは難しいものです。当節世の中の出来事に不満、あるいは不安や危惧を抱いていない人間は少ないでしょうが、それでもなお人々は異常、あるいは不本意な出来事の堆積にただ埋没して、自分たちがいかに、いかなる所にさしかかっているかを本気で知ろうとはしません。自分たちの欲望の堆積がこの国をどこで貶めてしまったかを。そしてそれを我々の努力の所産である、いかなる技術状況がもたらしたものであるかをほとんど知ろうとはしない。

国家が衰え傾くということは、私の、私たちの人生が衰え傾くということです。それを願わぬなら、国と表裏一体の己のためにこそ、国について思い、考えなくてはならないのです。国を変えていくために、今自分がどう変わらなくてはならないのかを。この国をここまで墮落させ衰えさせた自分の我欲を、どう統御し抑制し、己の人生の中で真に何を望んでいくべきかをそれぞれが考えるべきなのです。国家が荒廃して沈むということは、自分の人生が荒廃して沈むということに他ならない。一蓮托生というのはまさにその事です。国家が在って私が在り、私が在って国家が在る。

現代の多くの若い男を草食動物的といういわれはさまざまあるだろうが、端的に彼らの経験に身体性が備わっていない、肉感が乏しいということです。何につけ体を張って生きていない。

我々は国家の衰運のなかで自分の人生を失うつもりは毛頭ない。この国がなお歴然と、どこか他国に従属してかろうじて長らえることなど絶対に好みはしない。我欲を堪えて抑制することで初めて、個々人の人生はしなやかでしたたかなものになっていくし、それが国家を支えるよすがにもなるのです。

2011年10月 「みっともない老い方」 川北義則 PHP新書

人はこの世にいてこそ。その笑顔、その言葉、そのまなざし、その温みまで「この世にいてこそ」です。姿があるということ、重く受け止めることがどれだけ大切か思い知らされました。

2011年10月 「日本の大転換」 中沢新一 集英社新書

資本主義は成長を続けなければ、衰退ないしは停止に向かうシステムである。この点は原子炉と極めてよく似ている。核分裂の連鎖反応が続かなければ原子炉は稼働できないが、そのためには中性子の増倍率が1以上でなければならない。資本主義の場合も、利潤率が1以上でなければなりたないからである。成長を持続できるシステムであるために、資本主義は大量生産と大量消費を世界に要求する。そのために、資本主義は資源とみなされる生態圏

の一部を、無際限に開発・消費することによって、生態圏のバランスを破壊する。また大量消費が行われることで、莫大な量の産業廃棄物や生活廃棄物と並んで、大量の CO2 が排出され、生態圏にとってきわめて重大なリスクを生み出している。

資本主義は市場の原理が、社会の全域に拡大されたシステムである。社会というものをなりたたせている原理は、市場を作動させている原理と、根本的な違いをもっている。それどころか市場の原理には、人間の結びつきでできた社会を、解体に導いていくような力が潜んでいる。

社会というのはどこでも、具体的な人間の心のつながりでできている。社会のなかの個人は、程度の違いはあっても、けっして孤立して存在していない。さまざまな回路を通して、人間同士の心のつながりを維持しようという方向に、社会は働きをおこなおうとする。つまり、人間同士を分離するのではなく、結びつける作用が社会には内在している。

自分が耕作している土地ばかりではなく、そのまわりに広がっている自然を、農民はただの資源とはみなしていない。まるで、自分の存在の一部であるかのように、あるいは自分がまわりの自然の一部であるかのように感じている。

市場へ持ち込まれた商品は一旦すべての「縁」を断ち切られて、いわば「無縁」となった品々である。

地球生態圏を生きるすべての生命のほとんどの活動は、太陽エネルギーによって支えられている。太陽と私たち生命との間に、交換関係はなりたっていない。太陽からの一方的贈与によって、私たちは支えられている。

原子力発電の技術がはらむ生態圏への危険性は、将来的にもけっして消えることがない。危険の封じ込めのために、小さな範囲内での改良は可能であろうが、人類に与えられた程度の知性をもってしては、この技術の根本の構造を変えることは不可能である。エネルギー獲得のための技術として、原子力発電をできるだけすみやかに退場させなければならない理由はここにある。

自然エネルギーをビジネスの話で終わらせてはいけない。私たちはビジネスも包み込むことのできるほどに強力なビジョンをもち、それを実現させていくための見取り図を、あらかじめ描いておかなければならない。

2011年8月 「官僚の責任」 古賀茂明 PHP新書

「このままいけば日本人は皆、いまの中国人と同じレベルまで生活を切り下げるしかありませんね」この中国人経営者の言葉が示しているのは、なるべく無駄な労力を使わず、頭を使って効率的に利益を得なければ、日本が国際競争から取り残されるのは必至ということである。いくら高い技術力と勤勉な労働力があろうと、経営者に経営能力が欠けていれば宝の持ち腐れになるということである。

たとえば発送電を分離し、発電部門をいくつかの適当な規模に分割すれば、送電会社はどこの発電会社も差別せず送電することになるわけだから、政府は再生可能エネルギー発電

を行う発電会社を支援すればいいし、送電会社には、「天候によって上下する発電量に対応するシステムを作れ」と義務付けることもできる。それができなかったのは、東電をはじめとする電力会社の力が、実質的に政府や経産省よりも大きかったことが原因なのだ。

2011年8月 「ほんとうは強い日本」 田母神俊雄 PHP新書

民家が倒壊して下敷きになった女性が救出される際、救助隊員に「迷惑をかけた」と謝罪し、さらに他の被災者を気遣ったこと。自動販売機の所有者が、被災者のために飲料を無償で提供した話。空腹にもかかわらず、食糧配給の列に並び、割り込む人もいないことなどを挙げ、そうした行動を「滅多に遭遇することがない英雄的行為と評している。「ほんとうに強い国だけが、こうした対応ができる」と感動とともに称賛したのは、ベトナムのメディアである。誰もパニックに陥らず、自分の仕事に集中している日本人の姿を見て「われわれが学ぶべき多くのことがわかった」と、インターネット新聞に投稿した女性がいる。

自然放射線量の世界平均は年間2.4ミリシーベルトとされている。

2011年07月 「不惑のフェミニズム」 上野千鶴子 岩波書店

「明日の革命」のために今日を耐えるのを、禁欲のヒロイズムという。禁欲のヒロイズムはカッコよさで人を——特に男を——酔わせる。「戦時」の運動は、そういう男たちのヒロイズムが支えた。そういうヒロイズムにだまされた男たちのこっけいさや末路をわたしたちはずいぶん見てきたし、ヒロイズムに酔った男たちにたくさん迷惑もかけられてきた。男たちは、権力的な意味で「政治的」な態度を骨の髄まで身につけている。男が現われるとそのとたん、リーダーシップをめぐってにわたりのつつきあいのような順位争いが始まる。どんなちっぽけな集団や座にもその権力ゲームがあって、傍から見ているとこっけいだが、本人たちは真剣だ。逆に言うと、権力ゲームの圏外に置かれた女たちだけが、男のこっけいさを晒うことができる。

男たちは、世界の半分がやっていることを知らない。世界の半分が何を考え、何をのぞみ、何をしようとしているかに男たちが注意を払わない間に、大きな地殻変動が起きている。女は恐ろしく力強くなった。もう黙らせることは誰にもできないだろう。

「男は生産、女は消費」の近代型性分業のもとで、消費の決定権はとっくの昔に女性に握られている。女を動かさなければモノは売れないのだ。

いったい男たちが「子連れ出勤」せずにすんでいるのは、だれのおかげであろうか。男たちも「働く父親」である。子連れ出勤する女性が甘えているのではなく、女に子育てを全面的に押し付けている男たちこそ一番甘えているのだ。

「男もフェミニズムになれるか」という問いを聞くたびに、わたしは、大きなお世話だよ、あんたたちには、女性解放に手を出す前に、自己開放という大仕事が目前にあるだろう、せっせとメンズ・リブでもおやんなさい、と答えてきた。

戦争は組織された男性の暴力であり、その行使が国家によって正当化された暴力である。国家

は暴力を組織し、その行使に正当性を与えることによって「男性性」を定義する。戦争は、暴力による「男性性」の定義が行われる「聖域」、そのことによって男と女が、そして「英雄」と「臆病者」とが区別される究極の「男らしさ」の牙城である。そしてその攻撃的な「男性性」の証明のために、女性はたんに非戦闘員として殺されるだけでなく、性的な侵略の対象となる。

男は変わらない、変わったのは女性のほうなのだ。もっと正確に言えば「経験の再定義」の効果によって、女性の側の受忍限度が低下したのである。「かつてなら問題のなかった行為」は、「問題がなかった」わけではない。誰も「問題にする人々がいなかった」だけである。セクハラが増加とは何よりもセクハラの問題化の増加である。女はもはやそれをがまんしない。セクハラ問題の背後にあるのは、何よりも大きいこの女性の変化である。

困ったオヤジの言動に、なんだかもやもやと「ムカツクー」と思っていた女性が、その事態に「セクハラ」という名前を与えることができるようになった。

これまで夫婦仲というものは「わたしさえ我慢すれば」という妻の側のあきらめと我慢とで、「波風も立たず」もってきた。

男と女というたった二つの違いでなくて、もっとさまざまな違いがあつていい。問題は、その違いがどちらかに有利もしくは不利に働かない社会制度を作る。多様性が共存する制度。女たちは、これまでたっぷり男という鏡に映った自己像を眺め続けてきた。それが歪んだ鏡だったので、自分たちの本来の姿がわからなくなるほどに。女たちは、今ようやく自分で鏡をつくらうとしている。女という鏡に映った自分を見て、男たちは、驚くだろうか。

わたしたちがのぞむのは「男の権力」に代わる「女の権力」をうちたてるのではなく、女も含めて、無権利状態におかれたすべての人々が、ひとしく人間として尊重されるような社会だ。

おんながつながるのは、つながることが必要だから。おんなが弱者だからだ。わたしたちはフェミニズムがついに要らなくなる社会をめざしたが、それはとうぶんやってきそうにもない。フェミニズムがいなくなる社会とはおんながおとこなみに強者になる社会ではない。なんどでも繰り返すが、「弱者が弱者のままで尊重される社会」のことだ。

2011年07月 「オバサンはなぜ嫌われるか」 田中ひかる 集英社新書

オバサンの活躍の場：家政婦、土木作業員、清掃員。オバサンは性を感じさせないため、トイレや浴場の清掃員に向いている。オバサンたちが望むと望まないに関わらず、こうした職種に集中しているのは、中高年の女性の就職が厳しいから。

二度と若くなれない以上、中身で勝負するしかない。女にとって充実した人生とは、その季節季節を思い残すことなく生きることだ。

未婚であれ既婚であれ、男がどう見るか、男にどう思われるかということを考えるから、若さを失うのが怖い。それがたとえパート先の店長であれ、引越し業者であれだ。男の目を判断基準にしなければ、女は年齢に関係なくもっと伸び伸びと、もっと大らかに生きていける。

だが男の目を意識しなくなることは、「女を捨てること」だとされる。女性誌で女性著名人がしょっちゅうコメントしているのではないか。「いくつになっても女を捨てないことです」これもしょせんありきたりなコメントだ。しかし、「女を捨てない」のは、女たちの憧れの生き方でもある。いうなれば、女性著名人はツボを心得たコメントをしていることになる。だが結果として、女たちが発するコメントに、女たちが縛られる。なんと皮肉なことだろう。高齢女性に対して「お荷物感」が募り、QOL悪化の下降スパイラルが起き、「ばあさんヘイティング」を招く。

老人会でPPK（ピンピンコロリ）体操を全員でやるところもある。少しでも社会のお荷物になりそうなもの、規格はずれの異物を排除しようというこの「人間の品質管理」の思想がファシズムでなくてなんだ。

女性は結婚、出産を経て専業主婦になると「女性らしさ」から得られるメリットが減少し、一方で「女性らしさ」を維持するコストは増大する。コストがメリットを上回ったと感じて「女性らしさ」を放棄した女性がオバサンになり、オバサンは「女性らしさ」を放棄しているから、図図しくて恥じらいがない。自分が女であることを忘れ去ってしまって久しい。図図しく生きることに慣れ、それに違和感を持たず、恥じるどころか心地よさを見出してしまっている。

オバサンの典型として挙げた「電車の隙間に座るオバサン」や「男性用トイレに入るオバサン」は、その後に起こるかもしれない面倒なコミュニケーションを引き受ける覚悟でそうした行為に出ているのだと思う。見知らぬ他人との面倒なコミュニケーションを厭わないということは、むしろ社会性に富んでいるのではないだろうか。

女性が社会関係を取り結ぶ技能を身につけられたのは、「企業に男性ほど束縛されないから」というよりは、「職場の人間関係」を頼りに生き抜くことができず、置かれた環境で新たな人間関係を構築せざるを得ない場合が多かったからではないか。

ひとたび「男」に生まれると、物心つく頃から「男らしくしろ」「男は泣くな」「弱音を吐くな」と、理由もわからないまま押し付けられる。運動が苦手な場合、女子は「かわいい」で済まされても、男子は馬鹿にされることが少なくない。成績が悪い場合は、女子よりも男子のほうが、親から強いプレッシャーを受ける傾向がある。女子は病弱でも「はかなさ」が美点として映ることもあるが、男子の場合は欠点としか見なされないことが多い。

加齢とは、肉体的な老化を経験しながら、死へ向かうということであり、男女問わず、マイナスイメージを抱きやすい。しかし、女性側に圧倒的に偏っている加齢のマイナスイメージから、女性たち自身が脱却することはそれほど難しくない。まずは年齢を隠さないことである。人は生きていく限り、年をとることに抗えない。年をとることが憂鬱な社会は幸せな社会とはいえない。

老いて動作が緩慢になることは当たり前であり、誰もがいずれは通る道なのだ。高齢者や障害者を排除しながら、スピードや合理性を追求することを「サービス」と呼んで正当化したり、役に立つ立たないで人の存在価値を問うたりする風潮に懸念を感じる。

2011年06月 「日本をもう一度やりなおしませんか」 榊原英資  
日経プレミアシリーズ

財務省、経産省、あるいは文科省などの官僚はそれぞれその分野の専門家です。局長にでもなれば、その道30年、35年というベテランです。専門性については政治家が役人にとって代われるわけではありません。

教師を特殊な職業として免許制で囲う込む必要はまったくない。免許制のため多くの教師は大学卒業から退職するまでその職にあり、職業のモビリティは他の分野に比べて著しく低くなっています。

日本人が森との共生を選択することができた大きな理由の一つは蛋白源を魚介類からとることができたからです。日本近海に生息する海洋生物は、確認できただけで33,629種ののぼり、全世界23万種の14.6%に当たります。うち1,872種が日本の固有種で、日本は世界で最も多様な海洋生物の宝庫とされているのです。環境あるいは自然ということでは日本は世界で最も恵まれた国の一つである。

ヨーロッパの勃興は、主として長い16世紀からの近世、近代のこと。日本は、さらに長い千数百年の間、恵まれた地理的条件と、自然環境のもとで「ぬくぬく」とユニークな文明を築き上げてきた。

世界の流れは実は日本に向かっている。

2011年06月 「日本復興計画」 大前研一 文芸春秋

本当の日本人が試されるのはこれからだと思う。避難所や仮設住宅での暮らしにどっと疲れが出てきて、真に精神的なダメージを蒙るのはこれからだ。行方を案じていた人が海に流されていたと知ったときの落胆、これをどうやって克服していくかというのは、やはり阪神・淡路の比ではないことだろう。

電力警報システムの提案をしている。地震や津波と同じように、電力の余裕が10%を切ったときに、テレビや携帯電話で一斉に警報を出す。人々に不要な電力を一斉にカットするように「お願い」するのだ。そしていよいよ5%を切ったときには、テレビの放送を中止する。個人は最小経済単位だ。あるいは家族が最小の経済単位だ。政治家に頼ってはいけない。政府に頼ってもいけない。国がなんにもしてくれないことは、すでに明らかだ。自分自身だけが頼みの綱と覚悟を決める。そうしなければ、この日本も元気になりえず、復興もありえない。

2011年06月 「大人たちの失敗」 桜井よしこ PHP文庫

江戸時代の前の世界貿易の決済に使われた銀の3割から4割は日本が産出した銀です。つまり世界貿易の3割から4割を日本一国が占めていたということになるのです。

豊臣秀吉の号令一下、海を渡って朝鮮を攻めた軍勢は30万人とされています。いまの自

衛隊は、陸海空合わせて 23 万人くらいです。現在の人口が 1 億 2500 万人で、当時はまだ 3000 万人弱でした。しかも国内には 100 万人に上る軍勢が残ったといえます。16 世紀に号令一下、10 万単位の軍勢を動かすことができたのは、オスマントルコとアクバルのムガル帝国と日本だけでした。

鎖国の前も後も、どの時代においても、私たちはそれぞれの状況の中で、世界のトップ水準の国作りをしてきたのです。

女性がもっと女性らしく輝くために、男性がもっと男性らしく輝くために、お年寄りがもっともっと輝いて人生を全うすることができるように、子供がもっと子供らしくスクスクと伸びるように、そして私たちの国が国家としてもっと心配のないようなしっかりとした国家になることは必ずできるはずです。日本人の優しさと強さを失わず、日本人の他を思いやる心を失わず、物より心によって友人を作っていける国になれるように。どんなときにも誇りを失わず、大きな夢を実現させていく強い意志と覚悟をもった日本人であること。

そして子供たちに言い聞かせたいものです。大きな夢を描きなさい、勇気を持って大きな素晴らしい夢を描きなさいと。つまらない夢など描かないように勇気づけてあげましょう。なぜなら、夢は必ず実現するからです。夢を実現させる力を私たちが持っていることを、歴史の中から学んで、それを語り伝えていくことを忘れないようにしましょう。

2011 年 06 月 「自分の始末」 曾野綾子 扶桑者新書

「年子の姉妹がいたんだ。姉のほうに 10 歳、妹が 9 歳くらいだったかな。その子たちを見ていたら、姉のほうはいくらたかられても平気なんだ。しかし年下の妹は性懲りもなくたかる蠅を追っている。性格だね」「どっちが幸せなんです？」小木曾は神父を困らせようとしているような表情で楽しげに尋ねた。「それはどちらかという姉のほうだと思うね。しかし私は、9 歳になってもまだ、蠅にたかられることに馴れない妹のような子に、アフリカの希望を託してるんだ。彼女には、問題を感じる能力があるからね」

人生で人間は何度も病気にはかかるだろうが、死ぬのは一回だけなのだし、その一回さえ済めばそれ以上何回も死ななくていいわけだ。

血圧が低すぎるほかは体はどこも悪くなく、遊びとしてしたいことにも事欠かず、小説に書きたいと思うことも、多分一生分あり、その上日々この世が包含するすべてのもの、鮮やかな風景も、矛盾に満ちた人々の存在も、かつてなかったほど豊かに自分の周りであることを感じ、ほとんど「この世に恋をしている」と思うほどの瑞々しい感動に刻々溺れながら、それでも私は晩年を感じ、そのなかにはっきりと死を意識していた。

日本人がいちばんいけないのは、まったくの他力本願になったことかもしれません。食べられない人がいたら、政府が全部面倒を見ればいい、と。海外の多くの国では、個人が助けています。親戚とか友達とかが。嫌々な人もいるでしょうけど。皮肉なことに、社会保障が充実すればするほど、慈悲の心がなくなってしまうんですね。

私たちは自分が悪いことをしているつもりがなくても、人に苦しみを与えることがあるん

です。私がいるということだけで、それを嫌う人があっても不思議はないということを、私は信仰から納得できたんです。

男は自分に自信を持ったら、もはやそれをしじゅう試そうとは思わない。自分に対する評価の一番おそろしいものは、他人の評判ではなくて、むしろ自分の自覚である。

その行為が、殺人、放火、窃盗、詐欺になるようなことでなければ、そしてまた家庭がある人だったら家族が裏切られたと感じたり、ひどく嫌ったり、家庭の経済の基本を根底から揺るがすようなことでないなら、世間や他者が陰でどんなことを言おうと、したいことをさせてもらって生涯を全うしなければならないのである。

私は裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。もちろん持って行けと言われても、私たちは死んだ後、何一つ持っていくことは出来ないのだが、自分の死までに自分が人生の途中で集め、楽しみもしたものを、すべて始末していくのがすがすがしい。

何もかもきれいに跡形もなく消えるのが、死者のこの世に対する最高の折り目正しさだと私は思っている。亡き人の思いでは、その子や孫が自然に覚えている範囲だけでいい。その人がこの世に存在したことを、銅像を建てたり記念館を建てて残そうとするのは、私の好みではない。犯罪を犯して記憶されるよりは、悪いこともせずに済んで、誰からも深く恨まれることなくこの世を去っていけるだけで、この上ない成功である。晩年の義務は、後に、その人の記憶さえ押し付けがましくはのこさないことだと私は考えている。

多くの日本の親は、子供をずーっと大人にしないでしょ。「受験だからなにもしなくていいよ」とか言って、家のことは何もさせない。家庭内暴力を振るう子供のほとんどは、家で甘やかされ、親から用事を言いつけられることもなく、まるでお客さん扱いで、家族とともに生きているという実感や責任感を自覚したことがないのだと思う。

## 2011年6月 「競争の作法」 斉藤誠 ちくま新書

豊かな社会のもうひとつ厄介なところは、幸せの手触り感が希薄なことである。目標や目的をしっかりと持ち、主体的に生きていかなければ、幸せなど味わうことができないであろう。豊かな社会で漫然と生きていると、幸せな瞬間をつかみとるきっかけがないままに過ごしかねない。

問題は「今ある豊かさ」をしっかりと守りつつ、そこから幸福をつかみとっていくのが、無理を重ねて「より豊かになる」よりもはるかに難しいことを理解しなければならない。

国民経済計算では、物を大切に長く使うことから得られる豊かさや幸福は、まったく取り扱われていない。

1990年代初頭に資産価格バブルが崩壊した後、日本経済が「失われた10年」にあえぎ続け、2000年代初頭も依然として不況の中にあっただまにそのときに、海外の高級ブランドが、お買い得となった銀座に進出してきたのだった。なんのことはない。銀座、表参道、青山が、海外勢によって安値で買い叩かれただけであった。海外勢が日本の資産を安値で買い叩いたことが景気回復のきっかけともなった。後にみていくように、そうしてはじまった景

気回復は、今度は日本勢が海外に安値で叩き売りしつづけたことによって、「戦後最長」となったのである。

「戦後最長の景気回復」期間は、歴史的な円安期にあったといえる。「目に見える円安」と「目に見えない円安」の順風を受けて、製造業が輸出を伸ばしたのも当然であったし、輸出企業の業績が空前の水準となったのも当たり前であった。しかし、こうした二つの「円安」に後押しされた輸出主導の景気回復は、日本経済を豊かにしたわけではなかった。先にも述べたように、安値で海外へ売り、高値で海外から買っている結果、輸出で稼いだ豊かさも、海外に逃げて行ってしまった。

輸出企業は二つの「円安」という神風の恩恵を最大限受けて、未熟な工員がいい加減に作った製品でも、十分に高い競争力を保つことができた。こうして企業側では労働コストを節約しながら輸出拡大に対応でき、労働側では空前の企業業績にもかかわらず労働所得がふるわなかった。輸出で荒稼ぎした収益のほとんどは、生産増強のために設備投資に投じられ、株主に還元されることはなかった。二つの円安は、交易損失という形で日本経済から購買力を奪ってしまった。

「戦後最長の景気回復」期には、世界的な物価動向に比べて、日本の物価が低下した。すなわち、「目に見えない円安」が起きた。

一人一人が真正面から競争と向き合っていくこと。株主や地主など、持てるものが当然の責任を果たしていくこと。非効率的な生産現場に塩漬けされていた労働や資本を解き放ち、人々の豊かな幸福に結びつく活動に充てること。

競争の行きついた先が悲惨な場所であるという議論にはどうしても与することができない。逆に、一人一人が真摯に競争に向き合うときこそ、真に人間性が培われ、豊かな幸福を実感できる社会に近づけるのではないか。

2011年06月 「日本人の誇り」 藤原正彦 文春新書

江戸時代から明治中期にかけて、恐らく歴史上日本以外の世界のどこにも存在しなかった、貧しいながら平等で幸せで美しい国を建設していた。

そもそも国家が謝罪するなどということは、私の知る限り日本だけです。主権国家というのは、戦争して降伏し賠償金を払っても、謝罪という心情表明はしないものです。それは自国の立場を弱くし、自国への誇りを傷つけるからです。そしてなにより、もはや弁護できない私たちの父祖を否定し冒瀆することになるからです。

第二次世界大戦やそれ以前の歴史を外交に持ち出す国は私の知る限り中国、韓国、北朝鮮以外、世界中にどこにもありません。

子供の学ぶ歴史教科書に於いて、歴史的客観性より「事を荒立てない」を優先するというのは滑稽。

西暦500年から1500年までの10世紀間に日本一国で生まれた文学作品がその間全ヨーロッパで生まれた文学作品を質および量で圧倒している。日本は万葉集、古今和歌集、新古今

和歌集、源氏物語、平家物語、方丈記、徒然草、太平記。。と際限なく文学を生み続けました。しかも万葉集などは一部エリートのもではなく、防人など庶民の歌も多く含まれています。

1999 年末、アメリカの AP 通信社は、世界の報道機関 71 社にアンケートを求め、20 世紀の 10 大ニュースを選びました。その第一位になったのが広島・長崎への原爆投下でした。これだけの非人道的行為を、息も絶え絶えの日本に行ったのです。

日本の軍人達は、戦場で涙ながらに老いた父母を思い、自分の死後に遺される新妻や赤子の幸せを祈り、恋人からの手紙を胸に秘め、学問への断ち難い情熱を断ち、祖国に平和の訪れることを願いつつ祖国防衛のために雄雄しく戦いました。それがいま、地獄さながらの戦場で散華した者は犬死と嘲られ、かろうじて生き残った者は人殺しのごとく難詰されるという、理解を絶する国となってしまったのです。祖国のために命を捧げた人に対し感謝の念をこめて手を合わせて拝むべきものであるのに、戦争の罪を一身に背負わせているのです。このような状態で日本人としての誇りが生まれようもありません。

B29 爆撃機 325 機による 1945 年 3 月 10 日の東京大空襲では、下町を中心に一夜で 10 万人以上が死亡しました。一夜としては史上最大の虐殺です。

原爆で一般老若男女 55 万人の生命が奪われました。日本はサンフランシスコ講和条約でこの米軍による国際法違反に対する補償請求権を放棄しましたが、その後原爆投下に対しては「あやまちを二度と繰り返しません」となぜか自らのあやまちのようにいい、日本焦土作戦を指導したカーティス・ルメイ司令官には日本政府が勲一等を与えました。自虐国家日本は絶好調なのです。

1945 年 8 月 9 日にソ連が日ソ中立条約を破り、174 万の兵力、5000 台の戦車、5000 機の航空機をもって満州に侵入。日本の降伏後にソ連が 60 万以上の邦人をシベリアへ送り強制労働させた。ロシア兵の強姦、暴行、虐殺により民間死亡者は 17 万人にも上りました。欧米人が自由とか個人をもっとも大事なものと考えののに対し、日本人は秩序とか和の精神を上位におく。

日本人が平等を望むのは、自分ひとりだけがいかに裕福になろうと、周囲の皆が貧しかったら決して幸せを感じる事ができないからです。人々の心の底流には仏教の慈悲、武士道精神の惻隠などが息づいているのです。日本は、帝国主義、共産主義、そして新自由主義と、民族の特性にまったくなじまないイデオロギーに、明治開国以来、翻弄され続けてきた。日本人にとって、金とか地位とか名声より、家や近隣や仲間などとのつながりこそが、精神の安定をもたらすものであり幸福の源だった。

個より公、金より徳、競争より和、主張するより察する、惻隠や「もののあはれ」などを美しいと感ずる我が文明は、「貧しくともみな幸せそう」という、古今未曾有の社会を作った文明なのです。戦後になってさえ、「国民総中流」というどの国も達成できなかった夢のような社会を実現させた文明です。

日本人特有のこの美感は普遍的価値として今後必ずや論理、合理、理性を補完し、混迷の世

界を救うものになるでしょう。日本人は誇りと自信をもって、これを取り戻すことです。これさえあればわが国の直面するほとんどの困難が自然にほぐれて行きます。さらに願わくば、この普遍的価値の可能性を繰り返し世界に発信し訴えて行く事です。

2011年06月 「先送りできない日本」 池上彰 角川 one テーマ 21

震災直後、世界のメディアは、非常に強い関心を持って見つめていました。日本人はとても我慢強く冷静で、略奪が起きないどころか、被災者が整然と行列を作り、支援物質を譲り合っている姿に驚き、賞賛を日本に送りました。私たち日本人にとってみれば、それは当たり前前のことです。大きな事故や災害の後、海外で暴動が起きるのを見て、私たちはいつも驚いていたのですから。そのような私たちの精神は、世界でも稀な特質かもしれません。その特質こそが、日本を先進国へと成長させてきた原動力ではないでしょうか。そのことを私たちがもっと客観的に認識し、自覚して、自信と誇りを持ちたいものです。

中国産のレアアースの安さの理由は簡単です。付随して出てくる放射性物質を放置しているからです。環境汚染をそのままにしているのです。

世界は中国でたっぷり儲けてきた。

国民が税金を出し合ってお互いを守りあい、あるいは税金以外の面で助け合い、国が弱者をしっかりと守る日本であるためには、まず一人一人が荷車を支えて牛を追い立てるしかありません。いまの私たちそれができなければ、この先の日本人には、より一層の負担をかけるだけです。

被災地では多くの住民が助け合っています。全国各地ボランティアが駆けつけています。国や行政の助けを待たずに、自分たちで出来ることに取り組んでいるのです。お上に頼らない、これこそが、日本の未来を切り開くのだと痛感しています。

2011年06月 「日米同盟 VS 中国・北朝鮮」 アーミテージ 文春文庫

仮に世界第三位の経済になったとしても、日本が米国に与えてくれるものは王冠のように輝いています。そして、その王冠には沢山の小さな宝石、ダイヤモンドが散りばめられている。経済力、対外経済支援、60年以上にも及ぶ民主主義制度、そして各種国際機関への多大な資金的貢献など。朝鮮半島と中国を除いて、日本はその国民性ゆえに世界で最も尊敬されてもいます。

日本が在日米軍基地施設を提供しているという事実です。それが日本の安全保障を担保してくれています。そして、そのことはアジア地域で米国の安全保障を担保してくれています。そして、そのことはアジアの全ての国が理解しています。

2011年06月 「日本はなぜ世界でいちばん人気があるのか」 竹田恒泰 PHP 新書

「いただきます」とは「あなたの命を頂きます」という意味であり、食材そのものに対する感謝の気持ちを表す言葉である。

そもそも「いただきます」は先述のとおり食物そのものに対する感謝の言葉であって、店や料理人への感謝言葉ではない。原始民族で国王、国家、言語を持ち、1億人以上の人口を擁しているのは世界で日本だけであり、日本は現存する唯一の古代国家なのである。

私は日本語こそ最高の輸出品だと思う。これを実現するには、日本語を母国語とする現代日本人が、美しく適切な日本語の話し手となり、原始日本から継承されてきた和の心を理解して実践する必要がある。これまで人類の歴史は「自然を征服する歴史」だったが、これからは日本人が受け継いできた「自然と調和する歴史」を歩みはじめなければならない。そのためには、日本語が持つ和の心を人類が共有するのがいちばんの近道ではなかろうか。日本語は世界を救うと私は本気で信じている。

2011年06月 「復興の精神」 著者多数 新潮新書

茂木健一郎

日本は今、自らの真価を問われている。地震によっていったんはリセットされた日本のマインドセットが、時間が経つにつれて結局は元通り、というのでは、何にもならない。今回の震災で、日本人は必ずしもルール、コンプライアンスを神経症的に守り、追求するだけではないということが明らかになった。私たちの「生きる本能」がよみがえった。そこで大切なのは、枝葉末節にこだわる学級委員的マインドセットではなく、生きるために必要な本質を見抜く、プリンシプルである。今回の震災が、私たちが変わるきっかけにならないとしたら、他の何がきっかけになるというのだろう。変わることを恐れてはいけない。つながることをためらってはいけない。開くことを避けてはいけない。日本人は必ず不死鳥のようによみがえる。復興の精神は、日本人の変化への希望の中にこそ見出されるものだ。

大井玄

大災害は数十年ごとに起こり、日本人はそのたびごとに復興してきた。大震災は、ボランティアをする若者たちに、生きがい、生きる意味を教えているように見える。

閉鎖系倫理意識とは、狭く、資源の乏しく、外に移住できない地域で、人口が多くても環境を崩壊させずに、平和に、永続して生存することを余儀なくされた時に育まれる倫理意識である。その深層心理特性は、自己卑下的視点と他者とのつながりを求める傾向として現われる。つまり協調的だ。また生きるためには勤勉でなければならない。日本人は世界歴史において典型的に閉鎖系倫理意識を発達させた民族である。

私にとっての驚きは、この国が復興することを一瞬たりとも疑わなかったことだ。日本はプロメテウスだ。そして最大の意義は、私がこの国に生まれたことを誇りに思い、同胞である日本人に強い愛情を抱いていることを再発見したことである。

瀬戸内寂聴

被災者の皆様のご苦勞と悲痛なご体験を思うたび、いたたまれない。すでに避難所での暮らしのストレスも頂点に達しているでしょう。どうか緊張と不安を少しでもいたわり、控えめでつつましい忍耐強い日ごろの美德を解放して、わがままになってください。あなたたちの

犠牲の上に、難を逃れた私たちは日夜、夢の中までも、命の恩人のあなたたちのご苦勞を分け持たせてほしいと、切に願ひ続けているのです。

阿川弘之

原発での危険な作業を 70 歳から 80 歳の老人にボランティアとしてやらせたらどうか。言い方は悪いが、今すぐ死んでも非常に惜しいという歳でもないし、10 年後 20 年後に放射能の悪い影響が出てくるとしても、この年齢なら無視できるけど、将来のある青年層や壮年層にそれをやらせるのは気の毒だ。

2011 年 06 月 「日経：一目均衡」

原発の時間軸の長さ和不透明な要素が多い費用は、会計が対応できる想定範囲を超えている。それを目先の費用で民間企業が推進できたのは、国の全面的なバックアップという後ろ盾があればこそだろう。

原発を巡る国民的議論の一つは原発の総費用をできる限り正確に把握することである。原発停止に伴う代替燃料の上昇費用。廃炉や使用済み核燃料の処理・処分費用。さらに数十年はかかるといふ事故処理、損害賠償費用。立地に伴う“迷惑料”や核燃料サイクルに投じられた費用などの問題もある。

「原発ただ乗り」のツケは後払いの純粹費用であり、誰が直接的に負担するにしても、最終的には国民が負担する費用である。

2011 年 05 月 「震災についての新聞記事より」

今回の災害は国のかたちを大きく変える規模のものであった。復興とは災害前の状態に復帰することではない。新たな形でより強い日本を創造することである。

今回の災害からの再建、復興が合理的なビジョンに支えられるなら、政府、企業が債券を発行し、復興に充てることほど確実な投資はない。

今回の不幸な大災害は、日本人が誇りと自信を取り戻すきっかけともなっている。冷静に対処し、秩序を守り、必死に他人を救おうと努力する日本人の姿が世界に与えた驚きと感銘、日本に向けられて支援こそ、「技術大国」イメージよりもはるかに日本の強さをアピールした。

わが国の新しい進路について、核となるキーワードは、安全、安心、思いやり。さらに敷衍していえば、信頼、尊敬、誇り、感動。心に関わる言葉が中心だ。

想像を絶する過酷な環境の下でも、他者を思いやり秩序だった行動をとる人々に世界は賞賛を惜しまない。日本人の美德をただの忍従でなく、支えあい、分かち合う、強い公共心に昇華させ、成熟した社会システム構築への第一歩を踏み出せるかどうか。価値観の大転換を伴う、単なる復旧でない被災地の復興は、日本のみならず、世界人類の道標にもなる。

2011 年 05 月 「文芸春秋 2011 年 5 月号 われわれは何をなすべきか」

山内昌之（東大教授）

すべての出来事は、君が生まれつきこれに耐えられるように起こるか、もしくは生まれつき耐えられないように起こるか、そのいずれかである。

斉藤孝（教育学者）

日本というチームの一員であるという自覚が育ちつつある。被災した方々の底知れない悲しみに胸をつかれ、原発の危機に立ち向かう人々の勇気に心が奮い立った。自己中心的な態度から、他を慮り、つながりを感じる行動のあり方への流れが今ある。

水谷研治（東京福祉大学教授）

終戦の時に比べれば、はるかに高い水準からの再出発である。満々たる自信を持って将来の発展に邁進すべきである。

佐伯啓思（京大教授）

「天」や「神」という観念を持ち出すことで、人は畏怖すべきものの前にこうべをたれるほかない、という昔の人々が当然視していた観念を我々は少しは取り戻す必要があるということであろう。そして、畏怖すべきものの前にこうべをたれつつ、途方もない災難に敢然と立ち向かうところに人間というものの自尊がうまれるのであろう。

2011年02月 「異形の大国中国」 桜井よしこ 新潮文庫

譲ることはこの国では感謝もされない。日本は理性と国益に基づいて自らの主張を毅然として主張するしかない。

1950年から今日までに、総人口600万人のチベットで120万人が虐殺されたと、チベットの人々は訴える。

全ての日本人が歴史を守り、中国の歴史捏造に論拠を示しながら揺るがずに反論していかなければならぬ。

1958年5月から始まった毛沢東の大躍進政策。工業で30%、農業で15%の増産を目標として、非科学的な生産活動を展開させ、全土で2000万人から4000万人の餓死者を出した。

1966年から10年間にわたって吹き荒れた文革の嵐は、一説には2000万人の犠牲を出したと言われるが、それも定かではない。

台湾を押さえれば、沿海州から日本列島、フィリピンにつながる第一劣等線が支配され、日本のシーレーンは脅かされます。朝鮮半島は自動的に中国の掌中に落ち、日本は事実上中国に併合された形になります。安全保障の土台は血を流すことから始まる。戦争覚悟でなければ、国益は守れない。逃げて戦争は避けられない。いわんや、国益は守れない。だからこそ立ち向かうのだ。

米国は問い続けている。どの国も中国に脅威を与えていないのに、なぜ、中国は軍事費を増大し続けるのか。なぜ大規模な武器輸出を続けるのか、なぜ800基を超えるミサイルを台湾に向けて配備し、しかもその数を毎年ふやしているのかと。日本も同様に問うべきである。そのうえで、日中平和を最大限重視すると強調しつつ、静かに尖閣列島に自衛隊を上陸させ

なのだ。中国の抗議には、日本の国内問題であるから介入不要と涼しい顔で答えればよい。そして笑顔で、共に東シナ海を平和の海にしていこうと協力を呼びかけるのだ。日本の国益と独立を守るのは日本国でしかないと自覚して、対中安全保障政策で毅然と対処しようとする米国と協調し、中国に、日本の真の独立心を見せなければならない。それが結果として対中戦争を避ける道である。

眼前の小利益を追い求める余り、歴史問題で不当な妥協を重ねることは墓穴を掘ることにつながる。親中派政策の行き着く先こそ、この墓穴である。中国の思惑も見破ることなく、墓穴を掘る人々に問いたい。そんな有様で何が日本を代表する財界人か、何が首相候補かと。黙っていれば嵐は過ぎ去ると考えるのは間違いだ。いま日本が直面しているのは単なる日米二国間の問題ではない。国際社会に張り巡らされた反日情報の罠である。安倍首相は対策本部を設け、挫けず、誇り高く、事実を語り、世界を説得していく心構えを新たにしたい。

中国共産党は国民の不満解消に経済成長を必要とし、汚染産業を容認しなければならない。環境対策で経済成長が鈍れば失業者はますます増えて政権の崩壊につながります。環境保全か、共産党独裁政権の生き残りか。中国政府は迷わず後者を選びます。

かつて中国は生産の70%が軽工業だった。現在はセメント、鉄、化学など重工業中心で猛烈な成長を遂げつつある。WTOにも加盟した。世界の技術を取り入れ、フル稼働で経済成長を続け、それによって、中国共産党は求心力を保っている。中国共産党のための経済成長を優先する結果、環境対策はあとまわしだ。その彼らが発展途上国であるからとの理由で責任逃れの弁明をするのは許されない。これまで日本は環境分野で3.5兆円を超える有償無償の資金及び技術協力を行ってきた。にもかかわらず、日本の海も大気も中国の環境汚染の影響を受け、日本人は直接の被害を受けている。日本政府は日本人の健康と命を守るために中国に物を言わなければならならず、世界一の環境技術を有する日本には、その資格もある。中国は言論の自由を許さず、環境汚染によって人類を破滅させかねない犯罪的国家である。たとえ国際社会で一時的に孤立するようなことがあっても、日本が理性的である限り、そのことが日本の力を殺いだり、名誉を損じたり、ましてや日本を滅ぼすことにはなり得ない。理性を忘れ情緒に走り、孤立を恐れ、安易な妥協に逃げることこそが、日本国の滅びの始まりになる。

いま私たちがひたすら自問すべきことは、日本という国をどのような国にしたいのか、すべきなのか、そのために何を成すべきなのかという点である。中国が、さらには米国が、日本に突きつける諸問題に真正面から向き合い、同時に、異形の国の異形さを逆バネにして、我と我が身を鍛えることこそがいますべての日本人に求められている。

2011年02月 「人はひとりで死ぬ」 島田裕己 NHK出版新書

死自体よりも死に方が恐怖の対象となってきた。今の私たちが恐れるのは孤独な死である。おひとりさまは、死後もまた孤独なのである。それは動かしようのない現実になっている。

けれども、おひとりさまとして生き続けたということは、徹底して自由に生きたということでもある。家の束縛も、結婚による束縛もなく、自分をまっとうしたわけだ。それを孤独な人生と考えるのか、自由な人生と考えるのかは、人によって異なる。あえておひとりさまを貫いたのであれば、それは、自由を追求した結果にはかならない。

無縁死という結果だけを何とかしようとしても、そこには限界がある。それに、私たち自身が無縁になることを強く求めたという事実もある。私たちは、それまでの日本人が得られなかった自由を求めて、無縁となることを望んだ。有縁社会のしがらみから解き放たれるために、あえて無縁になる道を選択してきたのだ。その選択は、村社会から排除された結果だとも言えるわけで、たんに私たちが意図したものではなく、強いられた部分もある。

長く生きれば、何らかの形で社会にも十分貢献したことになる。そうした人に代わって追善をする必要は果たしてあるのだろうか。悔いのない大往生を迎えたのであれば、それ以上、いったい何を求めると言うのだろうか。大往生を遂げた人間の供養は必要ないといえ、言い過ぎと感じる人もいるかもしれない。だが、社会から十分な恩恵を被った上で亡くなるなら、死後にそれ以上のことを望むのは、あまりに贅沢すぎる。もし、浄土というものが存在し、死者が極楽往生するものであるなら、それで十分なはずだ。にもかかわらず、現在のシステムでは、遺骨が残るために、墓を設けなければならず、そこに供養や墓参りの必要が生まれる。死者は恵まれているかもしれないが、残された生者には過大な負担がかかる。

生者に生活の糧を残した者が先祖として祀られ、生者の追善供養を受ける。それこそが、日本人の信仰の核にある先祖供養の構造を形作ってきた。だからこそ、先祖は大切に葬られ、手厚い供養を受けてきた。しかし、故人がそれほどのものを残さないなら、先祖供養の対象になるには値しない。死者は、そうした事態を受け止めるしかない。果たして自分は子孫による供養に値する存在なのかどうか。それを考えれば、金をかけた葬式や立派な墓、そして、格の高い戒名を望むことはできないはずだ。

むしろ、無縁死や孤独死を遂げた人のほうが、はるかに迷惑でないのかもしれない。無縁死として葬られるならば、死ですべてが終わる。

2011年02月 「世界が絶賛するメイド・バイ・ジャパン」川口盛之助 ソフトバンク新書

競争することに意義を見出すというのは、悲しいオスの性のなせる業です。所詮我々オスなんて、その由来は、勝ち残ってなんぼの“精子”です。

資本力にものを言わせて、M&Aを繰り返し、スケールメリットの優劣を競うチキンレースが各分野で繰り返されています。

世界や人類の脅威に立ち向かう孤高のヒーロではなく、みんなで協力して、とりあえず目の前にある、身の回りの問題から解決してみようみたいな感じで徒然としています。

リーダー型のジャイアンのように、正義が力で勝ち取る世界ではなく、その場しのぎの積み重ねながら、その場の弱い者を救うことを優先するのがのび太の行動原理です。

大成功・立身出世の実績を背にして、堂々と自信を持って訴えることができる数少ない発信者になる説得力を我々は持っている。衣食足りた時にこそ、本来の品性が問われるのです。この物語性、すなわちモノに込めうる魂の部分こそが、今後の日本製品の魅力の根源であり、長年の間憧れてきたブランドそのものです。

「いじめられる側」である弱者の気持ちのわかる集団によるカスタムカーは世界共通のマイノリティー文化である。しかしこれまでの集団と決定的に違うのは不良の車でないという点です。世界初の「いじめられる側の産物」。これがもはや“マイノリティーではないかも感”がる。

日本ならではの愛着の出し方とは何か？ヒントはサブカル界のキーワード「カワイイ」や「のび太君らしさ」にあると思います。

科学工業製品は、省力や利便など、生活の効率改善を目指してまっしぐらに進歩してきました。モノが満ち溢れた今、世の中はエンターテインメントとアンチエイジングとスピリチュアルビジネスがキーワードな心の時代になっています。

勝利を目指さない雅な道具作りという方向性があってもよさそうです。勝者ができれば敗者が生まれます。「負けていいんだよ」というヘタレ系なのび太君の視線ですが、これからの日本の道具が実現すべき機能とは、弱者視線での商品規格かもしれません。

2011年02月 「デフレの正体」 藻谷浩介 角川 ONE テーマ 21

日本は中国（+香港）からだけでなく韓国、台湾からも07年08年と続けてそれぞれ3兆円前後の貿易黒字をいただいている。中・韓・台から稼いだ貿易黒字の合計は、00年に比べれば2倍以上に膨らんでいて、この2年間はアメリカからの黒字を上回っています。つまりアメリカに匹敵する輸出市場が、今世紀になって中・韓・台の経済的な台頭のおかげで出現したわけです。ちなみに先方の人口当たりに換算すれば、中国に比べて韓国は30倍、台湾は60倍、さらに豊かなシンガポールに至っては160倍の貿易黒字を日本にもたらしている計算です。

我々が目指すべきなのは、フランスやイタリアやスイスの製品、それも食品、繊維、皮革工芸品、家具という「軽工業」製品に「ブランド力」で勝つことなのです。今の不景気を克服してもう一回アジアが伸びてきたときに、今の日本人並みに豊かな階層が大量に出現してきたときに、彼らがフランス、イタリア、スイスの製品を買うのか、日本製品を買うのか、日本の置かれている国際競争はそういう競争なのです。フランス、イタリア、スイスの製品に勝てるクオリティとデザインとブランド力を獲得できるか、ここに日本経済の将来がかかっています。

バブル崩壊期の90年代前半には増えていた個人所得と小売販売額が、「戦後最長の好景気」となった時期、すなわち今世紀に入るあたりからみるみる落ち始めた。景気だの失業だのとは別の要因で、就業者の大きな増減が生じ、それが個人所得とモノ消費の増減をもたらした。子どもと高齢者を加えた総人口の減少よりも、現役世代に絞った生産年齢人口の減少の方

がよほど急であるというこの最近の現実は、ほとんどの人が想定していなかった大問題なのです。

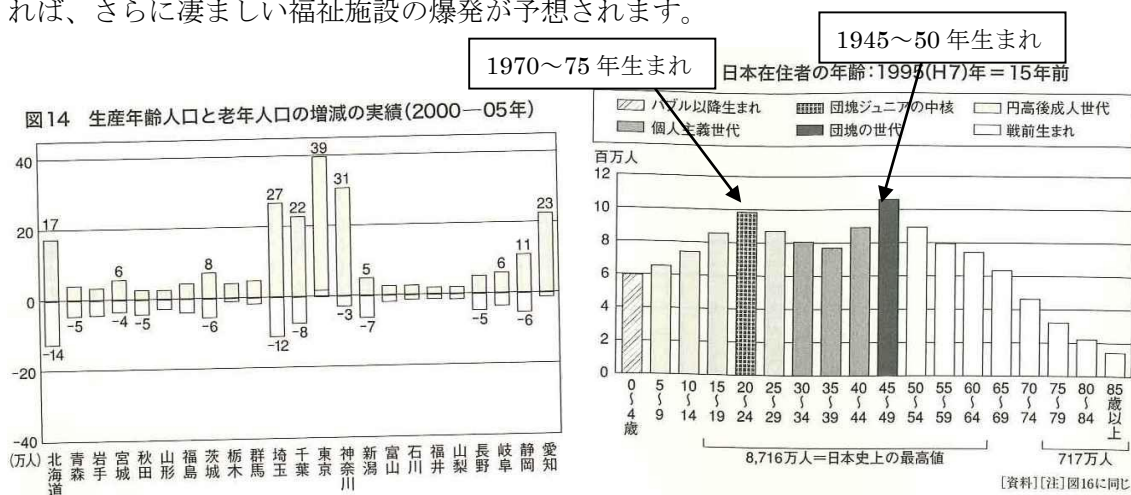
「少子高齢化」というのは、少子化＝子供の減少と、高齢化＝高齢者の激増という、全然独立の事象を一緒くたにしているとんでもない表現であり、「子供さえ増やせば高齢化は防げる」というまったくの誤解の元凶にもなってしまっています。

首都圏一都三県では、00-05年の5年間に65歳以上だけが118万人増えているんです。この間に全国で増えた65歳以上の方367万人の3人に1人は首都圏民だったのです。

首都圏で起きているのは、「現役世代の減少」と「高齢者の激増」の同時進行です。そこでは、企業に蓄えられた利益が人件費増加には向かわない。

首都圏や愛知県といった産業地域には、30年代後半生まれの方々が、高度成長期の前期に中卒の「金の卵」として大量に流れ込みました。だから00-05年の間に65歳を超えていった人が多い。若者を出す側だった地方よりも、受け入れる側だった首都圏の方が、より急速な高齢者の激増に直面しているわけです。

社人研の予測では15年に75歳以上の人は首都圏で63%、154万人増える。まだ団塊の世代が70代にも達していない時期にですよ。このうち1割が収容型の老人施設に入るとすると、定員を15万人以上も増やさなければいけない。施設数でいえば数千箇所は造らないといけません、これは首都圏の一つの市区町村当たり5-10個づつというようなレベルです。できるわけなければ計画も見ることがありません。3割が要介護となるとすると50万人弱。ヘルパーも何万人単位で増やさねばならない。団塊世代が75歳を超える25年ともなれば、さらに凄ましい福祉施設の爆発が予想されます。



首都圏においてすら、生産年齢人口はもう減り始めている。他方で日本中で高齢者が増加しているが、特に高度成長期に若者を集めた首都圏のような地域ほど増加のペースが急だ。その背景には、人数の多い終戦前後生まれの世代の加齢がある。

好景気の波で増えた就業者数よりも人口の波で増えた就労者数のほうがずっと大きい。終戦直後に四以上という異常な高さを示した出生率が、ニ少々という正常なレベルに落ち着いたその結果、団塊の世代の周辺だけが、戦後日本に特有の極端な「生産年齢人口の波」

として残ってしまいました。「出生率の低下」というのは、少子化が起きる二つの原因の一つにすぎません。もう一つの原因が親の数の減少、正確には出産適齢期の女性の数の減少です。

住宅市場、土地市場の活況は、最初は団塊世代の実需に基づくものであってバブルではありませんでした。ところが日本人のほとんどが住宅市場の活況の要因を「人口の波」ではなく「景気の波」であると勘違いしたために、住宅供給を適当なところで打ち止めにする事ができず、結果として過剰供給＝バブルが発生してしまいました。その先には値崩れ＝バブル崩壊が待っていたわけです。

団塊世代の住宅購入は、彼らが40歳を超え終わった90年くらいまでには一段落してしまい、景気も90年3月あたりをピークに下降に転じます。50年代前半生まれが、団塊世代の作ったトレンドが続くと勘違いしてさらなる遠郊外に今から考えると法外な価格で住宅を買うという流れが続いた。

団塊世代が75歳を超える25年には、75歳以上の人口が今の5割増しくらい水準まで達してようやく横ばい傾向になりますが、それでも生産年齢人口の減少は止まりません。団塊ジュニアまでもが75歳以上に達する50年、40年後には、75歳以上人口は再び史上最高を更新、他方で生産年齢人口は現在の6割程度までに減っています。

生産年齢人口が減少を続けますので、国内の雇用の大部分を占める内需型産業は恒常的に供給過剰状態となり、業績は回復しません。そのために若者は低賃金状態に置かれ続け、失業状態を挟みながら転職を繰り返しますので、失業率も高止まりします。

戦後の日本では、団塊世代と団塊ジュニアのおかげで、著しい生産年齢人口増加の波が押し寄せてきていました。そのため、生産年齢人口の頭数に連動して売れるような商品、たとえば普通の車だの住宅だの電気製品だのの需要が非常に高まり、それらを供給する生産力が、本来定常的に考えて必要な量以上に発達してしまったのです。それがGDPを本来の日本の実力以上のペースで押し上げてきました。それゆえに、生産年齢人口減少のステージになってみれば、本来の実力に見合ったところまで生産力もGDPも落ちていかざるを得ない。生産年齢人口＝旺盛に消費する人口の頭打ちが、多くの商品の供給過剰を生み、価格競争を激化させて、売上げを停滞ないし減少させてきた。

企業には消費性向の低い中高年が貯蓄として私蔵していくことになる部分を優先的に守り、もともとお金のかかっていない現場の若者の雇用の部分だけさらに搾り上げるという構造がある。

団塊世代の加齢という一大課題の解決にまったく関係のない出生率ばかりがなぜ取り沙汰されるかといえば、物言わぬ若い女性に責任転嫁できて、男性、特に声の大きい高齢男性は傍観者気分になれるからではないでしょうか。そういう男ばかりだからさらに結婚しない女性が増えてしまっているのかもしれないよ。

日本経済を蝕む生産年齢人口減少に伴う内需の縮小に対する三つの処方箋：

一 高齢富裕層から若い世代への所得移転の促進、

－女性就労の促進と女性経営者の増加

－訪日外国人観光客・短期定住者の増加

2008年時点で不動産は含まない金融資産を1億円以上持っていた個人が世界中に950万人いる。そのうち150万人は日本人。日本には高齢富裕層が1400兆円もの資産を死蔵させている。高齢富裕層個人から若い個人への自発的な所得移転が必要。年功序列賃金を弱め、若者の処遇を改善する。

そもそも内需拡大は地球環境問題よりもはるかに重要な足元の問題です。世界的な海面上昇への対処という問題なら、米国や中国に明らかにより多くやるべきことがある。なのに、そういう地球環境問題にはあれほどの関心と対処への賛意を見せる日本人がどうして若い世代の所得の増大に関心が持てないのか。世界的な需要不足が今の地球経済の大きな問題であるわけですが、こちらはどうみても購買力旺盛な米国や中国のせいではなくて、内需の飽和している日本により大きな責任があると世界は思っています。

日本人の相続の平均年齢はもう年金需給年齢に入った67歳である。

年金から生別共済へ切り替えれば、同じ生れ年の人同士で助け合えば、その年代は全員がハッピーに最低限の生活水準・医療福祉水準を享受することができる。

2010年12月 「国家の命運」 藪中三十二 新潮新書

戦闘行為そのものではなく、平和構築という分野において自衛隊や警察が活躍できる場所が多くある。この平和構築の分野では現行憲法の下でも、もっと人的貢献ができることがあるはずだ。日本は「日本としてやれることをやる」道を目指すべきであり、中核は民生支援であり、これに加え、平和構築活動を強化することが妥当な方途だと考えている。

日本はアフガンの地で500の学校を建て、1万人の教師を養成し、30万人の生徒に教育を与えてきた。650kmに及ぶ難しい道路を建設し、最近ではカブール空港のターミナルも完成させた。そして今も、JICAが派遣する60人の専門家集団が、現地の人々と一緒になって汗をかき、農業、医薬、教育などに携わっている。それからアフガンの8万人の警察の給与の半分を日本が支払っている。平和を構築するための日本独自の方法が世界的に高く評価されるようになってきた。アフリカでも南太平洋でも、世界の隅々で専門家たちが現地の人々とともに働き、技術指導している。上から目線ではなく、まさしく現地の人々と同じ目線に立って汗水を流す、こういうやりかたは他の先進諸国にはみられないことなのである。2010年5月にタンザニアで開かれたアフリカ開発会議の席で、キクウェテ大統領は日本によるアフリカ支援について、「日本ぐらい、きちんと約束を守ってくれる国はない。技術移転や投資など、これからも日本には大いに期待している」と絶賛した。

こうした実情を日本人はもっと知って欲しい。

2010年11月 「街場のメディア論」 内田樹 光文社新書

テレビの中でニュースキャスターが「こんなことが許されていいんでしょうか」と眉間に皺

を寄せて慨嘆するという絵柄は「決め」のシーンに多用されます。その苦渋の表情の後にふっと表情が緩んで、「では、次、スポーツです」というふうに切り替わる。僕は自分が狭量であることを認めた上で言いますが、この「こんなことが許されていていいんでしょうか」という常套句がどうしても我慢できないのです。「それはないだろう」と思ってしまう。「こんなことが許されていていいんでしょうか」という言い方には「こんなこと」に自分はまったくコミットしていませんよ、という暗黙のメッセージが含まれています。「こんなこと、私はまったく知りませんでした。世の中ではこんなにひどいことが行われているなんて。。。」という、その技巧されたイノセンスに僕はどうしても耐えられないんです。あちらに「バッドガイ」がいて、こちらに「グッドガイ」がいる。この「こんなことが許されて。。。」という技巧された無垢、演技的な驚愕は「グッドガイ」の記号として使われている。

おのれの無垢や未熟を言い立てることで責任を回避しようとする態度。それはいまや一種の社会的危機にまで肥大化しつつあります。

僕が先ほど来、「被害者面」が問題だと言っているのは、日本のマスメディアが一貫して「クレイマー」の増加に加担してきたと思うからです。

自宅待機は「伝染病の感染を防ぐ」という公共的な目的のための措置であって、寮生である彼の娘はこの措置によって「病の感染機会から隔離される」というかたちですでに「受益」したと私は考えていたからです。でもこの親は「はしかに感染しなかったこと」は「利益」にはカウントせず、学校伝染病の拡大を阻止する公的措置がもたらした学習機会の喪失だけを「損失」にカウントした。そしてその補償を、補講あるいは授業料の一部還付というかたちで行うことを大学に要求した。

自分が市民的に享受している利益は「当然の権利」であり、それについては少しも「負債感」を持っていない。しかし自分の利益が侵害された場合にはうるさく言い立てる。

給食のときに「いただきます」と言うことに抗議した親がいたそうです。自分は給食費を払っている。誰にも負債はない。なのに、どうして「いただきます」と礼を言わなければならないのか、という理屈でした。「給食を食べる」という現実は、食物の生産・流通システムの整備、公教育思想の普及、食文化の深まりといった無数の「前件」の結果、はじめて可能になったものです。その先人たちの積み重ねてきた努力の結果を享受している現実に対しては「ありがたいなあ」と思うのがふつうでしょう。もちろん子どもはそんなこと知りませんから、それはしかたがない。でも、親がそれではまずい。大人というのは子どもじゃないんですから。大人というのは、最低限の条件として「世の中の仕組みがわかっている」ことを要求されます。

傷害を受けた患者や、死亡した患者の家族の行動をメディアは非難しない。とくに、病院との接触面で医療事故被害者はあらゆる行動が許されているかのようである。「弱者」とされる人たちの行動に瑕疵があっても、社会的に有効な形で伝えられることはない。一部の「弱者」はそれをよく知っている。このために、とげとげしい反応に歯止めが一切かからない。メディアは固有名と、血の通った身体を持った個人の「どうしても言いたいこと」ではなく、

「誰でも言いそうなこと」だけを選択的に語っているうちに、そのようなものなら存在しなくなっても誰も困らないというものになってしまった。

自分の語っている言葉の中に「命が危うくなると知るやたちまちそれを避妊する」様な言葉がどれくらい含まれているか、その含有率について、ときどき自己採点するくらいのことはしてもよいのではないか。

2010年11月 「一億総ガキ社会」 片田珠美 光文社新書

打たれ弱い人の多くは現実の自分を受け入れられないでいる。「こうありたい」という自己愛的なイメージ上の自分と、現実の自分との間のギャップが大きすぎるためである。「自分は何でもできる存在である」といった幼児的な万能感をひきづっており、実際には「それほどでもない」等身大の自分をなかなか受け止められないのである。

うまくいかなかつたら、とりあえず他人を責め立てて切り抜けようとする他責的傾向はあらゆるところで強まっており、「一億総他責的社会」とも言えるほどである。その根底に潜んでいるのは、自己愛的なイメージ通りにうまく進まないことによって生じる不安を解消し、自分は万能感を保ったままでいたい、という欲望である。最近増えている「キレる」人々の根底にあるのも同じ欲望である。

大人になるということは、挫折に挫折を繰り返し、親の期待とも折り合いをつけながら、自らの卑小さを自覚していく過程である。この万能感の喪失、つまり「断念」を受け入れられない若者が、ものすごく増えているように筆者は感じられる。これはとりもなおさず、大人になることの拒否、つまり「成熟拒否」である。

成熟して大人になるということは、一方では、心身の成長に伴っていろいろなものを獲得していきながら、同時に、一方では何かを断念し、「何でもできる」という誇大的な自己イメージを捨てていくことを余儀なくされる過程である。対象喪失を受容できない人間は、万能感を失うことに耐えられず、自己愛的イメージにしがみ続けるからこそ、現実の自分を受け入れられないのである。

いくつかの段階を通過し、痛みを伴う感情を体験しなければ、離乳という最初の対象喪失を受け入れられない。なかなか大人になれない人を「いつまでもお母さんのオッパイをしゃぶっている」と揶揄することがあるが、離乳という最初の対象喪失を受け入れられないからこそ成熟できないわけである。

女の子の場合、愛着の対象が母から父へと転換する。女の子だけが、幼少時に愛していた母からの「離反」というある種の対象喪失を経験している。それゆえ、女性は対象喪失に対して一定の抵抗力を持っているが、男性は対象喪失に打たれ弱いのだと考えられる。

男の子の場合、「最初の愛の対象」である母を断念するという「対象喪失」を経なければ異性愛に向かえない。

「あきらめない」のであれば、そのために重ねるべき努力も、あがくことに伴う苦悩も、失敗したときに味わう絶望も、引き受ける覚悟がなければならない。この覚悟がなく、自己愛

的イメージだけがふくらんで、現実の自分を折り合いをつけられない人々が増えているからこそ困ったことになる。もしそれでかの覚悟を持ってないのであれば、ある時点で見極めをつけて、「あきらめること」＝「断念」を受け入れたほうが生きやすい場合はいくらでもある。その意味で、ときには「断念」も必要だと言っているのである。精一杯努力しても、うまくいかないこともあれば、負けることもあるのだから——昔の人が、多少の慰めを込めて「勝負は時の運」と言ったように。また「断念」によって自らの敗北や失敗といった「対象喪失」を受け入れて初めて、敗者への思いやりや弱者への共感を持てるようになる。また誇大妄想的ではない、地に足の着いた目標を再度掲げて、それに向けての着実な努力というものもできるようになる。こうした「大人のふるまい」ができるようになるためにも、「断念」をいかに受け入れるかは、きわめて重要である。

2010年10月 「スローライフでいこう」 エクナット・イーシュワラン ハヤカワ文庫  
世の中には、人生でかなえられないことを求めて苦しんでいる人が多すぎる。

2010年10月 「大阪維新」 上山信一 角川SSC新書  
日本人の平均賃金は1997年467万円→いまや430万円。貯蓄率は1991年に所得の16%→2008年に2.3%。失業率2006年4%→いまや5%。  
わが国の個人金融資産は、全体の54%を60歳以上が、そして78%を50歳以上が持っています。

2010年10月 「日本の恐ろしい真実」 辛坊治郎 角川SSC  
大阪市の人口は260万人。そのうち生活保護を受けているのは約136,000人。実に20人に1人が生活保護で生活している。世帯で数えるとさらに凄まじく、13世帯に1世帯が生活保護世帯だ。伸び率は毎年10%を優に越えている。  
日本全体の生活保護者は増加の一途をたどり、100万世帯の大台を突破して久しい。投じられる税金は、防衛予算の半分を軽く超え、3兆円の大台に乗る勢いだ。  
現在日本に無年金の高齢者は約70万人。その4人に3人が生活保護で暮らしている。

2010年10月 「なぜギャルはすぐにかわいいというのか」 山本博通 幻冬舎新書  
この国のギャルたちは、このスカートにはこの小物を合わせるとかわいいけれど、その基準はどこにあるかと聞かれても、いわくいいがたいものがあって、ただもう「かわいい」と思うだけで、ということになる。そこに何か「法則」があるわけではない。たぶんその感性は、日本列島の歴史や伝統の上に成り立っているのであり、外国のギャルもそのことがわかるから、「私も日本人になりたい」といったりする。これも一種のフェミニズム運動だろうか。西洋の「一神教」や「公共性」が、女たちを抑制してきた。「オー・グレート！」と感動する社会を何千年もかけて男たちが作ってきたわけで、その文化が、女たちを抑制してきた。

現在の西洋のギャルたちは、「かわいい」ということばとそのセンスに、そうした抑圧からの解放を託しているのかもしれない。

過ぎ去った時間はもう戻らない。生きてゆくことは、この生を喪失してゆくことであり、喪失感を深くしてゆくことだ。人間の心は、喪失感を抱いてしまうようにできている。

「かわいい (かはゆし)」ということばは、もともと「かわいそう」とか「はずかしい」というような意味だった。

電車の中のギャルが、まるでまわりに人がいることに気づいてないかのような風情で化粧に熱中してゆくのは、彼女らがそれほど大人に対する関心を喪失しているからだろう。いまどきの大人たちはそれほど魅力がなく、彼女らはそれほど深く大人に幻滅している。この国には、「あはれ」とか「はかなし」というような、「喪失感=嘆き」を共有してゆくことによって人と人の心がつながってゆくという伝統がある。

ギャルたちが数人で行動していてかわいい対象を見つけ、思わず「かわいい！」ということばを発するときには、そのときめきを仲間と共有しようとする衝動がはたらいている。彼女らにとって、その「かわいい」ということばこそもっとも人と人の心をつなぐものである、ということが体験されている。

団塊世代に壊されたやまとことばのテイストは、今、現代のギャルたちによってよみがえりつつある。

今どきの若者たちの気分をもっとも象徴しているのが、「まったり」ということばであるのだとか。自我の希薄な彼らの消費行動は、大人たちがどんなに煽り立てても活発になることはない。車なんかいらぬ。高級レストランで食事をしたくとも思わない。海外旅行より近場の温泉、デートや飲み会は街の居酒屋でいい。あとはユニクロを着てコンビニに弁当を食べれば何とか生きてゆける。それが、「まったり」とした日々の暮らしだ。彼らは、面倒なことにわずらわされることなく、まったりと生きていたいと思っている。

現在の若者たちはもう、個性的であろうとか、みずからのアイデンティティを確立しようというような志向は持っていない。彼らは、個性を主張するよりも、いかにして他者の心とつながってゆくかということに心を砕いている。

団塊の世代から 1980 年代の若者たち、すなわち現在の「アラフォー」と呼ばれる世代までの大人たちは、「個性の時代」を生きた人たちであり、彼らの「自分」へのこだわりは強い。しかし今どきの若者たちは、そのこだわりの意識が希薄である。

彼女らは自分に酔いしれることなどめざしていない。ファッションにおいて、自意識が透けて見えることの野暮ったさをちゃんと心得ている。だからたとえばエレガントなシャネルの上着の下にラフなジーンズを穿くとか、ユニフォームを着るような感覚でおしゃれをしているのであり、そういう着こなしを「かわいい」という。

われわれはたぶん、大きな思想を考えるよりも、細かい心理のあやに対して、とても敏感な民族なのだ。

17 歳というこの年代のこの瞬間は、もう二度とやってこない。この年代のこの瞬間が美し

いのなら、あとはもう滅びてゆくだけだ。滅びてゆくことと和解しながらこの年代のこの瞬間を生きるしかない。そういうかなしみを、気負わず清潔におしゃれに描いている。

今どきの若者は、自我を確立する、などという物語は、すでに断念している。大人たちのそういう自分に酔いしれた態度の野暮ったさや顔つきのみすぼらしさに、うんざりしている。

「自我」という自分の命のかたちを確立するのではなく、それが滅び行くことを抱きすくめてしまう心の動きは、この国の歴史の水脈である。ジャパंकール、そういう西洋人にはない心の動きで「かわいい」とときめく感覚が、今、静かに世界中に広がりつつある。

水の癒しは、存在感の薄さにある。命を守るためだったら、コーヒーやお茶を飲む必要もなかろう。われわれが水に癒されるのは、「存在」に対する圧迫感を抱えて生きているからだ。

水のやわらかさには、そういう生々しい存在感がない。どんなふうにも形を変えて「自分」というものを持っていない。そういうあいまいさと自由さが、人の心を癒してくれる。そういう存在感のないものを、「かわいい」という。だから、かわいいものは、ちょっと嘘っぽいものもいい。そういうコンセプトで、携帯のストラップなどの小物が選ばれている。

そして若者もまた、この社会に対して無用の存在になりたがっている。彼らは「自分はここにいてはいけないのではないか」と問うものたちであり、無用の存在にならないと生きられない。彼らはまだ「かくれんぼ」をしている。この世界の「物性＝有用性」にしがみついで興奮してゆくことから離れ、「ない」という「空間」に遊ぶことが救いになる。「癒し」とか「萌え」というのはようするにそういうことだ。

人格（アイデンティティ）を確立し、自分を主張して舞い上がってゆくのではなく、「自分はここにいてはいけないのではないか」と「伏す＝這う」ようにはにかみながら問うてゆく文化。そこから「かわいい」というときめきが生まれてくる。

やまんばギャルのあの異様な風体は、一種の自己処罰だったのかもしれない。そのとき彼女たちは、女としての身体を持て余しつつ時代や大人たちに追い詰められていた。そうして、身体を処罰するような形でやまんば化粧に熱中したり、セックスにおぼれたり、さらにはリストカットを試みたりした。

生き物は、生きてはいけない存在である。生きていけない存在が、つかの間生きているだけのこと。

大人たちが正義ぶって「命の大切さ」や「命のかけがいのなさ」をいっているかぎり、若者たちはますます追い詰められてゆき、若者と大人が共有できるものが何もなくなってしまう。そんなことをいっているから、大人たちの顔はますます醜くゆがんでゆき、若者から幻滅され続けなければならない。

未来にはいいことがあるという希望が人間を生かしているのではない。生き物の意識の根源に、未来など存在しない。「今ここ」で誰かと何かを「共有」できることが「生きられる意識」になっている。

バブル崩壊以降、マスコミや団塊の世代による「日本衰退論」「日本長期不況論」の宣伝の影響もあって、日本人の多くはなぜか日本はもうだめだと思い込んでいる。ところが世界的には日本の評価はどんどん高まっているのが実情だ。その好例が台湾だが、日本に好感を持つ人々は東南アジア、南アジア、中東、アフリカ、欧州、中南米など世界に広がっているのだ。

2007年に米シンクタンクが世界16ヶ国の市民に、日米中に対する「信頼度」を問うた調査では、「大いに信頼」と「ある程度信頼」を合わせた日本への信頼度は16ヶ国平均で46%で、米国(41%)、中国(38%)に対する信頼度を上回った。国別では、日本への信頼度が一番高かったのはインドネシアで76%。以下、オーストラリア(72%)、米国(71%)が続き、16ヶ国中6ヶ国で50%を超えた。逆に日本を信頼できないと答えた割合が高かったのは韓国と中国だけだった。また、英国BBCが毎年実施している「世界によい影響、悪い影響を与えている国」に関する意識調査によると、日本は常に上位に位置している。最新の2010年4月発表で、33ヶ国を対象にした調査では、日本は世界によい影響を与えているという評価では53%で、ドイツに次いで世界二位。悪い影響を与えているのは21%に過ぎなかった。よい影響の三位はカナダ。四位は英国。ちなみに悪い影響はイラン56%、パキスタン51%、イスラエル50%の順。米国の評価は前年までは悪い影響が多かったが、オバマ政権になってからよい影響46%、悪い影響34%。中国はよい影響41%と悪い影響38%が拮抗した。この調査でも、日本への肯定的評価はインドネシアはじめ東南アジアで軒並み高かった。

2008年5月に発表されたインドネシア、マレーシア、シンガポール、タイ、ベトナムの6ヶ国対象の対日世論調査では各国において90%以上が「友好関係にある」または「どちらか」というと友好関係にある」と回答し、また、同じく90%以上が日本を友邦として信頼できないしはどちらかという信頼できると回答している。日本に関するイメージについては、6ヶ国合計の全体で、回答の多い順に一位「科学技術が発達した国」(86%)、二位「経済的に進んでいる国」(79%)、三位「生活水準の高い国」(75%)であり、最先端の科学技術立国、豊かな先進国といったイメージが強いことが示された。また日本人に対しては、「勤勉である」「能率的である」「礼儀正しい」「団結心が強い」等のイメージが上位を占めた。日本企業の進出に対する好意的な回答は93%。アジアの発展に対する日本の積極的役割に対する肯定的な回答は87%を占めた。

日本は平和国家として60年以上もの実績があり、それをアジアの多くの国々や人々は評価し、信頼を寄せている。確かに中国や南北朝鮮のように、日本の平和国家としての実績を評価しないで、いまだに過去の侵略ばかり言い立てたり、中国のように自分たち自身が他者を傷つけたりしているような国もある。しかしそれは中国や南北朝鮮のような国が例外で、見る目がないというだけのことであり、ほかのアジア諸国は例外なく日本の平和国家としての実績を評価してくれているのだ。

エコノミストが2007年から発表している「平和度指数」というのがある。治安から軍事紛争への関与など、広義の平和すべての指標について点数化してランキングを示したものだ

が、2009年5月発表では、日本は7位だった。日本よりランクが上なのは日本に比べて人口がはるかに少ない北欧諸国だけだった。それに対して日本の侵略の過去をいまだに居丈高に非難している中国は74位、米国は83位といずれも平和度はきわめて低い。2010年6月発表文では日本はさらに順位を上げて3位になっている。BBCなどの調査と照らし合わせると、平和度の高さと好感度、平和度の低さと不人気は比例している。

米中が軍拡志向によって世界から嫌われているのと対照的に、日本は平和力を武器にして、人々を癒し、人類に貢献し、世界中から好かれているのだ。この点を左右を問わず現在の日本人の多くが自覚できていないのは、あまりにも悲しいことだと思う。

中国の急激な成長に活気を感じ、中国を羨んだり、GDPを取り上げて中国に負けつつあるなどと危機感を抱いている向きが多いようだ。だが、彼らが羨む中国は、世界ではどれだけ軽蔑されていて、彼らが衰退していると嘆き、卑下する日本がどれだけ尊敬されているのか。日本はすでに西欧と同じ成熟社会である。成熟社会は、発展途上段階のように右肩上がりやで経済成長したり、社会に活気がみなぎったりするわけではない。

誇るべきなのは歴史ではなくて、いまの平和と豊かさなのである。大切なことは、現在の日本への高い国際評価をしっかりと認識した上で、平和を誇りに思うと同時に、謙虚に世界と接することである。傲慢になっても卑屈になってもいけない。

北朝鮮やイスラエルが過度の軍事依存で民衆が疲弊し、結果的に国力が低下してしまったことを見れば明らかのように、21世紀の今日、軍事はむしろ「最大多数の最大幸福」もしくは「最小不幸」を目指すうえでの阻害要因でしかない。

平和国家日本の評価は世界でますます高まる傾向にある。日本の環境技術への評価も高い。今後の日本は「平和と環境」を軸にして、世界でプレゼンスを高める必要がある。平和な地域が広がり、平和が定着するほど、日本の大衆文化の市場はますます拡大する。日本の強みは「平和国家を維持してきたこと」であり、世界的な平和の拡大は、日本にとっても、世界にとってもメリットが大きいのである。

2010年10月 「老いの才覚」 曾野綾子 ベスト書房

75歳以上のすべての後期高齢者が保険料の負担を求められ、大多数が年金からの天引きで保険料を徴収されるようになりました。その時、テレビで後期高齢者に当たる男性が「我々を殺す気か」と腹を立てていました。番組を見ていた同世代の知り合いは、「情けないですね。戦争を体験してきた者が、何ですか、あの言い方は」と怒っていました。75歳以上といえば、爆弾が降ってくる中を生き抜いた人間です。だから「あんな柔なことを言う世代だとは思わなかった。戦中派につくづく愛想がつかた」ということなのでしょう。制度に反対する人の中には「私たちはごろつきですか」と食ってかかる女性もいました。そういういかにも嫌らしい言い方をする。日本の年寄りや、戦前に比べると毅然としたところがなくなりました。

あらゆる点で守られ、何かあれば政府がなんとかしてくれるだろうと思っているから、自分

で考えない。してくれないのは政府が悪い、ということになる。

よく「日本は経済大国なのに、どうして豊かさを感じられないのだろうか」と言われますが、答えは簡単です。貧しさを知らないから豊かさが分からないのです。今日も明日も食べ物があって当然。水道の栓をひねれば、水が飲める。飲める水を使ってお風呂に入り、トイレを流している。昔は日本人も水を汲みに行ったり薪を取りに行ったりしましたが、今ではそういう生活が当たり前になった。もともと人間が生きるということはどういうことかを全然知らない、おめでたい老人が増えたのです。

人はその時そのときの運命を受け入れる以外に生きる方法がありません。その範囲の中で、自分は何ができるかを考えるしかない。昔のようにできないと思うと苦しくなりますから、その時々、その人なりにできることをやればいいのだと思います。

自分がやった仕事に「対価を払います」と言われているということは、社会から疎外されていない証です。

老人にも大きく分けて二つの生き方がある、と私はよく思う。得られなかったものや失ったものだけを数えて落ち込んでいる人と、幸いにももらったものを大切に数えあげている人がいます。さまざまなものを失っていく晩年こそ、自分が得ているもので幸福を創り出す才覚が必要だと思います。

2010年09月 「真の指導者とは」 石原慎太郎 幻冬舎

日本人は独特の感性を持っているのだから、そうした日本人の特性、自分が何であるかということ、相対的な認識として抱く必要がある。

やがて世界がもっと時間的、物理的に狭くなりいろんな紛争が起こり摩擦が起こったときに、日本人の発想や価値観が、そういったものを融和させ統合して世界を安定させる大きなよすがになるに違いない。

日本人の発想力には世界的に秀でたものがある。

企業をその時点のそろばんで判断するのならば、この決定は無謀だと非難されても当然だったろう。しかし、三年先、五年先、十年先を考えたときどうしてもやらなければならないことだった。かりに本田が倒産し私たちが去っていても、従業員とその設備は日本のために行き続けるのだからと決心した。

まず強い目標を立てる。それを達成するためにあらゆる技術を動員する。「できそうだったらやってみよう」というのとは大きな違いがある。

マキアウェリは「君主論」の中で、「決断力のない君主はたいがいみんな中途半端な中立の道を選ぶ。そして大方は滅びていく」といつているが、その通りだと思う。最近の日本の社会を見ていると、よくいえば状況主義、分かりやすくいえばその場しのぎの場当たりで、五年、十年のスパンで物を考えるという人間が少なくなりました。

だんだん考えてわかってきたことだけれども、死ぬということは死んだ後暗いトンネルを一人きりなく歩いていくんですよ。そのうちに、私を失った家族までが私のことを忘れてし

まう。それでなければ生き残ったものもかなわんでしょうからね。そして厄介なのは、この私自身が自分というものを忘れ、その結果、すべてのエネルギーが消滅して、人間は本当に消滅してしまうんですな。だから、死ぬということはいかにもつまらんことですよ。

サンフランシスコで日本が講和条約に調印した祭も、外務省が作った吉田茂の演説の草稿の原案を否定して、「日本は戦争に負けたのであって、奴隷になったのではない」と言い切った。

吉田茂の側近の白洲次郎は「僕は人からアカデミックな、あまりにもプリミティブな正義感を振り回しすぎると言われるが、しかし、僕はそれが尊いものだと思う。」とってはばからなかった。

志を守り抜く工夫は決して格別のものではなく、日常茶飯事の自己規律にあるといい、たとえ食事のおりの箸の上げ下ろしにも自分の仕方がなければならない。すべての生活における所作がその志を守るための工夫によって貫かれなくてはならないという。これは司馬さんが考える侍たる男の美学といえるかもしれない。

土光さんの言葉に「朝、顔を洗って読経をする。そこから私の一日が始まる。精一杯の務めはするが、凡夫の悲しきで失敗することも多い。そんなとき私はいつも仏前に座っているつもりで心を鎮める。また、夕方帰宅して仏壇にぬかずき、その日のことを反省し、それとてにかく一日の締めくくりをつける。なぜお経をあげるかって、毎日が不安でしようがないからだ。私はお経を上げることによってこの不安が鎮まるのです。」

点在と呼ばれていた児玉にしてなお、「知恵というのは血を吐いて考えてもやっぱり限界がある。最後は運だ」と信じ、その運を引き寄せるために朝日に向かって祈っていたということです。

「男と女の関わり合いで相手の本心を見抜ける。それは、男と女が出会って一緒になるときではなくて、男が女といかに別れるかというその際だ。本来、男と女はほっておいてもくつつくものだが、しかし、別れ際ほど男の本性がはっきりするものはない。冷たい男は冷たい別れ方をする。唯物主義者の男は札で頬を張るような別れ方をする。情けのある男は、同じ別れ方でも、わきから見ていても涙を誘うような切たるものがある。

お金の借り方、返し方で、あるいは踏み倒しの仕方で相手が非常によくわかる。

人材といえば、大きな成功を続けている組織には、頂点に立つ限られた人間、指導者だけではなくて、実はそれを支える副将格にすばらしい人材が備えられているものです。そしてその指導者が、そうした副将格の人材をどうやって獲得したかにこそ興味があります。

本田宗一郎は「人を動かすことのできる人間は、他人の気持ちになることのできる人間だ。相手が少数数だろうと、大勢であろうと、その人間たちの気持ちになり得る人間でなければならない。そのかわり、他人の気持ちになれる人というのは、自分が悩む。自分が悩まない人は他人を動かすことはとてもできない。自分はそう思っている。自分が悩んだことのない人間は、人の悩みもわからないだろうし、人を動かすことはできない。他人を動かすためには、まず自分が格好よくなりたいと思うことが必要だ。格好よくというのは、他人に良く思

われ、よく言われたいという意味だ。薄っぺらなようだが、これはひとつの真理でもある。だから、こうしてやろうという意思が大切なのだ。これは案外薄っぺらなことではない。誰も老いたくはない。誰も死にたくはない。しかし誰も必ず年をとり老いて、その先必ず死ぬのです。そんな当たり前のことがらになんでくよくよしたり、怯えたり、腰が引けたりすることがあるのでしょうか。人生という劇場の決して短くはない最後の幕をたっぷり味わっていくためには、正面きって自分の人生に向き合い、こちらから仕掛けていけば、こんなにやりがい、生きがいのある、人生のときは他にあるものではないのです。

2010年09月 「売り方は類人猿が知っている」 ルディー和子 日経プレミアシリーズ

自分が目的に向かって何かをしているというだけで、不安感はずっと減ります。

危ない！このときロボットは任務遂行のために100個以上のタスクを抱えているかもしれません。しかし、ロボットがしなくてはいけないことは、実行中のタスクをすべて中止し、今この瞬間の最重要事項である「逃げる」というタスクだけにすべての電気回路を集中することです。人間は恐怖という感情を持つことでこれを達成しました。ですがロボットにそれができるようにプログラムするのは非常に難しいのです。

人間の脳は体重のわずか2%を占めるだけですが、食事から得られる膳エネルギーの20%を使います。

恐れや怒りの感情は非常に役立つ感情です。最近に汚染された水や腐った食べ物を体内に取り込むことに対する恐怖心が嫌悪感です。現代の私たちが嫌悪感を感じるものの上位には、動物の死体、血、排泄物に関するものが挙げられます。

危険な食べ物を口にする頻度も少なくなった。その結果、腐った食べ物に対する嫌悪の感情は、いまでは、食べ物以外で、自分が相容れることができない考え方や人間に対して使われるようになっていきます。「アイツには嫌悪感を覚える」とか「ああいったなりふり構わない仕事のやり方には嫌悪を感じる」といった具合です。

進化生物学者のリチャード・ドーキンスが著した「利己的な遺伝子」という本で、遺伝子は、自分が属する生命体になるべく長く生きて、なるべくたくさん繁殖して、自分が後世まで生き残るように、私たちの脳をプログラムしたということです。そして脳は、自分が属しているヒトが生存して繁殖するという目的を達成できるように情動をつくったのです。

脳は、自分が属している固体が遺伝子を残すことができるように、親が子供に感じる愛情を誕生させたのです。

現在に住む人間は、この不安感を数時間どころか、場合によっては、数ヶ月とか数年もの間、感じ続ける状況に陥っています。

うつ病、不安障害、パニック障害といった心の病に悩む人たちが多くなっているのは、私たちの脳が、現代の環境にまだ適応していないからだといわれます。

消費者は金銭的利得だけではなく、安心感を求めているのです。

不安を抱く人間は巣にこもってはいても、一人はいやなのです。誰かとつながってほしいの

です。不確実で不安定な時代は、そういった消費者と感情的に結びつくビッグチャンスなのです。不確実で不安定な環境にあるときこそ、消費者の心に沁みこむ安心感を与える広告メッセージを送る。そして消費者と感情的に結びついて関係を築く。

なぜ、人間だけ、恥や罪悪感といった自分の利益を損なうような感情を持つようになったのでしょうか。それは集団を単位にして考える場合、協力関係の堅固な集団の方が、協力関係の弱い集団に比べて、全体としての生存率や繁殖率が高くなるからです。

消費者の買い控えに頭を悩ます企業は、まず、消費者が自分の購買を正当化しやすいような仕組みを作ってあげる必要があります。

長寿ブランドであるためには、まず第一に、長く市場に生存する必要があるのです。

商いで大切なことは飽きないこと。

将来を予測しにくい時代には、人々は情動や直感に基づく行動を取りがちになり、自分の判断に自信がもてないので、他の人に影響されやすくなります。また、世界がランダムであると信じるよりは、ミステリアスで神秘的な目に見えない力が存在するほうを選ぶのです。占いや縁起物が流行します。「困ったときの神頼み」が増えます。業界や社内でもゴシップが蔓延します。

人間は葛藤を覚えながらも集団で生きることを選んできました。なぜなら、結局のところ、私たちは、常に何かを恐れ不安を感じるからです。

太古の昔から不安を抱え、他者と繋がりたいと願っていた人間が、SNSや24時間いつでもどこでも繋がることを可能にしてくれた携帯電話に飛びつくのは当然です。

2010年08月 「激安のからくり」 金子哲雄 中公新書

大手企業は発注しておきながら商品を引き取らないということを結構やっている。これが激安の目玉商品になっていることが多い。

商品を生産した人たちが、ちゃんと生活できるような、適正な価格で買い取りましょうという運動を「フェアトレード」という。

労働の対価に見合わない価格形成がされているのは、長続きしないはずですが、また、利益のうち、生産者へわたる分も少ないようです。利益のだいたい半分が生産者へ渡るような仕組みが必要。

2010年08月 「日本人へ」 塩野七生 文春新書

人間ならば誰にでも、現実のすべてが見えるわけではない。多くの方は、見たいと思う現実しか見ていない。ユリウス・カエサル。

長年にわたって紛争が続いている状態とは、当事者の中に必ず、紛争が続くほうが利益になる誰かがいる。この「誰か」にとっては解決しないほうがトクになるので、解決の道筋が見え始めるや妨害する。だからこの種の問題解決には、何よりも先にその「誰か」を見つけ、見つけ次第にその「誰か」を排除することが重要なのだ。

時代に対処するには問題の本質は何か、に関心を戻すことだ。言い換えれば、問題の単純化である。そして単純化ができなければ、百家争鳴しても改革は頓挫する。

悪いことだからやってはいけない、ではなくて、見苦しいからやるな。基準は善か悪かではなくみっとも良いかないかだけなのだから、これはもう倫理道德の問題というより美意識の問題であり、それゆえに親の与えるしつけのひとつにすぎないのである。

2010年08月 「**老いもまたよし**」 石田雅男 幻冬舎レックス新書

作家山田風太郎の死生観

死後の世界は科学的な証明がないので存在しない。無である。死は無であるから無に対する如何なる覚悟も無である。怖れようと悲しもうと何の斟酌なく無の世界に人はゆく。つまり無という自覚も存在しない世界に運ばれてゆくのである。死ぬからと大げさに騒ぎ立てるのは人間だけである。

生命科学者柳澤桂子の死生観

宇宙は原子からなり、原子は動き回っているために、物質の世界が成立している。原子のレベルで宇宙内を見ると原子の密度の高いところにモノがあり、このモノには人間も含まれている。したがって一面の原子が飛び交っている空間の中に原子が蜜に存在するところがあるだけである。だから生もなければ死もないのである。

2010年07月 「**スピリチュアル・ライフのすすめ**」 榎尾直樹 文春新書

副交感神経とは、リラックスしているとき、休んでからだを回復させているときに働く神経である。筋肉が緩むと、血管が広がって血液がゆっくりと流れる。また胃液などの体液やリンパ液が流れやすくなるので、からだ全体に栄養が行き渡りやすくなると同時に、老廃物も排出されやすくなる。それで寝ている間からだが回復するのである。

呼吸だけが人間の自由になる唯一の行為である。だから、ゆっくりとした呼吸を意識的にすることによって、副交感神経を作用させ、リラックスした深い意識を自分で創りだすことができる。

2010年06月 「**晩節を汚さない生き方**」 鷺田小弥太 PHP新書

晩節を「清く、貧しく、美しく」生きることができたら、間違いなく晩節を汚れなく生きることができる、こう断言してもいいでしょう。

後期高齢とは75歳を境にします。長い人生を生きてようやく「自然死」を目前にした晩節に突入するのです。「死ねというのか」は死が他人事に過ぎない人が言うべき言葉でしょう。75歳を過ぎれば総じて死の当事者として「死ぬ準備期に入る」のです。「晩節を全うする」というのは言葉を換えて言えば、「立派に死ぬ」ということです。「立派」とはその人の人生にふさわしい「死」を生き抜くということです。「生」にぶらさがることではありません。だれにも「晩節」があります。そのプロセスはうまくできています。死は人によってさまざま

まな様相を呈するようによ見えます。避けがたい、抗いがたい共通の特徴を持っているのです。その特徴に逆らわない、これが「晩節」の生き方の基本形に違いない、とっていいと思ひます。

「諦念」とは、人生をあきらめることではありません。初節、中節、後節でさまざまにまわりついてきた雑雑たる思ひを振り払い、後節に託せる価値あることを選ひ、おこなうことです。さらにいえば、後節でこそ仕上げたいなと思ひたことでも、できなくてもいいさ、しかし、やってみるさ、という「心意気」だと思ひます。そうならいい、幸運です。

「よき人生」とは、自然に適った人生。

晩節を可能な限り汚さない生き方は、晩節に「新人」として入っていくことです。それまでの「成果」を誇らず、新しい関係性を築く心積もりで晩節に臨むことです。

2010年06月 「しがみつかない死に方」 香山リカ 角川 ONE テーマ 21

臨終を迎えたときはたしかにもものすごく悲しかったけれど、でも一方で、“やっとゴールに駆け込めてよかったね、よくやった！”と拍手したい気持ちもあった。本人はきちんと覚悟を決めていて、“いつ頃、こうやって終わりを迎えたい”という希望も持っていたけれども、なかなかそうはいかないもの。人が死ぬのって、本当に大変なことよ」別の友人からも、同じ感想を聞いたことがあった。老いて、病気になって、回復したり悪化したりを繰り返しながら死を迎えた親を看取って葬式などを執り行いながら、「死って一大事業なんだな」と感じたそう。いつも客観的な口ぶりの彼女は「遺体っていうのもけっこうな大きさだしねえ。亡くなったら即、消えてなくなるのじゃないのよ」

自分らしい終わりの迎え方を、自分自身で選ひたい。もしかすると、これはかなり傲慢な欲望なのかもしれない。「すべては天や神が決めること」と考へて、あとはなるべく生きられるところまで生きてみる、というのが妥当な線、という気もするのだが、どうだろうか。

2010年05月 「草食系男子お嬢マンが日本を変える」 牛窪恵 講談社+α 新書

こんなによい子を増殖できた日本は、それだけ豊かだったのだ。

発生要因のひとつは、携帯電話やインターネットなどの社会インフラによる影響。二つ目はイケイケ・ドンドンのバブル経済を身をもって体験していないことによる影響。三つ目は幼少の頃からコンビニなどがそばにあり、いつでもモノが手に入る環境が整っていた影響。この3つが作用しあい、つねにお腹を減らしてガツガツするライフスタイルが急激に減った。周りの空気に敏感なお嬢マンこそ、未来の日本が求めていることをすでに察知し、その方向に向けて突き進んでいる。私自身、彼らお嬢マンの実像を知ること、面白よように日本の未来が見えてきた。

20代の金銭感覚は、堅実で等身大。貯蓄好き。友達どうし仲がよい。でも一方で、“ひとり時間”も好き。出世を鼻にかけたりしないし、上からモノを言うこともない。気取らずリラックスできる。年下クンでお金がなくとも、一緒にいてラクなほうがよい。いまどきの20代

女子は肉食系をほとんどいいほど求めていない。彼女たちにもてるのは、肉食のちょいモテ系より、さっぱりした草食の癒し系。何しろ、20代女子の7割が結婚相手に求めるのは「一緒にいてくつろげること」。恋愛段階でもドキドキ感を求めたり、スリルある恋をしたいとは考えない。

女の子にもてたいより、親や社会に好かれる“社会モテ”を目指している。20代女子も恋愛にガツガツしているわけではない。ただ出産のタイムリミットがある。

バブル世代の肉食系が積極的に働くなど、攻めの姿勢で何かを得ようとするのに対し、草食系お嬢マンはできるだけパワーを温存したがる。バリバリ働かない代わりに、ムダに使わない、あるいはモノを再度おカネに代えるなど、守りの姿勢が強い。持たない、捨てない、ムダにしない、子の考え方は決して悪くない。

お嬢マンが繰り出すオバチャン感覚の超効率主義や、エコ志向、家族も地元も大好きという価値観は、実は日本がその昔、大切にしていた考えばかり。要らないモノは持たない、古いモノは再利用する、自然や環境と共生する、親を大事にすてご近所づきあいも忘れない。。バブルを知らないお嬢マン。物欲が弱いお嬢マン。言語が違うお嬢マン。彼らは私たち大人が捨てた“日本の資産”を、改めて掘り起こしてくれた。日本を救う救世主になりうる存在だ。

2010年05月 「努力しない生き方」 桜井章一 集英社新書

得るものが多ければ、反対に多くのを失ったり、背負うものも増えていくのだろう。足し算で生きている人には慢性的に「足りない」という気持ちに追われるわけだが、それにとられるあまり、すでに「足りている」部分を大事にしなくなる。

新しい車ライフを送るためのエコカー減税なるものがTVで盛んに宣伝されているが、これほどインチキなものはない。結局は車メーカーの産業振興のために業界と癒着している旧自民党政府がエコカー減税を設けたのであって、車を買わない無関係な人から最終的には税金を負担させる仕組みなのだからとんでもない話だと思う。

2010年05月 「錆びない生き方」 坂東真理子 講談社

女は三度老いを生きる。親の老後、夫の老後、自分の老い。

自分も年をとったらああいう人になりたいと思われただけの、健康と知恵と教養と経済力を備えたいものです。

歴史に名を残すことができない私たち多くの人間にとって、友人は自分の人生の生き証人です。人生とは人の心にどういふ思い出を残すか、で測られる見方もあります。

70歳代で90%以上が生活に支障のない程度の健康状態なのです。知識・経験・健康はそろっているのですから。気力。意欲を持って社会とつながっていく、社会に貢献していくことを目指すべきです。

駿馬は年老いて飼葉おけに伏しても千里を駆ける夢を持っている。勇ましい男子も年老

いて盛んなる心は衰えない。年を重ねただけでは人は老いない、理想を失うとき初めて老いる。

母が 90 歳ごろ、何を見ても「なんてきれいだ、美しい、かわいい、いとおしい」と言っていたのを思い出します。限られた命だからこそ生きている時間を充実して生きる、全力を尽くして味わうことが必要になってきます。

2010 年 05 月 「先の先を読め」 樋口武男 文春新書

誰しも“いい人”と見られたいのが人情だろうが、あたたかいだけの“情の人”は部下や取引先から真の尊敬は得られない。自分をよく見せたいと思っていると、土壇場の決断を失敗する。真のトップ足る者は、怨嗟と孤独に耐える強い心を持たねばならない。

2010 年 05 月 「衆愚の時代」 楡周平 新潮新書

2010 年 05 月 「不幸な国の幸福論」 加賀乙彦 集英社新書

前向きに考えることは大事なことですが、悩むというプロセスを抜きにしたプラス思考は、自分の弱さやダメな部分から目をそらすことにつながりかねない。

視線恐怖症というのは大別すると、「他者視線恐怖」と「自己視線恐怖」に分けられます。自分の行動や容姿を他人がどう思っているかを気にするあまり、見られることを怖れるようになるのが他者視線恐怖。自分の目つきが不自然で人に嫌な感じを与えていると悩み、相手を正視できなくなったり、どこに目をやればいいのかうろたえてしまうのが自己視線恐怖です。自己視線恐怖の人が恐れているのは、自分の視線だけではありません。「私が誰かを見ると相手は不愉快になり、私のことを嫌な人間だと思って冷ややかに見返してくる」という具合に、視線が往復運動をするものだから、他者の視線もまた恐れている。それは自身の勝手な思い込みであり、低い自己評価の投影にすぎないのですが。フランスでは自己視線恐怖の患者は少ない。日本人の場合は、自分のダメなところや醜いところ、秘密にしておきたいことを全部他人に見透かされてしまうという恐怖を抱いている患者さんがたくさんいる。

他者を過剰に意識することは、言い換えるなら、自分の評価を他人にゆだねてしまっているということです。そして、そういう人ほど、ちょっとしたことで傷ついてしまう。

いまの日本は、社会からこぼれ落ちかけた人たちを自暴自棄型の犯罪に走らせやすい国になっているということを忘れてはならない。

今の日本の子どもたちが不幸を背負われているように思えてなりません。コンクリートで覆われた国土で、ろくなセーフティネットもないまま、1000兆円を超える借金と膨大な数の老人を抱えて生きていかなければならないのですから、幼い頃から画一的で歪んだ物差しでヒトとしての価値をはかられるだけでなく、心のなかにその物差しを組み込まれ、他者や自分自身をはかるようにさせられてしまうのですから。

不幸と幸福の間に物理的な距離など存在しない。そこに横たわっているのは、本人しだいでゼロにも一億光年にも変わりうる真理的距離なのです。

治療不可能な重い病気になったとき、リストラされたとき、愛する人をうしなったとき、年老いて体や頭が思うように働かなくなったとき、自分が誰からも必要とされていないように感じたとき。。私たちはいとも簡単に生きがいを喪失してしまいます。しかし、苦しみの中から新たな生きがいを見つけ、立ち上がっていきけるだけの力もまた、人の心は宿している。その力は私たちひとりひとり、誰のなかにもあるものなのです。

人のために何かをすること。それこそが、「私は必要とされている」「私には生きる意味があるのだ」と実感できる最も簡単な、そして誰にでも可能な方法です。自分は必要とされていると思うことが、いかに人間を強くするか。

高齢者が老いを楽しみ、「ゆっくり」や「待つ」豊かさを伝えていけば、老人はもちろん子供たちにとっても生きやすい社会になるのではないのでしょうか。

人はみな死刑囚として生まれついている。命のはかなさとかけがえのなさ。はかない命同士が何かを共有できることのありがたさ。私たちに与えられている時間の短さ。限られた時間の中で自分が大切にしたいものの優先順位。。限られた時間しか生きられないからこそ、生きていることのありがたさを感じる。目的に向かって努力をし、希望というものを抱くことができる。短い命の人間同士が出会い、つながり合えたことの奇跡を喜べる。死によって命を限られていることもまた、人間に与えられた恵なのだと思います。

細胞の中には、生きるための遺伝子情報と死ぬための情報とがペアで入っています。私たちの体内では今この瞬間も、生きるために害となる細胞や役目を終えた細胞が猛烈な勢いで死んでいる。髪の毛が抜けたり、皮膚の細胞が垢になったりするのもしあれば、人間の体を作っている 60 兆個の細胞のうち、毎日 8000 億の細胞が死に、死んだ細胞の数だけ、新しい細胞が細胞分裂の形で生まれています。言うなれば、無数の細胞の死が、あなたや私の生を支えてくれているのです。

人体の 90%以上は酸素、炭素、水素、窒素という 4つの元素で構成されています。そのうち酸素は地球上で発生したのですが、炭素と窒素は宇宙のどこかにあった星で 50 億年以上も前にできたのだとか。水素はもっと古い。人間の体は星のかけらでできている。

私たちの遺伝子は 38 億年前に存在したと思われまます。そこからずっと進化を遂げてきて、一度も途切れていない。どこかで途切れていたら、もう人間の存在はありません。私は存在できないんです。ですから人間として生まれてきたということは、それぞれの人が 38 億年間、一度もまけていないことなんです。勝ちつばなしということです。

わずか 24 時間しか寿命のない卵子を目指して数億個の精子が泳いでいき、基本的に一個だけが受精できる。誰もがそんなシビアな競争を経て生まれてきたのですから。時代がどんなに暗かろうと、その人の置かれた状況がどれほどつらいものであろうと、自分なりの目的に向かって歩き続け、希望を抱き続けることで人は幸せになれる。子どもだろうが老人だろうが、すべての人間が、その力を自分という宇宙の内に秘めているのだから。

2010年04月 「変わる世界、立ち遅れる日本」 ビル・エモット PHP新書

日本を「モノ作り立国」とするのは古い考えであり、まったく意味をなさない。なぜなら、製造業とサービス業を区分するのは、もはや無意味だからだ。経済上、唯一意味をもつのは、「知識集約型」と「非知識集約型」で経済活動を区分することである。

日本経済にとって深刻な問題は、生産性が高く、高付加価値な知識集約型活動が十分に行われていないことである。サービス業分野は国際競争にさらされていない。

パートタイマーと非正規労働者の雇用がこの15年間で大きく拡大し、いまや労働者の34%にまで達した。このような労働者は企業から訓練を受けることが少なく、人的資本として蓄積されない。廉価で無教育の未熟練労働者として扱われているのだ。20年前に比べて「知的労働者」はより少なくなっている。

産業活動の基本的要素は、エネルギーを利用して天然資源を新たな製品に転換することであり、これらの製品を生産する企業の直接コストのなかには、汚染や他の環境問題への対価が含まれていない。

資本主義の形態がどのように変容すべきかを考えるとき、それは中国の成功からではなく、三つの弱点、すなわち不平等と不安定性、それに持続性を考えるべきである。世界的経済危機と地球温暖化の科学的根拠のおかげで、この三つの弱点すべてを改革する必要性に迫られている。

2010年04月 「オッサンになる人、ならない人」 富増章成 PHP新書

オッサンの時間が早く進むのはオッサン自身がスローになっていることが原因。オッサンは爪が早く伸びると感じる。

周りのことは気にしないというのがオッサンの最大の特徴。

オッサンが女性と話すときに、ものすごく近づいてくるときがある。女性は「近い！」と迷惑そうな顔をしている。これはあきらかにオッサンのパーソナル・スペース感覚が麻痺している証拠。もちろん単にスケベで、あえて接近するオッサンもいるが。

オッサンはいつも心に寂しさを抱えており、いつも他人に認められたいという意識が強い。だから面白い話が周囲にちょっとでも受けると、うれしくてしょうがないのである。

疲れの原因は乳酸とよばれる疲労物質が原因。加齢するにつれ、乳酸は一晩寝ただけでは体から出て行かない。だからいつもだるさが抜けない。

オッサンにとっては、公共のスペースも自宅のようなもの。だからあらゆる公共の場で他人の目を気にせず自己流の動きをしてしまう。オッサンが動けば動くほど、周りの人は暑苦しさを感ずる。

オッサンは見えない。認識されない。風景の一部。インビジブルである。つまり透明オッサンである。若者は「オッサンはみんな同じ顔に見える」と言っている。オッサンもそれがわかっている。「だれも自分のことなど見ていない」と考えている。そこで気が緩んでますま

すだらしくなる。オッサン自身もほかのオッサンのことなど気にしていない。自分が気にしないものなど、他人が気にするはずもない。インビジブルでもいいが、だらしくならな  
いようにしよう。

加齢を軽く受け流して、ありのままに生きるほうがかえってストレスもなくなり、心身とも  
に健康体でいられる。マイペースで歳のことなど忘れてしまうのが一番いい。

オッサンはオッサンの中から「オッサンくささ」という有害な部分を取り去って、無臭のオ  
ッサンにしていくことしかないだろう。

オッサンについての若者によるアンケート：

説教好き。年齢的なプライドがあって若者の発言を正当化しない。肩についたフケを気にし  
ない。スポーツ新聞とヨレヨレの背広。頭がくさい。裾から素足が見える。口がくさい。半  
径1m以内に近づくと酒とタバコのまじったにおいがする。脂っぼい。やたらと汗をかいて  
いる。耳毛・鼻毛。ベルトの腹が乗っかっている。笑い方がいやらしい。お手拭で顔を拭く。  
あたりかまわず平気でつばを吐く。つまよう枝をくわえる。笑いすぎると咳き込む。運転を  
すると人が変わる。

2010年02月 「ルポ貧困大国アメリカⅡ」 堤未果 岩波新書

さまざまな形の奨学金と、民間金融機関のローンを政府が再保障する学資ローン。金融機関  
から学資ローン債権を買い取る学生マーケティング機構（通称サリーメイ）。国が教育予算  
を減らし、大学に学費を上げさせ、それを払うためのローンを組む学生たちに負担が押し付  
けられている。

2010年02月 「生きづらさについて」 雨宮処凛 光文社新書

注目されたいからオーバードーズしたり、リストカットの跡を見せたりして、どんどんエス  
カレートしていく。で、最後にはみんなの期待を背負って実際に自殺しないといけないとこ  
ろまでいってしまう。けっこうみんな「注目されたい」とか、「認められたい」という願望  
が強いんですね。

生きていくうえで、場の空気を読む必要がものすごくあるわけです。人間関係の中で要求さ  
れることのレベルがとても高い。

難民化してしまうぐらい不安定な生活状況に置かれている人というのは、そもそも社会と  
の回路をほとんど持っていないのです。

これまで日本では、どんなに虐げられても、若者は立ち上がったたり闘ったりせずに、自分を  
責めて死んでいったわけですよ。こうなったのは自己責任であり、自分の心の問題だと思  
い込まされて・・・。

自分たちが「すばらしい」なんて、もうずっと誰にもいわれてこなかった。それどころか、  
だらしがないとかやる気がないとか、バッシングばかりされて、生きること自体が許されな  
いような雰囲気にあったわけです。

じつは派遣業が一番大きな貧困ビジネスですよ。労働市場を流動化すると、流動化した労働力を管理するビジネスが必要になる。それが派遣業です。

個人的にとくに大事だと思うのは、やっぱり「自分を責めないこと」、「自分で問題をすべて引き受けようとしめないこと」

2010年02月 「葬式は要らない」 島田裕巳 幻冬舎新書

結婚式の変化と最近の葬式の変化は、深いところで連動している。背景に「家」の重要性が失われてきた。

出家者は世俗の生活を捨てたわけで、出家の際にまったく新しい人間に生まれ変わったといえる。新しい名前はその象徴である。一方、死者は、生の世界から死の世界へと移るものの出家したわけではない。俗人は、俗人のまま亡くなったはずである。にもかかわらず俗の生活を捨てたかのように戒名を授かる。本来出家という行為と密接不可分な関係にあるはずの戒名が、それと遊離してしまったのである。他の仏教国のヒトが、こうした日本の戒名のあり方を知れば不思議に思うだろう。しかも、日本では、出家であるはずの僧侶が妻帯し、普通に家庭を持っている。それは破戒ではないか。日本の仏教は戒律を蔑ろにしていると考えられても仕方ない面がある。それは日本人自身も感じている。日本の仏教は葬式仏教に成り果てたことで墮落してしまった。そう考える人が少なくない。その墮落の象徴が、戒名と戒名料なのである。

一人の人間が生きたということは、さまざまな人間と関係を結んだということである。葬式には、その関係を再確認する機能がある。その機能が十分に発揮される葬式が、何よりも一番好ましい葬式なのかもしれない。そんな葬式なら、誰もがあげてみたいと思うに違いない。

2010年01月 「生きる意味」 上田紀行 岩波新書

現在私たちに求められているのは、自分自身の「生きる意味」をいかにして見出していかである。これからの時代、私たちは自分の人生を支える意味、「生きる意味」を自分で創り上げていかなければならない。

自分が何をやりたいのか、という自分にとって重大なことをこれまで問うことなしに生きてきた子、自分が何をやりたいのかよりも、いかにしたら周囲に受け入れられるかを優先してきた子、自分が何をやりたいのかもわからなくなってしまっている子。「透明な存在」は自分の存在感の危機に瀕することになってしまうのである。

「どこにでもいそうな私」を生きた若者、彼らは自分自身の「かけがえのなさ」を感じることができない。そして、自分自身を愛し、誇りに思うという自尊心を持ってない若者でもある。私たちの社会はもはや物質的には十分豊かだ。いま真に求められているのは、生きることの創造性、「内的成長」の豊かさなのである。いま私が真に求めているものにどのように出会えるか？それは私たちひとりひとりが、二つのものへの感性を研ぎ澄ますことから始まる。それは「ワクワクすること」と「苦悩」の二つである。夢のある人の周りには夢のある人が自

然と集まってくる。それはある人の夢を聞いたときに「おおっ、それはすごい！」と、ますますエネルギーを引き出してくれるからだ。そしてそんな場では、ひとりが夢を語る事が他の人の夢を刺激する。それは互いに互いを活性化しあうような相乗的エネルギーの場となっていくのである。「苦悩」とはそういった「ワクワク」と「現実」との葛藤の極限状態であって、「苦悩」とまではいかない葛藤もある。それは現実への「違和感」という形で現れてくる。「何か違うんじゃないか」といった感覚である。みんなから「いい人」だと言われ続けて生きてきた、でも自分がとても自由だとは思えない。何か違うんじゃないか。お金儲けを一心にやってきた。でもこのごろ何か違和感がある。何か違うんじゃないか。そんな感覚である。

私たちの社会にいま必要なことは、私たちの「生きる意味」をめぐるコミュニケーションの豊かさを取り戻し、「内的成長」を促す社会を再構築することだ。それは、個人のレベルで言えば、私たちひとりひとりが自分自身の「内的成長」への感受性を高めるとともに、他者の「生きる意味」への配慮ができる人間となることであろう。

私たちがいま目指すべきは、かつてのコミュニティの回復ではない。過去的美質を受け継ぎながらも、その抑圧構造をいったん破壊しそれをリメイクすること、再創造することが必要なのだ。それは「私たちの生きる意味を育むコミュニティ」である。「ワクワクすること」を発見し、他の人の「ワクワクすること」と刺激しあって、相乗的に実現していくようなコミュニティ。そして「苦悩」が受け止められ、深い実存的なコミュニケーションの中から自分の「生きる意味」を発見していけるようなコミュニティ。そうした「内的成長」をもたらすコミュニティの再創造がいまこそ求められているのである。

社会の中に「信頼できるもの」、「私をぜったい見捨てることのないもの」をどれだけ持つことができるか、そのことが私たちの「内的成長」を深く支える基盤になる。現在の日本が目指している「何の支えもないところで自由に競争しなさい、それが自由な社会なのです」ではこの世は地獄だ。支えがあればこそ、私たちは人生にチャレンジすることができる。世界に信頼があるからこそ人生が自由になるのである。

自分自身に対する自尊感情がある人間ならば「人の目」がないところでも、何でもやり放題ということにはならない。自尊感情とは自己信頼と言い換えてもいい。自分自身が尊い存在であると認めている人。尊重されるに足る存在だと感じている人。自己を信頼し、自尊心ある人は、「私としたことが、恥ずかしい」ということはあまりしないし、してしまったにしても反省する。しかし、自尊感情が低く「自分なんかどうせ大したことないんだよ」と思っている人は、人の目がなくなってしまうとどんなことでもできてしまう。自分という存在が、<ワガママ>な行動を律する歯止めにならないのだ。<我がまま>が<ワガママ>に転ずるかどうかが、それはそこに自尊感情があるかどうか大きな分かれ目になる。自己信頼に支えられた<我がまま>の追求は自分を生かし、他者も活かすものとなることが多い。しかし、自己信頼のない<我がまま>は<ワガママ>となって他人に多大な迷惑をかけるものになりがちだ。つまり、現在の<ワガママ>が横行する社会は、私たちひとりひとりの自己信頼、

自尊心が低い社会の裏返しだと言えるのである。

私たちの出発点は、自分自身が「交換可能」な存在であり、「かけがえのない存在である」と感じるができないという「生きる意味の病」であった。そして私たちの到達点は、自分自身で自らの「生きる意味」を創造していく社会である。それはひとりひとりがオリジナリティのある生き方を獲得する社会だと言ってもいい。

かけがえのないあなたが傷つき、苦しむとき、私は私が傷つけられたように感じる。かけがえのないあなたが喜ぶとき、私は我がことのように嬉しくなる。「かけがえのなさ」とは「交換不可能」であることだと私たちはずっと思ってきた。しかし、私たちはともに苦しみ、ともに喜ぶ存在どうしなのであり、私たちの苦しみと喜びは交換可能であるのかもしれない。あなたが私の苦しみを負い、私があなたの喜びに生かされているのかもしれない。

数字を追い求めるのでないことは既に誰もが気づいている。しかしこれまで数十年間日本を支配してきた「建前」や、「人の目」や「無力感」によって、私たちは自分たちの気持ちを自分から表現することを躊躇しているのだ。それは皆が勇気を出して、本音で行動できるかということである。

誰もが自分の「生きる意味」を生きたいと思っている。自分も尊重され、あなたも尊重される社会になればと願っている。冷酷な社会ではなく、あったかい社会を築きたいと思っている。その思いに形を与え、身近なところから一歩を踏み出せば、私たちは自分自身の生き方とこの社会のあり方を変えていくことができる。

2010年01月 「グローバル恐慌」 浜矩子 岩波新書

日本は世界で最大の債権国だ。純貯蓄の規模が世界で一番大きい。そのような国の金利が6年も7年にもわたって実質ゼロの水準に張り付いていれば、世界的にも超低金利になるのは当たり前だ。日本発の資金と金利水準、そして日本の金融政策が世界の金融市場を振り回してきたという点は、示唆に富んでいる。ジャパンマネーが地球を回り、ジャパンマネーが地球を回す。その意味で、今日の日本は、一種、基軸通貨国的な機能を担うようになっている。その国の繁栄が他の国の繁栄に繋がる。その国がみずからの利益を追求することが、世界中にとって利益の向上につながる。利己的であることが、利他的であることに通じる。そのような関係が成り立つとき、その国の通貨は国債基軸通貨となる。

カネはモノと決別したばかりではない。ヒトとも、たもとを分かってしまった。相手の顔がみえない。相手が誰だか解らない。したがって、信用するも何もない。金融が信用できなくなった。人間の営みである経済活動の中でも、金融は最も人間的な信用の絆で形作られている。そうであるはずだった金融の世界から、人間が消えた。ここに問題の本質があるのかもしれない。金融は人間による人間のための営みであることを、地球経済が思い出すべき時が来ている。

2010年01月 「日本辺境論」 内田樹 新潮新書

私たちがふらふらして、きよろきよろして、自分が自分であることにまったく自信が持てず、つねに新しいものにキャッチアップしようと浮き足立つのは、そういうことをするのが日本人であるというふうにナショナルアイデンティティを規定したからです。

「何が正しいのか」を論理的に判断することよりも、「誰と親しくすればいいのか」を見極めることに専ら知的資源が供給される。

戦争を肯定する誰もが「私たちは戦争以外の選択肢がないところまで追い詰められた」という受動的構文でしか戦争について語らない。思想と戦略がまずあって、それが戦争を領導するのだと考える人がいない。

日本の右翼左翼に共通する特徴は、どちらも「ユートピア的」でないこと、「空想的」でないことです。すでに存在する「模範」と比したときの相対的劣位だけが彼らの思念を占めている。

日本人がどうして自分たちが「ほんとうは何がしたいのか」を言えないのは、本質的に私たちが「狐」だからです。私たちはつねに他に規範を求めなければ、おのれの立つべき位置を決めることができない。自分が何を欲望しているのかを、他者の欲望を模倣することでしか知ることができない。

努力と報酬の間の相関を根拠にして行動すること、それ自体が武士道に反する。新渡戸稲造はそう考えていました。私はこのような発想そのものが日本文化のもっとも良質な原型である問う点において新渡戸に同意します。

狭隘で資源に乏しいこの極東の島国が大国強国に伍して生き延びるためには、「学ぶ」力を最大化する以外になかった。「学ぶ」力こそは日本の最大の国力でした。ほとんどそれだけが私たちの国を支えてきた。「学ぶ」力を失った日本人には未来がないと私は思います。

漢字とかなは日本人の脳内の違う部位で処理されている。だから片方だけ損傷を受けても、片方は機能している。漢字を担当している脳内部位はマンガにおける「絵」の部分で処理している。かなを担当している部位はマンガの「ふきだし」を処理している。

2009年12月 「ほんとうは日本に憧れる中国人」 王敏 PHP新書

中国は日本との戦いで2180万人が犠牲になったとしている。第二次世界大戦に関わった国の中でもっとも多かった。空襲を含めて日本人の戦死者は300万人とされている。犠牲者の数は桁が違い、中国を戦場にして多くの犠牲をもたらした加害国の日本に対する思いが日本観の根底になっている。敗戦直後を除いて加害者の立場で反省をする催しが国の手では行われていない。同じ日に、戦争遂行者を祀る靖国神社に国を代表する首相の身分で公式参拝をされれば、中国人は慰霊の行為との矛盾を感じて日本に不信を募らせるのもしかたがないだろう。歴史に学ぶことを日本はしていない、こう思う中国人は多いのだ。

2009年12月 「ハリウッドではみんな日本人のマネをしている」 マックス桐島  
講談社α新書

デパチカは、日本が世界に誇れる宝物。商品のプレゼンテーションは、その場にいるだけで心がワクワクしてくる。単に「モノを売る」って考えだけじゃあ、こういう場所にはならない。デパチカの真の魅力は、ホスピタリティ溢れる日本人のマインドじゃないかな。

2009年12月 「欲しがらない若者たち」 山崎拓 日経プレミアシリーズ

酒を飲むこと自体の価値や魅力に否定的な見方は、20代（2009年時点）では女性よりむしろ男性で強い。がんばって働いて稼ぎ、より豊かな暮らしを実現するという意識の希薄化は、従来生産の主力だった男性の価値観や行動を大きく変えつつある。

彼らは少なくとも70年代以降の日本では初めて登場した「旅行の満足を必要としない世代」である。モノへの関心が薄れた世代が、日常の地道な作業の中に楽しみを見出している。大多数の実態は相当堅実とみていい。満足の源泉はそこに流れる時間や気分、そして誰かとのつながりである。モノはあくまでも主ではなく従であり、体験や共振がもたらす満足の素材にすぎない。そこには格好よさやおしゃれ度、至れり尽くせりの便利さの効用はうかがえない。あまり出費しなくても彼らは満足できる。体育会系のメンタリティも乏しく、こつこつと練習に励むのは得意ではない。日本経済の先行きや今ある職業、自分の稼ぎを冷静に考えて、確かなものは何もないという思いが今の20代の意識の底流にある。

若い層ほど「異性を過ごすより、同性と過ごすほうが気楽だ」と答える人が多い。相手の気持ちの変化を読んで「シンクロ率」を高めようとする傾向は、いまどきの若年層の大きな特徴だ。空気が読みにくい異質な相手との接触を嫌い、同調しやすい友人との時間を好む傾向が、恋愛嫌いの一因となっているようだ。求めるのは、刺激よりも日常的な気楽さやくつろぎ感。

恐らく多くの若い男性は、経済的負担や労力を含め、旧来の男性が背負ってきた役割を積極的にすべて背負いたいとは思っていない。経済力に自信が持てないから結婚に踏み切れないという男性は多い。そもそも静かで小さな世界で暮らしたいし、無理をしてまで甲斐性のある古典的な男になろうとも思わない、という人も少なくないのだ。その一方で女性は経済的にも精神的な充足感のためにも異性のパートナーは必要だと判断している。

「男前」と呼ばれる若い女性はデートより仕事を優先し、メンズの服を着こなし、男性用のカバンを持ち、ごつい腕時計を身に付けて仕事に現れる。ストレスの溜まる仕事の後に食べるのは激辛料理。恋人に気配りを求めるのも若い女性だ。生産と消費の仕組みが大きく変わり、「経済が成長しなくてもみんなが幸福に暮らせる」社会が到来するようなことでもないかぎり、「父子消費」の一方で女性の負担が高まる可能性がある

今の日本では消費の満足のあり方が大きく変わってきた。もはや若年層の消費者はモノを買うことや所有すること自体にかつてほど喜びを見出さなくなった。彼らの満足の源泉は、例えば誰かと一緒にする体験であり、親しい相手と気持ちを分かち合うことである。いまや満足は人と人との間に生まれる。そして個人はその中に溶け込んでいく。消費財はもはや人どうしの関係とコミュニケーションが生み出す満足の材料の一部に過ぎないのだ。こうし

た傾向は成熟の帰結である。急速な経済成長と人口構成の変化が、他の先進国も経験していない次の段階へと日本を押し出している。国民が受け取る満足の総量は、もはや GDP 速報による個人消費の金額では測りにくい。現在、経済活動の外にある満足を、どこまで経済に取り込めるかは疑問だ。満足のかかなりの部分が消費の外にあり続け、GDP が縮小していく可能性がある。

大所高所から理想論を展開する傾向は、今の若者にはあまり見られない。狭い地域の中のさやかな取組みと思われる活動でも、彼らの充実感が高いようだ。支出判断はシビアな彼らだが、自主的に取り組む活動は、金銭的な儲けや得がなくても楽しいのだ。

彼らは経済成長を支えたモラルや成長の原動力となる科学技術の進歩を、さほど重要なものとは考えていない。技術や勤勉さがもたらす物質的な豊かさの意味が薄れる一方で、雅や侘びさびなど、伝統的な価値がもたらす精神的な充足が浮上している。最後の最後に残る消費世界があるならば、恐らくそれは平安貴族の暮らし方がある程度まで下敷きにしたものとなる。今の若者が志向しているのは、和風っぽいインテリアなどの「モノ」を揃えることではなく、王朝文化の時間の使い方とコミュニケーションだと思われる。若者は大きな「物語」を持たない一方で、とても細やかなニュアンスを伝え合う高いコミュニケーションのスキルを持っている。生産のダイナミズムにはかつてほど関与せず、親しい人との関わりを主な場として暮らしているのだ。ただこうした文化は元来、誰かが生産活動を担ってくれていることで成立していた。今の若者が食べていくための生産は、他の誰も担ってくれない。彼らのコミュニケーションは、とても細やかな機微を伝え合っており、ディテールの洗練度合いはどんどん高まっている。それは「モノ」の消費を伴わない最後の象徴交換ともみえる。これまでのように、それらを消費に組み込んでいくことは可能なのだろうか。モノの消費が伸びない中で経済活動の水準を維持していくことは可能なのだろうか。

これ以上便利にならなくてもいいし、高いモノも買わなくてもいい。遠出をせずに近場だけで暮らす中で、新たな発見や喜びを見出せる。こんな若者が働ける場所の確保が最大の課題である。伝統文化や地元での静かな暮らしを志向する若年層は、モノに囲まれて、とても便利な環境で育った高度な消費社会の最後の住人でもある。毎日田んぼの草を取り、畦を補修し、天気や気温を気にしながら水分や養分をコントロールしてもらうには、かなりの手間暇とお金をかけて教える仕組みが必要となる。

「若者があまり消費しない」「自宅と周辺で暮らす」「近代的な価値観よりも伝統文化を重視する」などの傾向が、消費者向けのアンケート調査などで鮮明になりはじめたのは 2005 年の頃。若者自身の変化の多くの部分は経済や社会の成熟の帰結であり、必然的なもの。そしてあまり変えようのないことについては是非を語るのは得策ではない。日本が世界経済に占める地位は今よりも小さくならざるを得ない。そのことを正面から受け止めるべき時期に来ている。成長が難しい中でどうやって国民の「暮らしの満足度」を高めていくかを考えることは非常に大切である。そうした視点で見れば、若年層で進行している価値観の変化やパラダイムチェンジについて考えることは極めて有益なこと。従来の意味での国力を基準に

するか、国民の幸福の総量を基準にするかによっても、若年層への評価は変わってくる。しかし国内で生み出せる付加価値は、コンテンツや環境対応型商品にせよ持ち続ける必要がある。地域独自の価値を持つ産品は、今後の日本では一段と重要になりそうだ。

2009年12月 「人間の器量」 福田和也 新潮新書 子どもが幼稚園に、学校に行って、無事帰ってくるだけで、奇跡のようなことである。我が国の先人たちの蓄積と今日汗を流しておられる人のおかげで安定した社会秩序が存在しているからです。

2009年12月 「世界カワイイ革命」 櫻井孝昌 PHP新書

アニメやポップカルチャーを使った文化外交をしていると、世界各地で出会う人たちから熱い歓迎を受けることと並んで、そこに悪意の空気を微塵も感じない。

ファッションやアニメといった、世界の人たちに愛されている日本の「財産」を使った文化外交は、世界の平和にもきっと貢献できると信じている。

「日本は伝統と現代性をミックスさせているところがすごい。日本の文化のすべてが好きです」日本が好きな若者たちの心の声だ。そしてその数は世界中で爆発的に増えている。このことにいちばん気づいていないのは、当の日本人自身なのである。

アニメ・マンガから日本語、日本食、ファッションへとつながっている日本ブームは、それを作っている国への敬意として、日本自体への共感や関心を高めている。

「世界は争いに満ちているけど、少女の目線から見れば状況は違ってくると思う。カワイイは私の生き方のポリシーです」

ロリータや制服はファッション。コスプレはキャラクターへの愛情表現

19世紀後半、輸出された陶磁器の包み紙として使われていた浮世絵にフランスの画家たちが驚き、それがゴッホら印象派を生み出す原動力となった。「日本のアニメはとにかくすごい。ちがう」がいま多くの世界の若者のイメージなのだ。ファッションに関しても、パリコレに代表される、富裕層がメインの対象であった「オシャレ」を、カワイイという名のもとに、日本ではごく一般の高校生や若者までがしていると世界の人たちが思っている。日本は世界にこんなにも好かれていることを知ると同時に、世界に好かれるものを作り出している原動力を意識し、伸ばしていく必要性に、いまこそ日本人は迫られているのではないだろうか。この現象は一種のムーブメントみたいな一過性のものではない。「カワイイ」が世界に確実に定着した「文化」になっている。

日本人が思っているよりはるかに、世界は日本が好きなのである。日本という国を、いわば父親や母親のように思っている世界の若者たち。「ぼくたちは日本のアニメで育てられているんですよ」「制服を着ると、日本人になれたような気がするんですよ」フランスやイタリアをはじめヨーロッパ各地を訪問するたびに聞かされる、若者たちのこうした本音。

21世紀に入って、日本が世界の若者の価値判断に決定的な影響を与えた概念は、「カワイイ」である。そこには「東京的なもの」「日本的なもの」というニュアンスが含まれている。

アニメからファッション、日本語まで、21世紀に入って、同時多発的に世界中に巻き起こっている JAPAN 熱。これは、いうまでもないことだが、日本人が仕掛けて起こった「熱」ではない。世界の人たちが、自分たちで「勝手に」見つけてくれて、広げてくれたわけである。

最終工程がなされた場所で商品に印刷される「メイド・イン・ジャパン」から、企画やデザインをした国を消費者に意識させる「メイド・バイ・ジャパン」への転換。日本という国は、世界レベルで見たとき、じつに「アイコン」をたくさんもっている国である。歌舞伎、相撲、お茶、生け花、芸者、アニメ・・・ロリータや制服ファッションも、いまや世界の人がそれを日本のものと明確に意識する点で、そこに組み込まれるアイコンのひとつなのである。日本人のなかに、新しいものをつくりだすことにクリエイティブ魂を燃やす「伝統」のようなものが脈々と引き継がれている。

2009年12月 「いやな世の中」 勢古浩爾 ベスト新書

なにもなかったんだというそれはちがう。「すべて」があった。その時代にあるものはその時代のすべてである。

2009年12月 「人間の器量」 福田和也 新潮新書

子どもが幼稚園に、学校に行って、無事帰ってくるだけで、奇跡のようなことである。我が国の先人たちの蓄積と今日汗を流しておられる人のおかげで安定した社会秩序が存在しているからです。

2009年12月27日 「こんな予算はありません」 与謝野馨 文芸春秋

日本の国家予算はここ十年、おおよそ歳入が50兆円、歳出が80兆円。借金が30兆円でやってきた。国債を乱発すれば長期金利が上がる。800兆円を超える借金をしている国は、金利が1%上がっただけで返済負担が8兆円増える。「子ども手当」をはいめ民主党のマニフェストは継続性ある約束ばかりである。国の借金は将来の世代へのツケ。利子の支払いの増加は、国が国民のために有効に使えるお金が減るということ。

2009年度の税収見込みが38兆円であるなら、国の歳出（借金返済額を除く）も38兆円に抑えるべき。そうすると国が新たに抱える債務は利払い分だけとなる。このときの経済成長率と利子率が等しければ、国の債務の対GDP比は一定に保つことができる。

2009年10月 「幸福の方程式」 山田晶弘 携書

モノを所有する幸福を求めているのではなくて、モノを所有する先にある幸福を得るための手段として消費する。

最近の価格志向は、日々の食材のように、強烈に欲しいわけではないけれど必要なもの、本

当は買わずにすませたいけど必要だから仕方なく買うものをより安く手に入れようとするものである。それは生活のコストとして買っているだけなので、買うことによる喜びはほとんど得られません。

消費は、幸福を得るための「道具」として、幸福を支えていく。

もっともうらやましいと思える人は「夢を持っている人」

ある水準まではお金は幸福に必要なだが、それ以降はお金で変えるものの向こうにある幸福を求める。

寺山修二は、多くの人に出会い、交わり、影響を受け合うことを幸福と定義していた。自分の中で幸福だと感じているだけではなく、自分の生き方を他人から祝福され、また、自分が他人の幸福に役立っていると実感することで、自分も幸福になる。

自分の存在を肯定すること、自分の居場所が仲間の中にあること、この二つが人々の切実な人生の課題になっています。自分で自分の存在を肯定するとはすなわち「自尊心」です。自分の居場所が仲間のなかにあるとは、すなわち、他者からの「承認」です。この二つは幸福の正体を解く大きな鍵となりそうです。幸せになるためには、自分を承認してくれる他人を必要とする。人々が求める幸福は、主観と客観の間、人とのつながりのなかにあるのです。太宰治のように「生まれてきてすみません」と思っているような人は、決して自分を幸福だとは思わない人でしょう。重要なのは、自分の人生経験の積み重ねの中で、自分を肯定し、自分を好きになるよう努力して「自尊心」を高めていくことです。自分を好きになれないことは幸福の敵なのです。

わたしたちは、他人から認めてもらえる自分を好きになりたいのです。だから、自分を認めてもらうためには他人が必要なのです。ひとりよがりな自己愛ではなく、他人の中にいる自分を好きになれる人が幸せな人です。ですから、本来、自分で自分を肯定するという意味である「自尊心」にも、他人の存在が必要なのです。

なぜ「承認」が必要なのかというと、ひとつは、他人の心の中にいつも自分が存在することの確認を得られるから。もうひとつは、自分を承認してくれる相手に対して自分が影響力を持つことができるからです。組織や仲間承認されるということは、そこに自分の「居場所」があるということです。誰かが自分のことを見てくれているという自覚が人をよい方向に導くものです。

いま経済的に豊かかどうかよりも、将来に夢と希望を持てるかどうかで幸福を決定するのは、いまの人々が求めているのは、お金で買ったモノに囲まれる幸福よりも、人に囲まれる幸福なのです。つまり、人間関係のなかに将来にわたって持続的な自分の居場所を見つきたいと望んでいるのです。人間関係を続けるためには、お互いを必要とし合う場が不可欠です。仕事はその格好の舞台となります。

幸福になるために消費するのではなく、幸福だから消費する。つまり、モノを買うためにはまず幸福を感じていることが前提となる。幸福を感じるから人と接しようという気持ちが起こり、その結果、ネタを作ったり、喜びを与えたりする余裕も生まれる。だとしたら、仕

事がまさに幸福の原動力となるのではないのでしょうか。生活に幸福のアップスパイラルを取り入れる。そして狭い範囲でも、ウィーク・タイでもいいので、人とつながることをあきらめない生活を始めること。

経済が成長することでしかわたしたちは幸せになれないのではない。

2009年10月 「おひとりさま」で幸せですか 金美齢 PHP

「あなたねえ、まだあなたはペーペーの若造でしょう。ペーペーにとっては、人の言うことを聞くのも仕事のうちよ。服従して、我慢するのも仕事のうち、ということよ。ママだって、あなたからの話だけでは、公平に見てあなたがただしいかどうかわからないでしょう。でも人間として、人間の誇りが許さないんだったら、ケンカしたら。そういうことだったら、大いにやりなさい。それで出世が遅れるようだったら、それはそれでいいじゃない。万一クビになっても、ママはそれでもいいわよ」

家族の「絆」というのは、すべての人間関係、コミュニケーションの原点だと私は思います。コミュニケーションをうまく築けない、人との「距離」をうまくつかめない――そういう人は、結局、自分の「居場所」を見つけられない。自分の「居場所」を見つけられないために、なかには、その不遇感を社会にぶつける人もいます。それを擁護するかのように、「このような人間を生んだ社会に原因がある」とコメントする文化人を見受けますが、違和感を禁じえないのは私だけでしょうか。社会、地域、職場、学校に安住できない人がどんどん増えているのだとすれば、その人たちが家庭という「居場所」を努力して作ろうとしてこなかったことが主要因だと私は思います。「派遣切り」に遭った人たちは「頼れる人なんて誰もいない」と言いますが、それは実家や家庭をはじめとした大事な人間関係を断ち切ってきたからではないのでしょうか。

2009年08月 「選ばれる男たち」 信田さよ子 講談社現代新書

還暦を過ぎたアラカンの女性の視点から、同世代の男性たちについて述べてみたい。カウンセリングで出会う多くの女性たちが、さまざまな経験を積み、結婚生活の裏面も見た多くの中老年女性たちが、どれほど男性に失望、時には絶望しているかは意外と知られていない。彼女たちが何を考えているかについて、社会はほとんど関心をもっていない。おばさんたちだってイケメンは大好きだ。もう男などこりごりだというおばさんたちが、王子と呼ばれる若者に夢中になっている。そして結婚の夢破れて夫になんの希望ももてなくなった女性たちが、どこかで夢の男を求めている。

イケメンは徹底的に女性目線である。そこには中立的基準などなく、女性が眺めてイケてると感じる男、つまり女性が主観的にそう判断する男がイケメンなのである。いまや若い女性たちに人気絶大なイケメンたちには共通点がある。彼らの評価において、男性の性的魅力の占める割合は極小化されているのだ。

実はおばさんたちが青春時代に内面化してきた夢の男は、男にとって都合のいい姿だった

のではないか。

夢の男とは「女らしい」男であると自覚したとき、ひょっとして私たちはこれまでにない視点で自分の性をとらえることができるかもしれない。

心の友を求める彼女たちはなぜ異性の友を求めないのだろう。この世のどこかに、ロマンティックラブイデオロギーを具現化する異性がまだ存在しているという希望をなぜ託さないのだろう。たぶん彼女たちは、その年齢になるまでの長い長い歳月をかけて、あきらめ、失望、落胆をまるで地層のように重ねてきたのではないだろうか。それは一言で表すならば絶望の塊である。そして絶望は人生と折り合いをつけない女性にこそ訪れる。望みを捨てないからこそ絶望するのであり、折り合いをつけてしまった女性には、絶望すら現れない。だから私は、絶望するおばさんたちのことが大好きなのである。

対象から外されることは、ひとつの解放でもある。客体の位置から引きずりおろされることで、私たちはやっと男性の視線に邪魔されることなく、主体としての位置、見る主体の位置を確保できた。

更年期を過ぎた女性は女性としての存在価値もないに等しいと思われている。夫の介護要因として、孫の養育係としての存在価値はあっても、そこに性的欲望の対象として、ましてその主体としての座は用意されていない。

性的欲望のにおいをかぎとれる同性だけが、ヨン様ファンのおばさんたちを軽蔑する。なぜなら、彼女たちにとってあるべき中高年女性の姿は性的欲望をあらわしてはならないからだ。もしくはそれを否認しなければならないからだ。しかし、それは彼女たちが自主的に構築した姿ではない。男性たちがそれが常識であるとして作りあげた「おばさん像」ではない。

見下ろす対象である相手は、こちらの欲望を無抵抗に受け入れざるを得ない。そんな安心感があって初めて可能になる支配をおばさんのヨン様ブームに見て取れる私は、かなり意地が悪いのだろうか。

擬態の底にひそむものは、美しくて、圧倒的劣位にある対象を思う存分支配したいという欲求である。ひざまずき傷ついた対象を救うかに見えて、対象にとってなくてはならない存在になることで、性的にも独占できるような気分になる。迂遠とも思える対象支配だがこれが性的でなくてなんだろう。

王子にはちゃんと自分の家族がいるし、親の代理などしなくてもいい。純粹におばさんたちは、王子をその目で鑑賞し愛玩することに専念できる。

根性なんかもう何の意味ももたないのにそれを強要される子どもたち、家事の不備を努力が足りないと批判される妻たち。それは明らかな正義である。正義をふりかざして迫ってくる夫に対して、反論などできない。だから言葉にはできないぶんだけ、夫に対する恨みや不満はもう限界に達しているかもしれない。

純白で、少年と男のあわい、境界の美を備えている彼らは、より純化したかたちでおばさんの性的欲望の対象となる。おまけに、夫とは正反対のライフスタイルをやすやすと実現して

いるのだ。美しく、ひたすら一方的に愛でることが許され、そこには何ら、ウェットで家族的な要素は介在しない。その伸びやかな存在そのものが隣にいる夫に対する強力なアンチテーゼなのである。直接に反論することなくとも、夫と正反対の外見や信念を体現している王子に熱中することが、間接的な夫へのレジスタンスなのだ。だからこれからも続々と何人も王子たちが登場することだろう。

夫たちは仕事の世界で培った価値観を家庭で増幅し、企業社会において抑圧された何かを家庭で挽回しようとしているかのようだ。

おばさんたちがその年齢になるまでに生きてきた歳月をサバイブしてきたと表現することにためらいはない。彼女たちにとっての結婚生活は、どこか詐欺にあったようなものだった。入り口にかかっている看板と入った世界の内実が、あまりに大きくはずれていたからだ。その落差、失望感、出口のない感覚をそれなりに生きてきたことは、やはりサバイブだろうと思う。

娘の摂食障害でカウンセリングにやってきた彼らは、娘の行為をまるで昆虫の生態観察のように仔細に表現する。自分はその場にはいないかのような、まるで隠しカメラそのものであるかのようなあの立ち位置を得意げに披瀝する彼らの話を、私は時として腹立たしく呆れながら聞く。

企業における男同士の嫉妬のすさまじさは、女性の目からは見えないように隠されてはいるが、女の嫉妬の比ではない。

彼らが不登校や摂食障害の子どもに向かって言う言葉はおそろしくステレオタイプだ。「甘えるな」「自分に負けてどうする」「人生努力だ」「努力してできないことはないぞ」。。それを聞いている子どもたちの顔つきが目に浮かぶようだ。あまりの価値観へのへだたりに、抵抗する気も失せるだろう。そのことに父親はほとんど気がついていないということが、さらに絶望を深くする。

男性は女性から評価される客体にはならず、発言する女性を評価する主体の座は明け渡さない。

王子を讃えるおばさんは、いつぼうでおじさんたちを客体として評価しているのだ。そもそも自分たちは賞味する主体であり、される客体などと考えていないおじさんたちを厳しく査定する。50 を過ぎたメタボで頭髪の薄い男は、自分の身体を鏡に映したことがあるのだろうか。何日も着続ける背広の体臭とべったりと塗った整髪料のにおいの混合が、どれほど吐き気を催させるものか知っているのだろうか。ダークスーツの背広の肩に降り積もった白いフケが、生理的嫌悪をもたらすことも知らないのだろうか。。

30 代後半からの人生が、エンドレスにも見えるゆるやかな下り坂でしかにのならば、それはそれでけっこう残酷なことかもしれない。子育てに狂奔したり、娘の人生にとりついて生きなそうとするエネルギーが、その恐怖から遠ざかるためだとすれば、なんとなく納得がいく。

必死に幸せな家族を作ろうとする彼女たちの前に立ちふさがっているのが、何あろう夫な

のだ。あの結婚式の日に神の前で愛を誓ったその男性が、何十年かが過ぎると自分から幸福を奪う存在へと変貌してしまうということ。そう感じている多くの女性たちの話を聞いてきたせいか、諸行無常とまではいかないが、家族愛の儚さを痛感させられる現実が日常的にすら感じられる。

絶えず上か下か、どちらが強いかわか、といった戦闘モードでしか夫婦をとらえられない男性のあまりに多いことに驚く。彼らは決して下に位置し、弱い立場にいることを認められないのだ。外の世界では負けることがあっても、過程という自分が天下の場所では、負けたり下にいることは認められない。要は彼らが天下をとっていないとだめなのだ。

50歳以上の男性は、ほとんど感情を語る言葉をもたないといってもいい。それは世代の持つ特徴なのか、企業社会に馴致され尽くした結果なのかはわからない。いずれにしても、会議のプレゼン調、議会の答弁のような語りかたしかできない彼らには辟易することもある。針でそとついたら赤い血が流れるのだろうか？と確かめたくなる。

確かなことは、妻たちは定年退職後も夫のめんどうを見続けることを期待されているということだ。妻業に定年はない。

この世には、絶えず上下関係を前提にすることでしか人間関係を結べない人と、そうでない人の二種類しかいないと思うことがある。多くのDV被害を受けた女性たちの話を聞くと、夫像に共通していることがある。一歩家庭から外に出ると、穏やかで腰が低いのだ。近所の人にも愛想良く、職場では上司に従順な態度をとり、友人に対しても細やかな気遣いを見せたりする。

選ばれる男の条件：

殴らない男（物を投げつけない男）

あまりに多くの夫たちが、一歩家庭の外に出れば虫も殺さぬ顔をしながら、外界から遮断された私生活において妻を日常的に殴っている。生命に危険を及ぼしたり骨折や聴力障害をもたらすに至る暴力はほとんど夫から妻に行使される。

怒鳴らない男・暴言を吐かない男

タバコを吸う行為がほとんど自動的であるように、妻への暴言が日常行為のひとつとして習慣化されている夫は珍しくない。

「誰のおかげで食べていられるのか」これがトップである。そして驚くほど多くの妻たちがこの言葉を夫から投げかけられ、反論不能だからこそ、この上ない屈辱感にさいなまれているのだ。

「出て行け」「出て行くぞ」正反対の二つの台詞だが、同じことを言っている。どちらも妻が出て行けないことを知っているので吐かれる言葉なのだ。

「女のくせに」わずかでも教養のある男性は、こんな言葉は妻以外の女性には決して吐かないだろう。古色蒼然とした女性差別用語である。民主主義の皮をかぶった家父長主義者。

夢の男の条件：

君は僕と同じ人間だが、君を思い通りにはできないと考えること。

やさしいこと。やさしさとは、無闇に物を買ってあげたり、こまごまと気を回して面倒を見ることではない。相手の女性が、自分の感じ方や考え方を尊重された上で、ほっとできること、つまり、女性が安心と思えることこそ、やさしさの根幹である。

見上げること。彼女を見上げる彼の正直なまなざしは、きらきらしているだろう。他者からの視線によって育つものは、年齢や性別にかかわらず多い。それに、もっと身近な人を見上げることが気持ちがいいものだ。

ほめること。私たち女性は年を重ねるごとにほめられる回数が減っていく。しかし、いくつになってもほめられる存在は何よりも必要だ。競い合うのではなく、違いを享受するという姿勢である。勝つ喜びではなく、自分にはないもの、ないことを楽しむという姿勢からほめ言葉は生まれる。

かわいいと思われること。完璧さではなく、どうしようもない自分を見せることのできる勇気を持つ男性こそ「かわいい」のであり、夢の男の条件のひとつなのである。これからは見下ろす女性の視線を受け止めながら、かわいい男として愛でられることに快樂を覚えることになろう。たぶんそれはこれまで開発されてこなかった感覚なのだから、きっと彼らの世界は広がるはずだ。男たちの一生懸命な姿は、見ていてとてもかわいいのである。スポーツ選手の姿は本当にかわいい。若ければ若いほどかわいいのだが、中高年でも、自らの必死さを貫禄で糊塗しようとさえしなければ、けっこうかわいいものである。

夢の男は、男にとっての夢の女と同じ。決して暴力などふるわず、疲れているパートナーをいたわり、ゆっくり話を聞いてやる。そして相手を見上げ、相手から「かわいい」と思われる。

女は強いのだ。女が男を守ってきたのだ。だから、おばさんたちはウェストや二の腕が太くなり、胴回りは強靱なほどに脂肪の帯でおおわれるのだろう。そして強風にもなびかないほどに寸胴な体躯に変貌していく。妻に先立たれた後、生きるのもままならなくなる多くの男性の姿は何を物語っているのだろう。時には後を追う男性もいるし、一気に認知症になだれ込む男性もいる。それを世間では妻を心より愛した男の姿としてもてはやすが、勘違いもいろいろ加減にして欲しい。単にこれまで生活全般にわたって彼を守ってきた妻がいなくなったので、生きていけなくなっただけの話である。まるで母を失った幼子のように。

夢の男とは「女のような」男のことだったのだ。そう、女のような男であると思われることを誇らしく思い、むしろ素晴らしいと思える男こそ、おばさんたちが選びたい男なのである。毎日職場で戦っている女性たちが、私生活において安らぎと奉仕を与えてくれる男性を求めることになんの不思議もない。

自分の言うことを聞いてくれる素直な男、無理強いなどしないやさしい男こそが望ましいことは、彼女たちの過酷な生活を見てもうなずける。自分にとってどんな男性が都合がいいか、生きていく上でどんな男性を選べばいいかという基準が、初めて女性本位に定まりつつあるのかもしれない。やさしくて、女性から見て実に都合のいい男性が望まれることはある種の必然なのだ。

母になることは、子どもに対して強大な権力を有することを意味する。そして母性愛という言葉で正当化される分だけ、権力行使に無自覚となる危険性をはらんでいる。結婚という制度に参入することは、日本に脈々として流れ続ける家族の常識に巻き込まれるということの意味する。その中であって、男性がなお草食系であり続けるためには、多くの軋轢と戦う覚悟が必要となる。自然体で流れに逆らわないことを旨としてきた草食系の男性に、そんな覚悟があるのだろうか。二人でコンビニ弁当を食べて仲良くテレビを見ながら肩寄せあって楽しんでいたカップルが、夫と妻になり父と母になることで徐々に変化していくプロセスをいやというほど見せられてきたから抱く老婆心なのである。結婚は表向き男女の愛情によって成立するものであるが、裏面では男性に対して多くの権力を付与する制度である。このことに、男性自身がどれほど自覚的であるかが分かれ目になるだろう。

選ぶのは女性なのだ。なぜなら、結婚によってはるかに多くのものを失い、はるかにリスクを背負うのは女性なのだから。人生がかかっているからこそ、女性こそが男性を選ぶのだ。

2009年08月 「日本人と死の準備」 山折哲雄 角川新書

人類がもしもノアの大洪水のような危機に襲われ、その大多数が死滅する運命を免れ得ないとわかったとき、「われもまた死に赴こう」。わずかな生き残りへの可能性を拒否して、死の運命を甘受する多数の側に身を寄せようとする生き方だ。そのような決断の根底にあるものが、仏教の無常という認識ではなかったのか。この世に存在するもので永遠なるものは一つもない。ブッダの簡明な無常観である。生き残ることの限界をわきまえたモラルである。人生五十年時代の人生モデルが「死生観」だったことを思い起こそう。死生観とは生と死を同等の比重で考える人生観とっていいだろう。生きることはすなわち死ぬこと、死におもむくことを生の重さとともに引き受ける。そういう人生観だったのだと思う。

マザー・テレサが言っています。「人生のたとえ 99%が不幸だとしても、最後の 1%が幸せならば、その人の人生は幸せなものに変わる」

「愛」とは何でしょう。愛とは自分の時間を相手に捧げることではないでしょうか。

人間は生まれたとき、両親から三つのものをいただいてこの世に生まれてきます。この体とよい心、そしてもう一つが魂です。では死というからだの変化によって、よい心と魂はどこに行くとお思いでしょうか。天国と地獄？いいえ、そうではありません。看取ったもののよい心と魂に宿るのです。そして送った母のよい心と魂が、私のよい心と魂に重なり、母とともに美しい庭の景色を見ることができたのです。

作家で僧侶でもある瀬戸内寂聴さんはこう言われました。「人間は旅立つとき、50m プールの 50 倍もの膨大なエネルギーを縁のある人に渡していく」

宗教が教える幸せには、「手放す」ことによる幸せもあるということです。持っているものを手放して、人に使ってもらう。あるいは安心や思いやりを与えることも大切です。

日本人は今、老いを忌避し、その先にある死を見ないように、考えないようにしています。死ぬことを忘れています。死にかけても、なんとか生きよう生かそうとする。

お年寄りの役割、責務はなにか。自然界の“掟”を破り、他の生き物の“いのち”を奪ってまで生かされているのは何ゆえか。それは「死にゆく姿を見せるため」です。われわれは死ぬために生かされている。ちゃんと死ななければいかんのです。いい加減な死に方をしてしまったら次の人たちが困る。

「死に方」は「生き方」です。いい加減に生きて、死ぬときだけちゃんとというわけにはいきません。「死」は人生の締めくくり、総決算ですから、それまでどういう生き方をしてきたか、周囲とどうかかわってきたかが死の場面に反映されるのです。

人生、何が幸せかといって、目をつぶる瞬間に「俺の人生もいろいろあったけど、それほど悪くはなかったよな」と思えて、まわりの人間に「みんなに会えてうれしかったよ、ありがとう」と感謝して死ねれば、これがたぶん最高ではないかと思えます。

「還り」の生き方の基本は「老いに寄り添い、病は連れそう」ことです。

「死にゆく姿」を見せるのは最高の“遺産”になります。親が子どもや孫に死んでいく姿をありのまま見せる。ワシにはもうすることがない、そんなことはありません。最後の重要な役割がまだ残っています。ぜひ、それを果たして死んでいただきたい。

死際には腹も減らず、のども渴かない。だから食べたくも飲みたくもないんです。体がだんだん死になじんできく。「脱水」状態は、体の水分が少なくなって、血液が濃く煮詰まることを意味します。これもまた、意識レベルが低下して、ボンヤリした夢うつ状態に導いてくれます。だから、恐ろしさも淋しさも感じることなく死ねるんです。自然はそんなに苛烈じゃないんです。

もともと「死」は自然で穏やかだったはず。それを濃厚な医療の関与が、不自然で悲惨で非人間的なものに変貌させてしまったんです。医療の利用を最小限にして、もういちど昔ながらの「自然で安らかな死」を取り戻しましょう。

2009年08月 「しがみつかない生き方」 香山リカ 幻冬舎新書

いまや“ふつうの生活”“ふつうの幸せ”が手が届かない最高の贅沢となっている人たちが増えつつある。

臨床心理学者河合隼雄氏は言う。「売春は魂が傷つくからアカンのや。とくに援助交際は、まだ未熟な女の子たちが行うので、なおさら魂が傷つきやすいので、もっとアカン」

不特定多数の男の人に体を売る仕事を長く続けると、精神のどこかがどうしようもなく疲れて、傷ついてしまって、そのダメージは自分が思っているよりもずっと大きくなっている場合が多い。

イラクの人質や、タトゥーを消したがる女性に激しいコメントを寄せる社会現象は、「人間の狭量化が進んだ」ということではないか。いつ自分がテロの犠牲者になるかわからない。少しでも自分と違う人間は排除しておくに越したことはない。また、競争社会になる中で、ちょっとでも弱い人や自分と違う人のために立ち止まっていたら、自分が蹴落とされて“負け組”になってしまう可能性がある。だからなるべく他者のことなど考えずに自分の安心、

安全、進歩や成長のことだけ考えて生きるしかない。

世間は「自己責任でやったのだから、いまさら泣きごとを言うな」とシビアな目を向ける。しかし彼ら自身が刹那主義を脱してより長い目で自分や社会を見られるようになったかという、それは違う。逆に、彼らは寛容さを失い、さらに狭い視野でしかものごとをとらえられなくなっている。

大切なのは、身体的にもそして精神的にも、年齢相応の成熟や老化をきちんと果たすこと。人は生まれれば必ず年を重ね、若さを失って老いを迎え、少しずつあるいは急速に衰えて死を迎える。それ自体のいったいどこに、悪い点やマイナス点があるというのか。そして老いを迎えた人たちが、若い人たちに多少の手間をとらせたり迷惑をかけたりするのも当然のことではないだろうか。

夢がかなわなかった 99%の人が「途中であきらめた自分が悪いのだ」と自分を責め、「好きな仕事につけないのだとしたら、働く意味がない」と失望しながら、仕方なくパンのために働き続けなければならないのだとしたら、それはひどく残酷なことだといえる。

とりあえず自分に与えられている仕事、役割、人間関係に力を注ぎ、何かがうまくいったら喜んだり得意に思ったりすればいいし、そうでないときは悲しんだり傷ついたり、また気持ちを取り直して歩き出したりする。そんな一気一憂を積み重ねながら、どこから来たのか、どこに向かっているのかもわからないまま、人生の道を歩いていくその足取りの中で、しみじみとした味わいや満足が得られるのではないか。

努力したくても、そもそもそうできない状況の人がいる。あるいは、努力をしても、すべての人が思ったとおりの結果にたどり着くわけではない。これはとてもシンプルな事実である。

誰もが成果を10倍にしたり自分の意思を強く伝えたりスペシャリストになったりする必要はないはずだ。それよりも「私だって一歩間違えれば大変な失敗者になるかもしれない」「いまうまくいっているのは運がよかったから」という紛れもない事実をしっかり認められる力を身につけることができたなら、そのほうがずっと自分と人のためになるはずだ。

人生には最高もなければ、どうしようもない最悪もなく、ただ“そこそこで、いろいろな人生”があるだけなのではないか。だとしたら、目指すモデルや生き方がどれくらい多様か、というのが、その社会が生きやすいかどうか、健全であるかどうかの目安になるといえるはずである。

いったいつから、生きることがこんなに大変なことになってしまったのだろうか。みな「十人並みの人生でふつうの幸せが手に入ればそれでいいんです」などと言う。ふつうに生きて、ふつうに幸せになるってそんなにむづかしいことなのか。いったい何がどういうことになり、これほど“ふつうの幸せ”が手に入りにくいものになったのであろう。

ふつうに頑張って、しがみつかずに自分のペースで生きていけば、誰でもそれなりに幸せを感じながら人生を送れる。それで十分、というよりそれ以外の何が必要であらうか。

2009年08月 「老化も進化」 仲代達矢 講談社新書

老いるということはね、新鮮なことなのよ。日々刻々、新たに鮮烈な体験をするんだもの！  
老いを！天然自然の厳粛なる変化を！あなたたちが青春なら、私は今、赤秋の時代、赤い、  
赤い真っ赤に燃える秋よ！

老いることは、ワインが琥珀色に熟成するようなもので、到達してはじめてわかる深い味わい  
いや素敵なのもあるはず。

2009年08月 「年をとって初めてわかること」 立川昭二 新潮選書

老いは来るものでも迎えるものでもない。こちらから参入していくものである。参入とは聖  
なるものへ入っていくことである。その意思さえあれば、「しづかなる老」に参入し、「老の  
しづけさ」を楽しむことができるのである。

仕合せにも大きい仕合せ、小さい仕合せがあるようだが、老後の仕合せとは、小さい仕合せ  
を次々と新しく積み重ねていくことではないか。

なぜ老人が長生きをしたがるか、すこしわかってきたように思うのです。おもしろいからで  
す。年をとると気持ちにも時間にも多少ゆとりができますが、そこで改めてあたりを見回す  
と、今まで気づかなかったことで、なんとまあ興ふかいことがたくさんあるか、おどろくの  
です。

しのびよる黄昏を前に、夕陽が最後の光芒を放つ。その一瞬の華やぎを自分なりに楽しむ、  
それができる人こそ人生の達人といえよう。

自分は愛されていると思っている女はいつも魅力があるが、愛されているという意識を女  
に与える男性もまた幸福を味わうことができる。

愛は純粹なほど無分別であり無目的であり、そして無痕跡である。その無価値にこそ真の価  
値があると思うことができるのは、たがいに目に見えない魂でつながれていることを感じ  
あっている者同士である。そして彼らは無痕跡に耐えられる。

青春の恋は激しく燃えるものであるが、老年のそれはひっそりと眠りをさそうあたかな  
ものである。

衰えて死がおとずれるそのときは、おのれをそれまで生かしたすべてのものに感謝をさ  
さげて生を終わればよい。しかしいよいよ死ぬるそのときまでは、人間は与えられた命をい  
とおしみ、力を尽くして生き抜かなければならぬ。

あとからくる者へ人生の真のメッセージを伝えられるのは、世間的な成功者や有徳者や有  
識者といわれる老人ばかりではない。むしろ人生に落ちこぼれた老人、心に痛みをもった老  
人、病気や障害をかかえた老人たちのほうかもしれない。

「いき」な人といえば若い人にあてはまらない。若くはないが色っぽい人のことをいう。頑  
健な人も「いき」とはいえない。弱弱しいがしんの強い人が「いき」な人である。贅沢で華  
美な人は「いき」ではない。野暮な人である。つつましくかざらないが洗練され魅力ある人  
が「いき」な人である。こうした垢抜けした「いき」な生き方を、今日風にいえば「おしゃ

れ」な生き方ともいえる。

おりんの母もすすんで檜山へ行った。そして家族の命をつないでくれた。今度は自分が檜山に行って子や孫の命をつないでいく。息子や嫁は檜山へ行く自分を悲しんでくれる。だからなおさらかれらのために檜山に喜んで行ける。息子や嫁もいずれ檜山へ来るのだ。。。

2009年08月 「いい人をやめると楽になる」 曾野綾子 祥伝社黄金文庫

人よりでしゃばらないこと、功績を人に譲ることができること、黙っていること、密かに善行をなすこと、自分の持っているものを見せびらかさないこと、などは、すべて力のない人にはできない行為なのである。そしてそれらのことが気品とか品位とかの本質になっている、と私は思う。

私たちはお父様を殺した人を許すことを、一生の仕事としなければいけないのよ。

生きる人の姿勢は大きく分けて二つの生き方がある、と私はよく思うのである。得られなかったものや失ったものだけを数えて落ち込んでいる人と、得られなくても文句は言えないのに幸いにももらったものを大切に数え上げている人と、である。

規則というものは、ほんとうは自分に厳しく、人には甘く、という二重適用ができるくらいの含みがあるべきだと私は密かに思っている。

私ね、このごろ思うんだけど、愚かさでも、執念でも、誠実でも、悪意でも、何でもいいから、できるだけ濃厚にやり遂げることなのね。そうすれば死ぬとき、納得がいくような気がする。はた目を気にして、自分のしたいことをしないでいると、死ぬとき、誰かを恨みそうな気がするの。

その最後の瞬間に私たちの誰にとっても必要なものは、愛だけなのである。愛されたという記憶と愛したという実感の両方が必要だ。

2009年08月 「命の値段が高すぎる」 永田宏 ちくま書房

国家においても個人においても、人命が経済的に重過ぎる時代に突入した。

後期医療制度がスタートして、すでに1年以上が経過した。この1年間に、後期高齢者は50万人以上も増えた。前期高齢者は100万人以上も増加した。そのため前期・後期を合わせた高齢者医療費は1兆円近くも増加した。

現在、消費税による税収は約10兆円と言われている。つまり消費税率1%あたり約2兆円ということになる。

2009年07月 日経記事／客員コラムニスト田勢康弘

テレビのニュースで記者が首相に気軽に退陣の話をする。一国の首相を侮辱するような質問が映像で世界に配信される。内閣総理大臣の座が鴻毛のごとく軽くなっている。

いま必要なのは国家運営の最高責任者を支えるしっかりしたシステムを作ること。いかにすぐれた人物でも、裸同然でメディアの監視にさらされたら、ひとたまりもない。まわりが

支える態勢になっていけばまだしも、足の引っ張りあいでは国家の運営などおぼつかない。指導者にもっとも必要なのは、自分よりすぐれた人材をまわりに配することだといわれる。大事なことは指導者個人だけではなく、そのシステムそのものなのである。立派な政治家はなぜ出てこないのか、などとないものねだりをするよりも、凡庸な人物でもつとまるような国家運営のシステムをつくるべき。

2009年04月 「アフリカ・レポート」 松本仁一 岩波新書

アフリカの様子がおかしい。半世紀ほど前に植民地支配から独立し、豊かな資源を手し、希望に満ちた前途に踏み出したはずだった。しかし今、多くの国で人々は貧困にあえぎ、国民同士の殺し合いまで起きている。なぜなのだろう。

「アフリカの時代」といわれた1960年代から間もなく半世紀になる。南アフリカ共和国の新政府誕生を最後に、アフリカ大陸はすべてアフリカ人のものとなった。植民地からの国家の独立は達成された。

だが、アフリカは別な問題を生み出した。「国家」は独立したのだが、多くの場合、その政府は「国民」を代表するものとはならなかった。多くの政府は国民の富を奪い取るばかりで何もしてくれず、国民は相変わらず地べたにはいつくばって暮らさざるを得なかった。

2008年5月末、日本政府が主催する「第四回アフリカ開発会議」が横浜で開かれた。政府はアフリカ53か国中40か国の首脳が参加したことで会議は成功だったと評価し、今後5年間で対アフリカ政府援助を倍増すると宣言した。

しかしアフリカ首脳の多くがこのような状態であるとき、日本が彼ら首脳を相手とした旧態依然のアフリカ外交を続けていいのだろうか。ましてや、倍増を宣言したODAの多くの部分は円借款、つまり返済が必要な融資である。これまで30年間、いかに多くのアフリカ政府首脳者が援助国からの借款を私物化し、債務のツケが国民に回されてきたか。今回、倍増を約束した日本のODAが、むしろアフリカの大衆を苦しめることにつながるのではないかと心配になる。

2008年9月 「石油がわかれば世界が読める」 朝日新書 瀬川幸一

WTI原油の実際の生産量は1日30万バレル程度であり、NYMEXにおけるWTI原油先物市場における1日の取引高が5億バレルを越える水準であることを考えると、市場では実物原油の1700倍もの先物取引が行われていることになる。現物の裏付けのない紙だけによる「ペーパーバレル」が取引され、原油そのものの受け渡しはほとんどなく、買値と売値の差額決済だけが行われている。

わが国は8000万台近くの自動車を保有し、年間6100万キロリットルのガソリンと3800万キロリットルの軽油を燃やしている。これは全エネルギー消費量の20%に上り、およそ2.6億トンの二酸化炭素を排出している。

もし火力発電の電気を車に使ったら、元のエネルギーの40%だけ利用されるから、ガソリ

ンで走った場合の 2.5 倍の二酸化炭素が出てしまうことになる。

日本の遊休耕作地を利用しても 100 万キロリットルのバイオ燃料製造が限度。

2008 年 08 月 「お金崩壊」 青木秀和 集英社新書

2007 年 3 月末で、国の総債務残高は 834 兆円（国債 535 兆円、財投債 139 兆円）。地方の総債務残高は 201 兆円。個人金融資産合計は 1533 兆円。

2006 年度第 3 四半期末現在で、年金資産のうち市場に回されているのは 81.9 兆円程度。これは総資産残高約 170 兆円の半分弱だから、残りの半分強は財投債や財政融資資金特別会計経由で財投機関への「貸付金」と財投債以外の「国債」に張り付いてしまっているということだ。将来の国民は、これを租税などで返していかなければならない。要するに、政府はこれから先、現役世代に実に過酷な負担を強いることを予定しているのである。現役世代は、保険料を払うことで退職世代をまず支え、なおかつ、「運用収益」を確保するために退職世代が残した積立金を借りてきて利子を付けて返す経済活動をしなければならない。さらにこれに、退職世代の過去の年金資金「運用」が残した超巨額な累積財政赤字の後始末が加わる。まさにトリプルパンチの債務負担を負わされるのだ。

私たちはいま、国債、地方債、交付税特別会計借入金、財政投融資の借金、金融システムを安定化するための借金など、ありとあらゆるところに公的な借金や債務を抱えている。その利息を借金で払い続けているため、時々刻々と借金残高は自動的に増え続けているのである。

国際収支上でドルの黒字を出すのはその黒字をアメリカ財務省に貸し付けているのと同義。金・ドル本位制は、通貨に「量」という最小限の物理的限界を課していた。その重しをドル・ショックは取り去った。金融システムの中枢に据わる者たちは、「欲望をお金の量に合わせる」経済を脱し、逆に「欲望にお金の量を合わせる」ことができる経済を手に入れたのである。

お金を金融システム内でエンドレスに運用し「お金がお金を生む」という、いかなる意味においても実体を伴わないバブル経済が世界経済を覆い、「世界の金融システムは急速に巨大なカジノ以外の何物でも」ないものに変容していた。

世界の金融資産総額は、1995 年からの 10 年間で 6095 兆円からなんと 1 京 3800 兆円にも達している。にもかかわらず、この間に世界総生産は 3000 兆円から 4000 兆円になっただけすぎない。

全米の耕地の約 20%に植えられているハイブリッド・コーンは 25.4kg 当たり 1.9Lit 以上の石油を消費して作られている。石油の助けを借りなければ生産できない食物を「ペトロフード」という。ペトロフードからバイオエタノールなどというのは、ブラックユーモア以外の何物でもない。

石油に代替するエネルギー資源を追い求め続けることは、「裕福な人々」が最後の人間となる特権を「やみくもに買いに走る」行為に見える。

石油生産がピークに達すると更新性エネルギーの装置生産も困難になる。石油がほかのエネルギー手段の生産に使えるうちに、こうした装置をしっかりと作っておく必要がある。これからは、どのような場所で、どのような発電方式を用いようとも、「発電量に需要を合わせる」という原則を守らなければならないだろう。これまでの発電のあり方からすれば180度の転換だ。

「金・ドル本位制」崩壊後に現れたのは、石油が<金>に置き換わってドルの価値を実質的に保障する「石油・ドル本位制」であった。米ドルの担保が<金>という実物資産から石油という消耗性資源に完全に取って代わられた。

ドルが正真正銘の「完全なる不換紙幣」になることで、米国債本位制＝石油・ドル本位制という基軸通貨構造が完成したのである。

原油取引が拡大して世界中がドルを欲しがり、連邦準備制度がドルを増刷しようとするれば、まずその根拠となる米国債が増える必要がある。逆に、原油取引が増えて、世界に出回るドルが増えるほど、世界は米国の財政赤字拡大を容認しなければならない。そして、世界のどこかの国が増えた分の財政赤字＝米国債を引き受けることになるわけだ。

この石油を「人質」ととった米国流のやり方も、その人質ゆえに、石油供給がピークに達するところでピリオドが打たれる。それがいつかは分からない。だが早晚確実にやってくる。使える石油が残っているうちに、その石油をできる限り節約して使いながら、「脱石油文明」構築への道筋を見出すのが一番理にかなっているし、生き抜くためにはそう動くしかないではないか。

資本は富であるというよりは負債である。蓄積した資本はすべて破壊へと向かう同一の広いハイウェイの上であり、その蓄積がもたらす自然界への負債は決して古びたり磨耗してしまったりすることなく、ただ一方的に増大する。

拡大を続けることで自己維持を図る金融経済からすれば、資源は有限であってはならないし、捨て場も枯渇してはならない。自然は無限でなければならない。

お金を際限なく増やし続けることは、逆にお金の「値打ち」を台無しにする。値打ちとは、評価、価値、品位、品格のことをいう。

お金に健全性と永続性を備えさせるのは、結局は、自然環境と折り合いがついた健全で持続可能な社会経済を築けるかどうかにかかっている。お金を「信用するに足る」ものにするためにはそれ以外に方法はない。

2006年08月 「本気で愛されたい、あなたの恋愛心理学」インターネットからの引用

『弱き者、それは男。強き者、それは女』

◎今週の恋愛法則◎

外側が大きくて、強そうなものほど、内面は繊細でモロいもの。

内と外が違うからこそ、バランスが保たれる

自殺者の七割以上、八割近くが男性だという統計データがあります。

お化け屋敷や絶叫マシンでも本当に怖がっているのは男性で、女性は怖がっているフリをしているだけなのだとか...

もし男性が男性のまま、お産を経験したら、想像を絶する痛みとあまりの恐怖で死んでしまうのではないかと言う説もあります。

そう...、【外側が大きくて、強そうなものほど、内面は繊細でモロいもの。内と外が違うからこそ、バランスが保たれる】

という恋愛法則の通り、「弱き者、それは男。強き者、それは女」なのです。

そこを多くの人が勘違いしています。

「男が強くて、勇ましい」ではありません。

「女が弱くて、女々しい」ではありません。

内面的、精神的には、圧倒的に女性の方が強いのです。

それはスピリチュアルな視点から男女の違いを診ても明らかです。

女性は体内に子宮という小宇宙を抱えています。

女性は身体の器官として、身体の一部として、既に最初から「宇宙」が組み込まれているのです。

女性は元々、宇宙とつながっている生き物なのです。

男性は女性を通じてしか、宇宙とつながれないのですから、これでは男性がどんなに頑張ってみても女性に敵うはずがありません。

男性は母親の子宮から生み出され、へその緒が切り離された瞬間から、宇宙とのつながりが絶たれてしまうのです。

それが男性だけが抱える、消えることのない「根源的不安」の正体です。

それが、過去の歴史において聖者と呼ばれる人が、皆、男性だった理由です。

悟りを求めるのは、自分が切り離されていることに対する不安の裏返しに他なりません。

男性の持つ「根源的不安」が、男性を悟りの道へと導いていざなうことになるのです。

男性の身体が大きくて、腕力や体力があるのは、内面の弱さを解消し、バランスをとるために他なりません。

もしも女性の方が身体も大きく、体力も勝っていたら、男性は女性に対して勝ち目がなくなります。

はっきり言って、奴隷になるしかありません（笑）。

男性と女性の間でバランスを整えるために、男性の方が外見的に大きく強くなるように神様が配慮して下っているのです。

それを額面通りに受け取らないことが大切です。

男性がどんなに身体を鍛え、お金や権力を握ったとしても、内面的、根源的に女性に「勝つ」ことは出来ません。

それをお互いが理解することが大切な視点です。

男性は自分の「弱さ」を素直に認めて、それをサポートしてくれる女性に感謝を伝えること

です。

女性は自分の「強さ」を明確に意識して、男性を大らかに優しく、包み込んで上げる役割に喜びを見出すことです。

その上で、お互いの違いを認め、それぞれの特性をバランス良く活かしていくことが、男性性と女性性を統合することにつながり、「真のパートナーシップ」に至る道へと、つながることにもなるのです。

**【「恋の扉」を開ける魔法のキーワード】**

『強いことが良いことでも、弱いことが悪いことでもない。自分を知り、バランスを整えていくことが、パートナーシップの真の目的』